

# 大都市における高齢者の学習活動と家族・親族関係 ——〈神戸市シルバーカレッジ〉受講生へのアンケート調査の結果から——

安達正嗣（名古屋市立大学）・猫田千里（甲南大学大学院）

序 章 調査研究の概要（猫田）

第1部 高齢者の学習活動と友人形成（猫田）

第1章 回答者の基本的属性

第2章 受講の動機と感想

第3章 友人形成と課外活動

第4章 受講後の評価

第5章 受講修了後の交流への希望

第2部 高齢者の家族・親族関係（安達）

第6章 家族・親族関係の実態

第7章 家族・親族との交流状況

第8章 イエ意識と介護意識

第9章 高齢者施策に対する意識

第10章 第2部のまとめと研究課題

謝 辞（猫田・安達） 調査票

## 序 章 調査研究の概要

### 1. 研究の目的

高齢化の進展とともに、わが国における高齢者像は大きく変容をせまられている。かつての「隠居」ということばに代表されるような、家庭を中心とした静かでおだやかなものから、とくに都市部の高齢者において、社会へ出かけてどんどん活発に活動し、都市生活をゆたかに享受するような高齢者像へと、意識・実態ともに変わりつつあるといわれている（森岡ら、1994）。

筆者らは、1997年春、兵庫県神戸市に設置された高齢者の生涯学習機関である、＜神戸市シルバーカレッジ＞において「学生（※以下では受講生とする）の生活と意識にかんするアンケート」を実施する機会をもった。本調査研究の目的は、その調査結果をもとに、都市高齢者の意識と生活実態の一端をあきらかにすることである。

近年、筆者のひとりには、高齢者を研究するばあい「個としての高齢者」の視点が不可欠であることを提唱している（安達、1999）。本稿ではきわめて基礎的な分析にとどまるが、基本的な立場として、この「個としての高齢者」の視点から、その学習活動および家族・親族関係をとらえたいと考える。すなわち、本稿は、福祉や家族による扶養の対象としての高齢者の側面というよりも、主体的にみずからにとって好ましい高齢期の学習活動のありかたや家族・親族関係を選択していこうとする側面をあきらかにするところみである。

### 2. 対象と方法

筆者らは、＜神戸市シルバーカレッジ＞受講生を対象に、おもに選択肢方式をもちいたアンケート調査をおこなった。調査項目については、本報告書の巻末に資料として調査票を掲載している。

まず、＜神戸市シルバーカレッジ＞について、若干概略をのべておきたい。＜神戸市シルバーカレッジ＞（※以下、シルバーカレッジと称する）は、兵庫県神戸市によって、平成5（1993）年に設置された高齢者のための生涯学習機関である。神戸市北区の6,000平方メートルの広大な敷地にある緑ゆたかな総合福祉ゾーン、「しあわせの村」の一角をしめている。運営主体は、財団法人こうべ市民福祉振興協会で、行政上は神戸市保健福祉局地域福祉課の管轄となっている。

シルバーカレッジは、全国各地に設置されつつある、いわゆる「高年大学」のひとつである。「シルバーカレッジ」という名称にもうかがえるように、そのなかでもとくに、先進的でユニークな試みのひとつである。まず、その設置目的として、たんなる娯楽や趣味の提供にとどまらず、受講生が課程修了（卒業）後、地域で社会還元活動をおこなうための機会を与えることをめざしていることが、大きな特徴である。そのために、高齢者の生きがいの創造だけでなく、地域コミュニティ活性化のための福祉人材の養成などを目的として構想されている。

シルバーカレッジへの入学資格は、神戸市内在住の57歳以上のものになっており、修業年限は3年である。なお、受講料は、年額24,000円（別途資料代4,000円）である。

学習課程は、福祉・コミュニティコース、国際交流コース、生活環境コース、総合芸術コースの4つのコースからなっている。各コースの定員については、表1に示す。平成9年4月現在の学生総数は1,172名である。学習内容は、各コースの専門講義のほかに、コース共通のものとして共通講義とスポーツがある。講義日数は、表2に示すとおりである。このほか、3年生については（平成10年度以降は2年生から）、「グループ学習」の時間がもうけられており、ゼミナール方式がとりいれられていることなどが特徴としてあげられる。

表1 各コースの修業年限と学年定員

学習課程	修業年限	学年定員
福祉コミュニティコース 国際交流協力コース 生活環境コース 総合芸術コース	3年	100名 120名

表2 各コースの講義及び講義日程

講義種別		講義日数			
		1年生	2年生	3年生	
共通講義	講義	25	20	8	
	スポーツ	11	11	11	
専門講義	福祉コミュニティ	20	26	35	
	国際交流・協力	20	26	35	
	生活環境	20	26	35	
	専門共通	2	4	4	
	総合芸術	美術・工芸	(18)	(22)	(31)
		園芸			
	音楽・文化 食文化				

表3 年間行事とその他の活動（平成9年度）

共通	1年生	2年生	3年生
入学式 学園祭 健康診断 環境美化運動 3学年交流会 卒業式	学園生活案内 自主企画	学習説明会 ディスクゴルフ 自主企画（講演 会および居住区 ごとの懇親会）	歌舞伎見学 学習説明会 自主企画 （ローンボウルズ） 自主企画（映画鑑賞） 自主企画
ホームルーム JOY LUCK DAY（毎月17日前後） ボランティアセンター（各ボランティアグループの連続機構） KSC社会還元センター（卒業生による自主的な機構）			

講義以外の活動としては、月1回のホームルーム、ジョイラックデイ（ボランティア活動の日）がある。このほか、学園祭、各種スポーツ大会、3学年交流パーティーなどの年中行事もおこなわれている（表3）。さらに、受講生の自主的な活動として、さまざまなクラブやボランティアのグループがあり、活発な活動がおこなわれていることが、シルバーカレッジの特徴である。クラブやボランティア活動のグループの一覧は、表4のとおりである。

表4 クラブ・ボランティア活動一覧表（平成9年度）

ク ラ ブ 活 動	あじさい山歩会	絵画同好会	有機栽培研究会
	うまいもん倶楽部	銀謡会1	歴史探訪クラブ
	カラオケ部	銀謡会2	箏曲
	コーラス	写真	詩吟同好会
	2期生ゴルフ	社交ダンス	環境・資源／生活情報調査研究会
	3期生ゴルフ	書道	旅行同好会
	テニス	川柳	卓球
	パターゴルフ	茶道（煎茶）	花の教室
	バドミントン	中国語同好会	茶道（裏）同好会
	フォードダンス	陶芸	今昔の会
	ワープロ・パソコン	俳句	カレッジ労演
	囲碁同好会	邦楽	銭太鼓同好会
	囲碁同好会	民謡同好会	ゴルフクラブ
	英語同好会	名画鑑賞会	
ボ ラ ン テ ィ ア 活 動	村内仮設訪問		
	村内仮設新聞づくり		
	木工（便利木工）		
	花づくり		
	近辺清掃		
	給食		
	陶芸（陶芸による交流・寄贈等）		
	絵画（ボランティア絵画指導等）		
	ロビーの会（村内施設との交流等）		
	茶道（ " ）		
	クッキーの会（施設等への菓子の寄贈）		
	シルバーケーキ（ " ）		
	マイカー運転（送迎援助等）		
	人形劇（施設訪問）		
小学校（小学校の訪問）			
ビデオ撮影（学内行事や活動記録等）			
手仕事（施設への手芸品の寄贈等）			
コーロKSC（コーラスによる交流・施設訪問）			
ベトナム人支援（在神ベトナム人・小中学生らへの学習指導）			
邦楽（施設のふれあい訪問等）			
あかりの会（視覚障害者の介助等）			

筆者のひとりである猫田は、シルバーカレッジの講師として、福祉コミュニティーコースのグ

ループ学習を担当した関係から、事務局の協力のもとに、受講生の実態を明らかにするための調査を企画・実施した。

調査の対象、実施、回収の状況については、以下のとおりである。

#### ①調査の対象

調査の対象は、シルバーカレッジの受講生である。シルバーカレッジ事務局の協力を得て、全4コース全3学年の受講生を対象とした。

#### ②調査の実施

調査票の配布は、シルバーカレッジ事務局に依頼して、各学年ごとの共通授業後に配布してもらい、当日は質問紙記入の時間的余裕はなかったため、後日、事務局にもうけられた箱に各自提出してもらった。調査の実施時期は、平成8年3月中旬であった。ちょうど1年間の講義が終了し、第1期生がシルバーカレッジ初の卒業生として、受講期間を終えようとするころであった。

#### ③回収の状況

配布した調査票は1,075票、回収数は733票であった。全体の有効回収率は68.2%である。学年別の配票数と有効回収率は表1のとおりである。

集計にあたっては、SPSS for Windows Ver.6.0.1を使用した。以下では、以上に述べた調査をデータとして用い、分析した結果を報告する。

表5 回収の状況

学 年	配票数	回収数	回収率
1年生	423名	303	74.6%
2年生	308名	215	69.8%
3年生	344名	215	62.5%
全 体	1,075名	733	68.2%

## 第1部 高齢者の学習活動

——<神戸市シルバーカレッジ>受講生の場合

高齢者福祉の課題といわれて、まさきに思い浮かぶのは、たいてい、病気になった場合の医療や介護、生活支援など、要介護高齢者にたいする対策であろう。

たしかに、これらは高齢社会において、重要かつ緊急の課題である。しかし、直井（1994）も指摘するように、要介護高齢者は、高齢者全体の6.3%（寝たきり高齢者、寝たきりに近い高齢者、比較的重い障害のある高齢者の合計、東京都『高齢者の生活実態』）にしかすぎない。つまり、「ある一時点で介護を要する高齢者はごくわずかで、大多数の高齢者にとっては、この問題は『老後』とよばれる期間のうちごく短時間の問題」（直井、同）なのである。

したがって、高年大学のような、比較的元気な高齢者を対象にした生きがいづくり支援のための事業が、高齢社会における福祉においてますます重要になってくる。ふたたび直井のことばを借りれば、「元気で暇な長い老後をどのように生きがいをもって過ごすか、という問題は、たしかに、介護問題ほど「生きるか死ぬか」という深刻さはないが、長さで該当者数からみれば、それ以上に重要な問題だともいえる」からである。

第1部の目的は、元気な高齢者たちの学習活動を支援する高年大学のひとつ、<神戸市シルバーカレッジ>の受講生のプロフィールを概観するとともに、受講の目的および受講後の評価などから受講生の学習活動の実態とニーズをあきらかにすることである。本文の構成は以下の通りである。まず、第1章での基本的属性についてたずねた結果をしめし、回答者となったシルバーカレッジ受講生のプロフィールをあきらかにする。つづいて、2章では、シルバーカレッジ受講の動機および受講後の感想、つづいて第3章で友人形成と課外活動、第4章では受講後の評価、最後に、第5章として受講後の交流への希望について、受講生にたずねた結果を報告する。

### 第1章 回答者のプロフィール

本章では、基本的属性についてたずねた一連の設問の集計結果について報告し、回答者のプロフィールをあきらかにしたい。

#### 1. 性別

回答者の性別は、表1-1にしめたように、男性61.5%、女性37.9%と男性のほうが圧倒的に多くなっている。シルバーカレッジでは、男性の受講生が6割近くを占めているという特徴があり、回答者の男女比率とはほぼ一致している。

表1-1 回答者の性別

男	61.5% (451)
女	37.9% (278)
不明	0.6% (4)
	100.0% (733)

## 2. 年齢

年齢については、表1-2にしめすとおりである。質問用紙では、年齢を直接書き込んでもらい、集計時に「59歳以下」「60～64歳」「70～74歳」「75歳～79歳」「80歳以上」の6つの年齢層に割り当てた。60歳代後半がもっとも多く、37.8%であった。ついで、70歳代前半が25.1%であり、65歳から74歳のいわゆる前期高齢者が全体の6割をしめている。また、60歳代前半が19.0%、50歳代後半が1.2%で、50歳代後半から60歳代前半の、どちらかという「中年」に近い世代も2割あった。75歳以上の後期高齢者は、あわせて10.1%とほぼ1割にすぎなかった。最高齢者は87歳(2名)、もっとも若かったのは58歳(5名)である。

表1-2 回答者の年齢

58～59歳	1.2% ( 9)
60～64	19.0% (139)
65～69	37.8% (277)
70～74	25.1% (184)
75～79	7.4% ( 54)
80歳以上	2.7% ( 20)
	100.0% (683)

## 3. 健康状態

回答者の健康状態についてであるが、表1-3-1にしめすとおり、シルバーカレッジの受講生が対象ということもあって、比較的健康であるという人が多く、「ひじょうに健康」「どちらかといえば健康」という回答が、あわせて8割以上であった。なお、配偶者のいるものについては、配偶者の健康状態もたずねている。その結果をしめたのが、表1-3-2である。配偶者については、「どちらかといえば病気がち」「病気がち」が、あわせて13%あった。

表1-3-1 回答者の健康状態

ひじょうに健康	18.6%(126)
どちらかといえば健康	73.7%(498)
どちらかといえば病気がち	7.4%( 50)
寝込むことが多い	0.3%( 2)
	100.0%(676)

表1-3-2 配偶者の健康状態

ひじょうに健康	19.1%(107)
どちらかといえば健康	66.8%(375)
どちらかといえば病気がち	12.7%( 71)
寝込むことが多い	0.3%( 8)
	100.0%(561)

#### 4. 配偶者の有無と家族形態

配偶者の有無については、表1-4-1のとおりである。配偶者がいると答えたものが、8割あった。配偶者がいないもののうち、離れないし死別と答えたものは84.8%で、未婚と答えたものが15.2%であった。

男女別でみると、サンプル数は、圧倒的に男性が6割と多いにもかかわらず、配偶者がいないと答えたもののうち、83.6%が女性であった。さらに、配偶者のいないもので、未婚と答えたものについては、圧倒的に女性の割合が多かった（表1-4-2）。

表1-4-1 配偶者の有無

配偶者あり	83.8% (553)
なし	16.2% (107)
<配偶者なしの内訳>	
未婚	15.9% (17)
離・死別	84.1% (90)
(n=660)	

表1-4-2 配偶者の有無（男女別）

	男性	女性	計
配偶者あり	74.7%(422)	25.3%(143)	100.0%(565)
配偶者なし	16.4% (22)	43.9%(112)	100.0%(134)
<配偶者なしの内訳>			
(未婚)	(4.8%) (1)	(95.2%)(20)	(100.0%)(21)
(離・死別)	(17.1%)(20)	(82.9%)(97)	(100.0%)(117)
(n=699)			

家族形態については、質問用紙では同居家族について複数回答でたずねたのみであったので、値の再割り当てをおこなった。カテゴリーは「ひとり暮らし」「夫婦のみ」「未婚子や親と同居」「この家族らと同居」「その他」の5つに設定した。集計の結果は表1-4-2のとおりである。「夫婦のみ」が50.5%とかなり多く、過半数をしめている。他は、「ひとり暮らし」10.5%、「未婚子や親と同居」23.8%、「子の家族らと同居」13.6%であった。

表1-4-2 同居家族（複数回答）

ひとり暮らし	10.5% (77)
夫婦のみ	50.5% (356)
未婚子や親と同居	23.8% (168)
子の家族らと同居	13.6% (96)
その他	1.1% (8)
100.0% (705)	



## 5. 職業経歴

もっとも長く従事した職業については、表1-5-1のとおりである。もっとも多かったのが、管理職（33.1%）で、以下、事務職（15.3%）、専門的・技術的業務（12.8%）、専業主婦（14.9%）、教師（7.3%）とつづく。

表1-5-1 もっとも長く従事した職業

管理職	33.1%	235
専門的・技術的業務	12.8%	91
事務職	15.3%	109
販売業務	2.8%	20
運輸通信業務	1.3%	9
技術工・生産工程作業	2.7%	19
保安業務	2.1%	15
サービス業務	1.0%	7
教師	7.3%	52
自営業	3.5%	25
農林漁業	0.1%	1
専業主婦	14.9%	106
その他	3.1%	22
合計	100.0%	(711)

現在の就業状況については、表1-5-3にしめすとおり、無職とするものが圧倒的に多く、88.4%である。現在も何らかの職業についているというものは、10.0%、求職中とするものが、1.6%であった。

表1-5-3 現在の就業状況

している	10.0% (62)
していない	88.4% (549)
求職中	1.6% (10)
合計	100.0% (733)

## 6. 世帯収入

世帯収入についてたずねたところ、もっとも多かったのが200~400万円で、39.8%であった。つづいて、400~600万円も30.6%であり、以上をあわせると、200~600万円という範囲に7割が集中していることになる。いっぽう、200万円以下という回答が5.0%、1,000万円以上、1500万円以上の回答をあわせて5.9%であった。

表1-6-1 世帯収入

200万円未満	5.0% ( 32)
200～ 400万円	39.8% (257)
400～ 600万円	30.6% (198)
600～ 800万円	12.4% ( 80)
800～1000万円	6.5% ( 42)
1000～1500万円	4.5% ( 29)
1500万円以上	1.4% ( 9)
合 計	100.0% (647)

生活費の源泉としては、自分の年金が35.5%、これに配偶者の年金（8.5%）をあわせると、44.0%の人が生活費の源泉をおもに年金にたよっている（表1-6-2）。

表1-6-2 おもな生活費の源泉

自分の勤労収入	1.3% ( 5)
配偶者の勤労収入	7.1% ( 27)
子どもの勤労収入、仕送り	3.4% ( 13)
自分の公的年金など	67.9% (260)
配偶者の公的年金など	16.2% ( 62)
私的な年金	1.6% ( 6)
家賃地代などの不動産収入	2.6% ( 10)
計	100.0% (733)

## 7. 住居形態および居住年数

住居形態では、一戸建ての持ち家とするものが74.1%と圧倒的に多かった。その他は、持ち家の集合住宅が15.5%、賃貸の集合住宅が7.6%とつづいている（表1-7-1）。

表1-7-1 住居形態

持ち家・一戸建て	74.1% (535)
持ち家の集合住宅	15.5% (112)
賃貸の一戸建て	0.7% ( 5)
賃貸の集合住宅	7.6% ( 55)
仮設住宅	0.7% ( 5)
その他	1.4% ( 10)
計	100.0% (722)

居住年数では、10年～30年未満（54.7%）がもっとも多く、過半数をしめている。さらに、30年以上とするものが26.2%であった（表1-7-2）。

表1-7-2 居住年数

1年未満	1.0% ( 7)
1～3年未満	5.8% ( 42)
3～10年未満	12.3% ( 89)
10～30年未満	54.7% (395)
30年以上	26.2% (189)
計	100.0% (722)

## 8. 居住区

回答者の居住地区については、表1-8にしめす。シルバーカレッジのある北区が30.0%と最ももおおくなっている。他は、垂水区、須磨区とつづく。なお、市外とするものが若干名(0.6%)あるが、これは、平成7年におきた阪神淡路大震災の影響で、シルバーカレッジ受講期間中に、市外にうつることになったケースがあったためである。

表1-8 居住地区

東灘区	6.2% ( 45)
灘区	4.0% ( 29)
中央区	3.9% ( 28)
兵庫区	6.7% ( 48)
北区	30.0% (217)
長田区	4.9% ( 35)
須磨区	17.0% (123)
垂水区	18.4% (133)
西区	8.6% ( 62)
市外	0.6% ( 4)
計	100.0% (733)

以上、回答者のプロフィールを概観してきた。これらのデータによって、シルバーカレッジ受講生像の一端をあきらかにできたと思われる。つづいて、次章では、おもにシルバーカレッジ受講にかんする意識と実態をあきらかにしたい。

## 第2章 受講の動機と感想

本章では、シルバーカレッジを受講した動機、および受講後の感想についてたずねた結果について報告する。

### 1. 受講の動機

受講生は、そもそもどういう動機からシルバーカレッジを受講したのだろうか。「学習内容に興味があるから」「健康の維持のため」「趣味や教養を深めたいから」「仲間や友人にさそわれて」「さまざまな人と接する機会をもつため」「講師が魅力的だから」「学習内容を地域活動やボランティア活動に役立てたいから」「家族や周囲の人にすすめられて」「時間があいていたから」「なんとなく」「その他」の11項目から、3つを選んでもらうかたちでたずねた。なお、以下では、未回答のケースをのぞいて集計している。

#### (1) 全体の傾向

表2-1-1は、受講の動機についての集計結果をしめしたものである。もっとも回答の比率が高かったのは、「趣味や教養を深めたいから」(26.3%)で、2番目は「さまざまな人と接する機会をもつため」(23.7%)であった。以下、「健康の維持のため」(15.0%)、「学習内容に興味があるから」(14.2%)、「ボランティアや地域活動に役立てたいから」(10.0%)とつづく。

回答の比率が低かったのは、「友だちに誘われて」(3.1%)「家族や人にすすめられて」(3.1%)「なんとなく」(0.6%)などの消極的な動機の項目であった。

項目	全体
学習内容に興味があるから	14.2 (275)
健康の維持のため	15.0 (289)
趣味や教養を深めたいから	25.3 (490)
仲間や友人に誘われて	3.4 (65)
さまざまな人と接する機会をもつため	23.7 (459)
講師が魅力的だから	1.5 (29)
地域活動やボランティア活動に役立てたいから	10.0 (193)
家族や周囲のすすめ	3.2 (62)
時間があいていた	0.2 (3)
なんとなく	0.6 (12)
その他	2.9 (56)
全体	100.0%

※( )内はケース数。

※※あてはまる項目を3つ選択。

#### (2) 男女別・年齢層別の集計結果

男女別に集計した結果は、表2-1-2のとおりである。男性では、もっとも回答の比率が高かったのは「趣味や教養を深めたいから」で、27.2%であった。以下、順に、「さまざまな人と接する機会をもつため」(23.3%)「健康の維持のため」(14.7%)「学習内容に興味があったから」(13.6%)「地域活動やボランティア活動に役立てたいから」(10.0%)とつづく。

いっぽう、女性では、「さまざまな人に接する機会をもつため」が、24.7%で第1位であった。以下、「趣味や教養を深めるため」(22.6%)「学習内容に興味があったから」(15.3%)「健康の維持のため」(15.2%)「地域活動やボランティア活動に役立てたいから」(10.0%)という順に回答が多くなっていた。

つづいて、年齢層別にみた結果を、表2-1-3に示す。(※なお、年齢には、「64歳以下」「64～74歳」「75歳以上」の3つの層を割り当てている。以下の分析でも同じ。)結果をみると、年齢層ごとにそれほど大きな差はみられず、「趣味や教養を深めたいから」「さまざまな人に接する機会をもつため」という受講動機がどの年齢層でも1位、2位をしめている。ただし、「65～74歳」「75歳以上」では「趣味や教養を深めたいから」が1位だったのに対し、「64歳以下」においては、「さまざまな人に接する機会をもつため」が27.8%で「趣味や教養」(22.4%)をぬいて1位であった。また、「健康の維持のため」という項目について、「64歳以下」で11.3%、つづいて「65～74歳」で15.1%、さらに「75歳以上」では19.1%と、年齢が上がるにつれ回答の比率も上がっていたのが特徴的であった。

表2-1-2 シルバーカレッジの受講動機(男女別) (n=727)

項 目	全 体	男 性	女 性
学習内容に興味があるから	14.3 (275)	13.6 (159)	15.3 (116)
健康の維持のため	14.9 (287)	14.7 (172)	15.2 (115)
趣味や教養を深めたいから	25.4 (489)	27.2 (318)	22.6 (171)
仲間や友人に誘われて	3.4 ( 65)	3.3 ( 39)	3.4 ( 26)
さまざまな人と接する機会をもつため	23.8 (459)	23.3 (272)	24.7 (187)
講師が魅力的だから	1.5 ( 29)	1.5 ( 17)	1.6 ( 12)
地域活動やボランティア活動に役立てたいから	10.0 (193)	10.0 (117)	10.0 ( 76)
家族や周囲のすすめ	3.2 ( 61)	3.3 ( 39)	2.9 ( 22)
時間があいていた	0.2 ( 3)	0.3 ( 3)	0.0 ( 0)
何となく	0.5 ( 10)	0.4 ( 5)	0.7 ( 5)
その他	2.9 ( 56)	2.4 ( 28)	3.7 ( 28)
全 体	100.0%	100.0%	100.0%

※( )内はケース数

※※あてはまる項目を3つ選択。

表2-1-3 シルバーカレッジの受講動機(年齢層別) (n=681)

項 目	全 体	64歳以下	65～74歳	75歳以上
学習内容に興味があるから	14.4 (260)	14.2 ( 55)	14.8 (181)	12.4 (24)
健康の維持のため	14.7 (266)	11.3 ( 44)	15.1 (185)	19.1 (37)
趣味や教養を深めたいから	25.3 (458)	22.4 ( 87)	25.8 (316)	28.4 (55)
仲間や友人に誘われて	3.2 ( 57)	2.8 ( 11)	3.2 ( 39)	3.6 ( 7)
さまざまな人と接する機会をもつため	24.3 (439)	27.3 (100)	23.9 (293)	20.6 (40)
講師が魅力的だから	1.4 ( 25)	2.8 ( 11)	1.1 ( 13)	0.5 ( 1)
地域活動やボランティア活動に役立てたいから	10.1 (182)	12.4 ( 48)	9.5 (117)	8.8 (17)
家族や周囲のすすめ	3.1 ( 56)	2.8 ( 11)	3.2 ( 39)	3.1 ( 6)
時間があいていた	0.2 ( 3)	-	0.2 ( 2)	0.5 ( 1)
何となく	0.5 ( 9)	0.5 ( 2)	0.5 ( 6)	0.5 ( 1)
その他	2.9 ( 53)	3.4 ( 13)	2.9 ( 35)	2.6 ( 5)
全 体	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

※( )内はケース数

※※あてはまる項目を3つ選択。

### (3) 学年別の集計結果

学年別にみた結果が表 2-1-4 である。各学年とも、「趣味や教養を深めたいから」と「さまざまな人と接する機会をもつため」の 2 項目が 1, 2 位をしめていた。

そのほかの傾向としては、「健康の維持のため」「仲間や友人に誘われて」「家族や周囲にすすめられて」の 2 項目について、学年が下がるほど、若干ではあるが、回答率が上がっていたことがあげられる。具体的には、「健康の維持」では、3 年生 14.6%、2 年生 15.0%、1 年生 15.2%、同じく「仲間や友人に誘われて」では、3 年生 1.2%、2 年生 2.8%、1 年生 5.3%、そして「家族や周囲にすすめられて」では、3 年生 2.3%、2 年生 3.2%、1 年生 3.9%となっていた。

いっぽう、3 年生では、「地域活動やボランティア活動に役立てたいから」とするものが、11.8%と、他の学年とくらべて、若干多かった。

表 2-1-4 シルバーカレッジの受講動機 (学年別) (n=727)

項 目	全 体	1 年 生	2 年 生	3 年 生
学習内容に興味があるから	14.2 (275)	13.2 (105)	15.5 ( 88)	14.4 ( 82)
健康の維持のため	15.0 (289)	15.2 (121)	15.0 ( 85)	14.6 ( 83)
趣味や教養を深めたいから	25.3 (490)	24.5 (195)	27.2 (154)	24.8 (141)
仲間や友人に誘われて	3.4 ( 65)	5.3 ( 42)	2.8 ( 16)	1.2 ( 7)
さまざまな人と接する機会をもつため	23.7 (459)	23.3 (186)	22.8 (129)	25.3 (144)
講師が魅力的だから	1.5 ( 29)	2.3 ( 18)	0.7 ( 4)	1.2 ( 7)
地域活動やボランティア活動に役立てたいから	1.0 (193)	9.3 ( 74)	9.2 ( 52)	11.8 ( 67)
家族や周囲のすすめ	3.2 ( 62)	3.9 ( 31)	3.2 ( 18)	2.3 ( 13)
時間があいていた	0.2 ( 3)	0.1 ( 1)	-	0.4 ( 2)
何となく	0.6 ( 12)	0.4 ( 3)	1.1 ( 6)	0.5 ( 3)
その他	2.9 ( 56)	2.6 ( 21)	2.6 ( 15)	3.5 ( 20)
全 体	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

※ ( ) 内はケース数

※※あてはまる項目を 3 つ選択。

## 2. 受講後の感想

じっさいにシルバーカレッジを受講してから、受講生はどのような感想をもっているのだろうか。「よい友人や仲間ができた」「知識や技能が身についた」「社会を見る眼が広がった」「家庭での話題が増えた」「健康的な生活をおくれた」「新たな人生の目標が見いだせた」「生活にリズムが出てきた」「考え方や行動が若がえった」「ボランティアや地域活動のきっかけが得られた」「学習の習慣が身についた」「ひまな時間をつぶせた」「あまり何も感じなかった」「期待したほどではなかった」「その他」の計 14 項目から、3 つを選択してもらった中でたずねた。以下では、未回答のケースをのぞいて集計している。

### (1) 全体の傾向

結果は、表 2-2-1 にしめすとおりである。全体的に多くの回答があつまったのは、肯定的な感想の項目であった。とくに回答が高率であったのは、「よい友人や仲間ができた」という項目

で、25.1%をしめていた。つづいて、「社会を見る眼が広がった」(15.3%)、「健康的な生活をおくれた」(10.7%)、「生活にリズムが出てきた」(11.7%)の順に高率であった。

逆に、やや消極的・否定的な項目は回答比率が低く、「期待したほどではなかった」の4.7%を最高に、「ひまな時間をつぶせた」3.2%、「なにも感じなかった」0.2%となっていた。

表2-2-1 シルバーカレッジの受講後の感想 (n=727)

項 目	全 体	
よい友人や仲間ができた	25.1	(517)
知識や技能が身についた	5.3	(110)
社会を見る眼が広がった	15.3	(316)
家庭での話題が増えた	6.0	(124)
健康的な生活をおくれた	10.7	(221)
新たな人生目標が見いだせた	3.6	( 75)
生活にリズムが出てきた	11.7	(241)
考え方や行動が若がえった	5.8	(119)
ボランティアや地域活動のきっかけが得られた	5.1	(106)
学習の習慣が身についた	2.1	( 43)
ひまな時間をつぶせた	3.2	( 66)
あまり何も感じなかった	0.2	( 4)
期待したほどではなかった	4.8	( 99)
その他	1.0	( 20)
全 体	100.0%	

※( )内はケース数。

※※あてはまる項目を3つ選択。

表2-2-2 シルバーカレッジの受講後の感想(男女別) (n=727)

項 目	全 体	男 性	女 性
よい友人や仲間ができた	25.1 (515)	23.9 (303)	27.1 (212)
知識や技能が身についた	5.3 (109)	5.4 ( 69)	5.1 ( 40)
社会を見る眼が広がった	15.4 (316)	14.6 (186)	16.6 (130)
家庭での話題が増えた	6.0 (124)	5.7 ( 73)	6.5 ( 51)
健康的な生活をおくれた	10.7 (220)	10.0 (127)	11.9 ( 93)
新たな人生目標が見いだせた	3.7 ( 75)	3.6 ( 46)	3.7 ( 29)
生活にリズムが出てきた	11.7 (241)	13.2 (168)	9.3 ( 73)
考え方や行動が若がえった	5.8 (119)	5.7 ( 72)	6.0 ( 47)
ボランティアや地域活動のきっかけが得られた	5.2 (106)	4.7 ( 60)	5.9 ( 46)
学習の習慣が身についた	2.0 ( 42)	2.2 ( 28)	1.8 ( 14)
ひまな時間をつぶせた	3.1 ( 64)	4.8 ( 61)	0.4 ( 3)
あまり何も感じなかった	0.2 ( 4)	0.2 ( 3)	0.1 ( 1)
期待したほどではなかった	4.7 ( 97)	4.9 ( 62)	4.5 ( 35)
その他	1.0 ( 20)	0.9 ( 12)	1.0 ( 8)
全 体	100.0%	100.0%	100.0%

※( )内はケース数

※※あてはまる項目を3つ選択。

## (2)男女別・年齢層別の集計結果

男女別の集計結果は、表2-2-2のとおりである。全体的にもっとも高かった「よい友人や仲間が得られた」という項目は、男性、女性どちらにおいても第1位であった。とくに、女性で

は、27.1%で、男性の23.9%よりも比率が若干、高くなっていることが特徴的であった。また、「社会を見る眼が広がった」(16.6%、男性14.6%)、「家庭での話題が増えた」(6.5%、男性5.7%)「考え方や行動が若くなった」(6.0%、男性5.7%)という項目でも、女性の回答が少しづつ高率であった。

いっぽう、男性のほうで女性にくらべ、とりわけ回答比率が高かった項目は、「生活にリズムが出てきた」(13.2%)であった。また、「ひまな時間をつぶせた」が男性では、4.8%あり、女性の0.4%を大きく上回った。

年齢層別に集計した結果は、表2-2-3にしめす。「よい仲間や友人ができた」「社会を見る眼がひろがった」がどの年齢層でも1、2位をしめていた。

年齢層による特徴としては、年齢層が低いほど高率であった項目として、「よい仲間や友人を得られた」「知識や技能が身に付いた」「家庭での話題が増えた」「地域活動やボランティア活動のきっかけが得られた」の各項目があげられる。

逆に、高い年齢層ほど高率であった項目は、「健康的な生活が送れた」「考え方や行動が若くなった」「生活にリズムがでてきた」「学習の習慣が身に付いた」などの各項目であった。また、やや消極的・否定的な項目である「ひまな時間をつぶせた」「あまり何にも感じなかった」についても、年齢層が上がるごとに、回答比率も若干ではあるが高くなっている。ただし、「期待したほどではなかった」という回答は、年齢層が低くなるほど多くなっている。

表2-2-3 シルバーカレッジの受講後の感想(年齢層別) (n=681)

項 目	全 体	64歳以下	65~74歳	75歳以上
よい友人や仲間ができた	25.0 (482)	26.3 (109)	24.8 (325)	23.4 (48)
知識や技能が身についた	5.4 (105)	7.0 (29)	5.0 (65)	5.4 (11)
社会を見る眼が広がった	15.5 (298)	13.8 (57)	16.0 (210)	15.1 (31)
家庭での話題が増えた	6.2 (120)	7.5 (31)	6.2 (81)	3.9 (8)
健康的な生活をおくれた	10.7 (206)	9.7 (40)	1.7 (140)	12.7 (26)
新たな人生目標が見いだせた	3.8 (73)	3.4 (14)	3.9 (51)	3.9 (8)
生活にリズムが出てきた	12.0 (231)	9.9 (41)	12.5 (164)	12.7 (26)
考え方や行動が若くなった	5.7 (109)	5.1 (21)	5.6 (73)	7.3 (15)
ボランティアや地域活動のきっかけが得られた	5.2 (101)	6.8 (28)	4.9 (64)	4.4 (9)
学習の習慣が身についた	2.0 (39)	1.7 (7)	2.1 (27)	2.4 (5)
ひまな時間をつぶせた	3.1 (59)	1.9 (8)	3.1 (41)	4.9 (10)
あまり何も感じなかった	0.2 (3)	-	0.2 (2)	0.5 (1)
期待したほどではなかった	4.4 (85)	5.6 (23)	4.2 (55)	3.4 (7)
その他	0.9 (17)	1.4 (6)	0.8 (11)	-
全 体	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

※( )内はケース数

※※あてはまる項目を3つ選択。

### (3) 学年別の集計結果

上記の結果を学年別にみると、表2-2-4のようになる。全体的に回答率が高かった「よい仲間や友人ができた」という項目は、学年が上がるにつれ、高くなっている。他に、「健康な生活



をおくれた」「学習の習慣が身についた」などの項目でも、学年が上がるにつれ、回答が少しずつ高率になっている。また、「ボランティアや地域活動のきっかけが得られた」という項目も、8.1%と3年生でもっとも回答比率が高かった。また、3年生では「何も感じなかった」(0.3%)「期待したほどではなかった」(6.1%)という項目でも、若干他学年より高かった。

いっぽう、学年が下がるほどやや高率になっていた項目は、「生活にリズムが出てきた」(1年生で14.3%)「家庭での話題が増えた」(同8.2%)「ひまな時間をつぶせた」(同3.8%)などであった。

表2-2-4 シルバーカレッジの受講後の感想(学年別)

(n=730)

項 目	全 体	1 年 生	2 年 生	3 年 生
よい友人や仲間ができた	25.1 (517)	23.6 (201)	24.5 (149)	27.7 (167)
知識や技能が身についた	5.3 (110)	4.9 ( 42)	6.1 ( 37)	5.1 ( 31)
社会を見る眼が広がった	15.3 (316)	15.3 (130)	14.8 ( 90)	15.9 ( 96)
家庭での話題が増えた	6.0 (124)	8.2 ( 70)	5.1 ( 31)	3.8 ( 23)
健康的な生活をおくれた	10.7 (221)	10.1 ( 86)	10.9 ( 66)	11.5 ( 69)
新たな人生目標が見いだせた	3.6 ( 75)	3.5 ( 30)	4.0 ( 24)	3.5 ( 21)
生活にリズムが出てきた	11.7 (241)	14.3 (122)	13.2 ( 80)	6.5 ( 39)
考え方や行動が若くなった	5.8 (119)	6.0 ( 51)	5.8 ( 35)	5.5 ( 33)
ボランティアや地域活動のきっかけが得られた	5.1 (106)	4.0 ( 34)	3.8 ( 23)	8.1 ( 49)
学習の習慣が身についた	2.1 ( 43)	1.8 ( 15)	2.0 ( 12)	2.7 ( 16)
ひまな時間をつぶせた	3.2 ( 66)	3.8 ( 32)	3.5 ( 21)	2.2 ( 13)
あまり何も感じなかった	0.2 ( 4)	0.1 ( 1)	0.2 ( 1)	0.3 ( 2)
期待したほどではなかった	4.8 ( 99)	3.6 ( 31)	5.1 ( 31)	6.1 ( 37)
その他	1.0 ( 20)	0.8 ( 7)	1.2 ( 7)	1.0 ( 6)
全 体	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

※( )内はケース数

※※あてはまる項目を3つ選択。

### 3. 考 察

#### (1) 受講の動機について

シルバーカレッジへの受講動機としては、「趣味や教養を深めたい」(25.3%)「さまざまな人と接する機会をもつため」(23.8%)に回答があつまった。全体的に、具体的な学習内容や講師陣に興味があるというよりも、受講によって何らかの趣味や教養を身につけること、そして活動や交際の範囲をひろげることを動機として受講するものが多いといえる。

受講動機を男女別にみると、男性の回答では、「趣味や教養を深めたいから」(27.2%)がもっとも多かったのに対し、女性では、「さまざまな人に接する機会をもつため」(24.7%)がもっとも多かった。男性は、どちらかという、趣味や教養を深めるなどの学習そのものへの目的意識をもって受講するのにたいし、女性では、学習の内容そのものよりも受講をとおして得られる対人関係に期待しているものがやや多いといえよう。

年齢層別では、64歳以下で「さまざまな人に接する機会をもつため」(27.3%)という回答がもっとも多かったのは興味深い。この年代は、仕事や家庭での役割から解放され、自由時間がに

わかには増える前期高齢期にあたる。そこで「第二の人生」のスタートにさいして、あらたな出会いをもとめてシルバーカレッジを受講している人が多い、と考えられる。また、「健康の維持のため」という回答の比率が、年齢が高くなるにつれ少しずつ多くなっていたことは、後期高齢期の特徴と関連しているのであろう。

学年別にみると、「さまざまな人と接する機会をもつため」「ボランティアや地域活動に役立てたいから」の項目では、3年生でもっとも回答が多くなっている。これは、3年生がシルバーカレッジ第1期生として、他の学年にくらべ、より積極的な動機から受講しているということであると推察される。

逆に、「友だちに誘われて」「家族や人にすすめられて」という項目の回答比率は、学年が下がるごとに若干ではあるが増えている。これは、シルバーカレッジが年を経るごとに、市民のあいだでの認知度を増し、より身近な存在になってきたためと考えられる。

## (2)受講後の感想について

シルバーカレッジの受講後の感想については、「よい友人や仲間ができた」(25.1%)というものがもっとも高率であった。シルバーカレッジはかなりの受講生にとって、あらたな仲間関係を築く場となっていることがうかがえる。他には、「社会を見る眼が広がった」(15.4%)、「健康的な生活をおくれた」(10.7%)、「生活にリズムが出てきた」の順に高率であった。

「期待したほどではなかった」「ひまな時間をつぶせた」「なにも感じなかった」などのどちらかというとな消極的な態度をしめすような感想は、それぞれ4.8%、3.2%、0.2%と少数であった。基本的にほとんどの受講生が、シルバーカレッジにたいして、好意的な感想をよせているといえる。

また、「ボランティア活動や地域活動のきっかけが得られた」という回答が5.1% (106人)あったことは、比率としては少ないとはいえ、シルバーカレッジの設立の趣旨と関連して、注目にあたいするだろう。

学年別にみると、「よい仲間や友人ができた」という項目については、学年が上がるにつれ、回答が多くなっている。3年間の受講をとおして、徐々に仲間が増えたり、仲間との関係がより深まったりしていることがうかがえる。他に、「健康な生活をおくれた」「学習の習慣が身についた」「ボランティアや地域活動のきっかけが得られた」などの項目も学年が上がるにつれ回答の比率が上がっている。これらは、3年間にわたる受講継続の成果のひとつであろう。

いっぽう、「なにも感じなかった」「期待したほどではなかった」という項目でも、3年生の回答率が若干高くなっていた(それぞれ0.3%、6.1%)。調査当時、すでに3年間の受講をほぼすべて終え、卒業を目前にひかえた3年生のなかには、やや物足りなさを感じているものもいたのかもしれない。これにたいし、「生活にリズムが出てきた」「家庭での話題が増えた」「ひまな時間をつぶせた」などの項目では、調査当時、受講1年目を終えたばかりの1年生でもっとも高くなっている(それぞれ14.3%、8.2%、3.8%)。ようやくシルバーカレッジが自らの生活リズムにとけこみつつあるが、具体的な成果はまだまだこれから、といったところであろう。

### 第3章 友人形成と課外活動

本章では、受講生の友人形成と課外活動への参加について、たずねた結果について報告する。

高年大学の受講にかんする先行研究においては、そこで得られた友人や仲間との関係が、受講生にとってもっとも重要な受講の目的や成果のひとつであるといわれている（藤田、1985；堀、1989など）。そこで、本章では、調査データをもとにシルバーカレッジ受講生の友人形成にかんする実態をあきらかにしたい。また、序章でもふれたように、シルバーカレッジでは、クラブ活動やボランティア活動などの課外活動がさかんにおこなわれているが、本節では、そうした課外活動がシルバーカレッジにおける友人形成とどのようにかかわっているのか、という点についてもあきらかにしたいと考える。

#### 1. シルバーカレッジでの友人の有無・数と課外活動

##### (1) 全体の傾向

##### a. シルバーカレッジでの友人の有無

受講生は、じっさいどの程度がシルバーカレッジで友人を得ているのだろうか。まず、「友人ができた」「友人はできなかった」のうちひとつを選んでもらい、友人の有無をたずねた。

結果は、表3-1-1に示す。シルバーカレッジ内で「友人ができた」と答えた人は、95.3%であった。「できなかった」と答えた人は、4.7%にすぎず、シルバーカレッジでは、ほとんどの受講生があらたに友人を得ているという結果であった。

表3-1-1 シルバーカレッジでの友人の有無

友人ができた	95.3%	(683)
友人ができなかった	4.7%	(34)
	100.0%	(717)

※ ( ) 内はケース数。

##### b. シルバーカレッジでの友人数

シルバーカレッジ内で「友人ができた」と答えた人に、友人の数をたずねた（表3-1-2）。その結果によると、友人数の平均は、17.11人であった。つづいて、友人数に「1~4人」「5~9人」「10~19人」「20人以上」の4つのカテゴリーを割り当てたところ、「1~4人」が30.3%、「5~9人」30.3%、「10~19人」が28.2%とほぼ3割ずつでならんだ。「20人以上」は11.2%とほぼ1割であった。

表3-1-2 シルバーカレッジでの友人数

1～4人	30.3%	(197)
5～9人	30.3%	(197)
10～19人	28.2%	(183)
20人以上	11.2%	(73)
	100.0%	(650)

※ ( ) 内はケース数。

### c. 課外活動への参加

シルバーカレッジでは、受講生のあいだで、クラブ活動やボランティア活動などの課外活動がかなり活発におこなわれている。(その内容についてはすでに序章でとりあげている。)本調査では、課外活動への参加について、「クラブ活動に参加」「ボランティア活動に参加」「どちらにも参加したことがない」の3つのうち、あてはまるものを選んでもらうかたちでたずねた。クラブ活動、ボランティア活動の両方に参加しているケースもあるので、その場合は重複して選んでもらった。

結果は、表3-1-3のとおりである。「クラブ活動に参加」は82.3%、「ボランティア活動に参加」は34.3%であった。いっぽう、「どちらにも参加したことがない」と答えたものは、14.4%であった。逆にいえば、この「どちらにも参加したことがない」と答えた以外の85.6%の受講生は、なんらかの課外活動に参加したことがあるということになる。

なお、本稿でのクロス集計の分析において、この項目をもちいるさいには、便宜上、「参加したことがある」「参加したことがない」の2つのカテゴリーからなる「課外活動への参加状況」という項目を設定した。その場合、上記の質問項目について、「どちらにも参加したことがない」をえらんだものを課外活動に「不参加」、それ以外のものに「参加」というカテゴリーを割り当てている。

表3-1-3 課外活動への参加 (n=706)

クラブ活動に参加したことがある	82.3%	(581)
ボランティア活動に参加したことがある	34.3%	(242)
どちらにも参加したことがない	14.4%	(102)
	100.0%	

※ ( ) 内はケース数。

### (2)クロス集計による分析

以下では、1でとりあげたシルバーカレッジでの友人形成と課外活動にかんする項目、「シルバーカレッジでの友人の有無」(以下では「SC友人の有無」と表記)、「シルバーカレッジでの友

人数」(同じく「SC友人数」)、「課外活動への参加状況」3項目について、クロス集計による分析をおこなう。

a. 基本的属性との関連

まず、「SC友人の有無」「SC友人数」の2項目を被説明変数に、それぞれ、性別、年齢、学年、本人の健康状態、配偶者の有無、配偶者の健康状態、同居子の有無、もっとも長く従事した職業、現在の就労状況を説明変数としたクロス集計をおこなった。その結果をしめしたものが、表3-1-4と表3-1-5である。それぞれカイ二乗検定によって、統計学的に有意な関連がみられるかどうかを調べている。

「SC友人の有無」については、どの項目とも有意な関連がみられない。いっぽう、「SC友人数」については、「学年」「配偶者の健康状態」について、それぞれ危険率5%水準で有意な関連がみとめられた。

つづいて、「課外活動への参加状況」を被説明変数に、同じようにクロス集計をおこなった。その結果は、表3-1-6のとおりである。有意な相関がみとめられたのは、「性別」(危険率5%水準)のみであった。

上記の結果をまとめると、つぎのようになる。①シルバーカレッジでの友人の有無については、個人の属性、すなわち性別や年齢、学年、家族形態や就労状況等の影響はみられない。これについては、もっと別の要因が影響していると思われる。②シルバーカレッジでの友人数については、学年の影響がみられる。すなわち、学年があがるほどに友人数は多くなる。③同じく、シルバーカレッジでの友人数については、配偶者の健康状態の影響がみられる。つまり、配偶者が病気がちなものでは、友人数は少なくなる傾向がある。④シルバーカレッジでの友人数については、②③の学年、配偶者の健康状態以外の、個人的属性、すなわち、性別、年齢、就労状況等の影響はみられない。⑤課外活動への参加状況については、性別の影響がみられる。すなわち、男性よりも女性のほうが課外活動への参加率が高い。⑥課外活動への参加状況については、性別以外の個人的属性、年齢や学年、家族形態や就労状況の影響はみられない。

表 3-1-4 SC友人の有無と基本的属性との単純クロス

		SC友人の有無			カイ二乗検定 危険確率
		できた	できなかった	全 体	
性別	男性	94.1% (166)	5.9% (26)	100.0% (442)	0.06854
	女性	97.1% (267)	2.9% (8)	100.0% (275)	
年齢	64歳以下	95.2% (139)	4.8% (7)	100.0% (146)	0.78788
	65～74歳	96.0% (435)	4.0% (18)	100.0% (453)	
	75歳以上	94.4% (68)	5.6% (4)	100.0% (74)	
学年	1年生	93.9% (278)	6.1% (18)	100.0% (296)	0.23545
	2年生	94.8% (201)	5.2% (16)	100.0% (212)	
	3年生	97.2% (206)	2.8% (6)	100.0% (212)	
健康状態	非常に健康	94.3% (116)	5.7% (7)	100.0% (123)	0.85402
	どちらかといえば健康	95.7% (469)	4.3% (21)	100.0% (490)	
	どちらかといえば病気がち	93.9% (46)	6.1% (3)	100.0% (49)	
	寝込むことが多い	100.0% (2)	-	100.0% (2)	
配偶の有無	配偶者あり	95.0% (530)	5.0% (28)	100.0% (558)	0.55148
	配偶者なし	96.2% (127)	3.8% (5)	100.0% (132)	
配偶者の健康	非常に健康	98.3% (98)	6.7% (7)	100.0% (105)	0.63495
	やや健康	95.1% (351)	4.9% (18)	100.0% (369)	
	やや病気がち	97.1% (67)	2.9% (2)	100.0% (69)	
	寝込むことが多い	100.0% (8)	-	100.0% (8)	
同居子	同居子あり	95.7% (223)	4.3% (10)	100.0% (233)	0.61482
	なし	94.8% (441)	5.2% (24)	100.0% (465)	
就労状況	仕事をしている	96.6% (57)	3.4% (2)	100.0% (59)	0.71726
	無職	95.4% (515)	4.6% (25)	100.0% (540)	
	求職中	100.0% (10)	-	100.0% (15)	

※ ( ) 内はケース数

表3-1-5 SC友人数と基本的属性との単純クロス

		友 人 数					カイ二乗 検定 危険確率
		1～4人	5～9人	10～19人	20人以上	全 体	
性 別	男性	18.4% (74)	29.9%(120)	30.8%(124)	58.3% (84)	100.0% (402)	0.62667
	女性	16.9% (40)	29.1% (69)	28.7% (68)	25.3% (60)	100.0% (237)	
年 齢	64歳以下	15.0% (19)	33.9% (43)	29.1% (37)	4.7% (28)	100.0% (127)	0.52057
	65～74歳	17.8% (73)	27.3%(112)	31.2%(128)	23.7% (97)	100.0% (410)	
	75歳以上	23.1% (15)	33.8% (22)	26.2% (17)	16.9% (11)	100.0% (65)	
学 年	1年生	19.9% (54)	32.7% (89)	29.0% (79)	18.4% (50)	100.0% (272)	0.04180 *
	2年生	18.5% (35)	30.2% (57)	30.7% (58)	20.6% (39)	100.0% (189)	
	3年生	14.4% (26)	23.9% (43)	20.6% (55)	31.1% (56)	100.0% (180)	
健康状態	非常に健康	9.8% (11)	31.3% (35)	28.6% (32)	30.4% (34)	100.0% (112)	0.25590
	どちらかといえば健康	18.2% (79)	29.0%(126)	32.0%(139)	20.9% (91)	100.0% (435)	
	どちらかといえば病気がち	22.7% (10)	34.1% (15)	22.7% (10)	20.5% (9)	100.0% (44)	
	寝込むことが多い	-	- 50.0% (1)	50.0% (1)	- -	100.0% (2)	
配偶の有無	配偶者あり	18.3% (92)	29.2%(147)	30.4%(153)	22.1%(111)	100.0% (503)	0.69690
	配偶者なし	16.1% (18)	29.5% (33)	27.7% (31)	26.8% (30)	100.0% (112)	
配偶者の健康	非常に健康	11.8% (11)	35.5% (33)	30.1% (28)	22.6% (21)	100.0% (93)	0.01108 *
	やや健康	18.2% (600)	58.2% (85)	72.5%(111)	67.9% (74)	100.0% (330)	
	やや病気がち	18.2% (16)	25.8% (28)	33.6% (10)	22.4% (11)	100.0% (65)	
	寝込むことが多い	12.5% (1)	- -	50.0% (4)	37.5% (3)	100.0% (8)	
同居子	同居子あり	16.6% (34)	28.3% (58)	32.7% (67)	22.4% (46)	100.0% (205)	
	なし	18.5% (77)	30.0%(125)	28.1%(117)	23.3% (97)	100.0% (416)	
就労状況	仕事をしている	11.8% (6)	33.3% (17)	27.5% (14)	27.5% (14)	100.0% (51)	0.54936
	無職	17.8% (87)	29.4%(144)	31.0%(152)	21.8%(107)	100.0% (490)	
	求職中	20.0% (2)	40.0% (4)	40.0% (4)	- -	100.0% (10)	

※ ( ) 内はケース数。

※※ 統計学的に有意なものには\*をつけた(5%水準)。以下同じ。

表3-1-6 課外活動への参加状況と基本的属性との単純クロス

		課外活動への参加状況			カイ二乗検定 危険確率
		参加あり	参加なし	全 体	
性別	男性	83.4% (366)	16.6% (73)	100.0% (439)	0.02748 *
	女性	89.4% (236)	10.0% (28)	100.0% (264)	
年齢	64歳以下	86.3% (126)	13.7% (20)	100.0% (146)	0.15231
	65～74歳	87.0% (387)	13.0% (58)	100.0% (445)	
	75歳以上	78.3% (54)	21.7% (15)	100.0% (69)	
学年	1年生	82.0% (242)	18.0% (53)	100.0% (295)	0.07902
	2年生	88.1% (178)	11.9% (24)	100.0% (202)	
	3年生	88.0% (184)	12.0% (25)	100.0% (209)	
健康状態	非常に健康	90.3% (112)	9.7% (12)	100.0% (124)	0.46315
	どちらかといえば健康	85.1% (406)	14.9% (71)	100.0% (477)	
	どちらかといえば病気がち	86.0% (43)	14.0% (7)	100.0% (50)	
	寝込むことが多い	100.0% (2)	-	100.0% (2)	
配偶の有無	配偶者あり	85.7% (473)	14.3% (107)	100.0% (552)	0.82498
	配偶者なし	84.9% (107)	15.1% (19)	100.0% (126)	
配偶者の健康	非常に健康	87.5% (91)	12.5% (13)	100.0% (104)	0.56183
	どちらかといえば健康	86.1% (311)	13.9% (50)	100.0% (361)	
	どちらかといえば病気がち	80.3% (57)	19.7% (14)	100.0% (71)	
	寝込むことが多い	87.5% (7)	12.5% (1)	100.0% (8)	
同居子	同居子あり	85.6% (196)	14.4% (33)	100.0% (229)	0.87890
	なし	85.2% (390)	14.8% (68)	100.0% (458)	
就労状況	仕事をしている	91.8% (56)	8.2% (5)	100.0% (61)	0.35328
	無 職	85.6% (452)	14.4% (76)	100.0% (528)	
	求職中	80.0% (8)	20.0% (2)	100.0% (10)	

※ ( ) 内はケース数

#### b. 友人の有無・数と課外活動との関連

シルバーカレッジでの友人の有無や数にたいして、課外活動に参加しているかどうかということは影響しているだろうか。「SC友人の有無」と「SC友人数」のそれぞれについて、「課外活動への参加状況」とのクロス集計をおこなった。

結果は、表3-1-7と表3-1-8にしめす。それぞれカイ二乗検定によって、統計学的に有意な関連がみられるかどうかしらべている。これによると、シルバーカレッジでの友人の有無、友人数のどちらも、課外活動とのつよい関連をしめしている。つまり、課外活動に参加したもののほうが、していないものに比べて、友人がいる確率がより高く、友人数も多くなっている。



表 3-1-7 SC 友人の有無と課外活動への参加状況との単純クロス

		友 人 の 有 無			カイ二乗検定 危険確率
		できた	できなかった	全 体	
課外活動	参 加	97.3% (584)	2.7% (16)	100.0% (600)	0.00000 **
	不参加	81.6% (80)	18.4% (18)	100.0% (98)	

※ ( ) 内はケース数。

※※\*\* は 1% の統計的な有意水準をしめす。以下同じ。

表 3-1-8 SC 友人数と課外活動への参加状況との単純クロス

		友 人 数					カイ二乗 検 定 危険確率
		1~4人	5~9人	10~19人	20人以上	全 体	
課 外 活 動	参 加	14.2% (78)	28.1%(155)	32.1%(177)	88.3%(551)	100.0% (551)	0.0000**
	不参加	46.6% (34)	38.4% (28)	13.7% (10)	11.7% (73)	100.0% (73)	

※ ( ) 内はケース数。

さらに、性別でコントロールした場合の影響をさぐるために、3重クロス集計をおこなっている。その結果をしめしたものが、表 3-1-9 と表 3-1-10 である。やはりカイ二乗検定をおこなって、統計的な有意差があるかどうかしらべている。

この結果をみると、「友人の有無」と「課外活動への参加」とのクロス集計の結果については、性別でコントロールした影響がみられるが、「友人数」と「課外活動への参加」のクロスについては、影響はみられない。

表 3-1-9 SC 友人の有無と課外活動への参加状況との性別コントロール)

		友 人 の 有 無			カイ二乗検定 危険確率
		できた	できなかった	全 体	
男性	参 加	97.2% (353)	2.8% (10)	100.0% (363)	0.00000 ***
	不参加	78.3% (54)	21.7% (15)	100.0% (25)	
女性	参 加	97.4% (229)	2.6% (6)	100.0% (235)	0.18130
	不参加	92.9% (26)	7.1% (2)	100.0% (28)	

※ ( ) 内はケース数。

※\*\*\* は 0.1% の統計的な有意水準をしめす。以下同じ。

表 3-1-10 SC 友人数と課外活動への参加状況のクロス (性別コントロール)

		友 人 数					カイ二乗 検 定 危険確率
		1~4人	5~9人	10~19人	20人以上	全 体	
男性	参 加	68.1% (49)	82.9% (97)	93.5%(177)	100.0% (82)	100.0% (343)	0.00000***
	不参加	31.9% (23)	17.1% (20)	6.5% (10)	- -	100.0% (51)	
女性	参 加	71.8% (28)	87.9% (58)	96.9% (62)	98.3% (58)	90.4% (206)	0.00004***
	不参加	28.2% (11)	12.1% (8)	3.1% (2)	1.7% (1)	9.6% (22)	

※ ( ) 内はケース数。

以上の分析から得られたおもな結果をまとめると、つぎのようになる。①男性の場合、「SC友人の有無」や「SC友人数」は、「課外活動への参加状況」に関連している。いいかえると、課外活動に参加している男性のほうが、参加していないものにくらべて、友人ができたとする確率が高く、友人数も多くなっている。②女性の場合は、男性とことなり、「SC友人の有無」は「課外活動への参加状況」と関連していない。つまり、女性では、課外活動に参加しているかどうかということは、シルバーカレッジでの友人の有無に関係がない。ただし、「SC友人数」については、男性と同様、「課外活動への参加状況」と有意な相関がみられる。すなわち、課外活動に参加している女性のほうが、参加していない女性にくらべて、友人数が多い。

## 2. シルバーカレッジでの友人づきあいの内容

1で、シルバーカレッジでの友人の有無、友人数と課外活動への参加状況についてみてきた。では、シルバーカレッジの友人とのつきあいの具体的内容はどうなっているのだろうか。

じつは、今回の調査研究では、調査項目が広範囲にわたったため、友人関係の質的な側面までふみこんで調べることはほとんど断念せざるをえなかった。ただ一つだけ、友人づきあいの内容についての質問として、以下の8つの項目、「シルバーカレッジでの講義や活動にいっしょに参加する」「シルバーカレッジ以外で、グループで会ったり、食事をしたりする」「シルバーカレッジ以外で、個人的に会ったり、食事をしたりする」「電話でときどき話をする」「自宅を訪問したり、されたりしたことがある」「悩みをうちあけたり、うちあけられたりしたことがある」「困ったときに助けてくれたり、助けたりしたことがある」「その他」から、あてはまるものすべてを選んでもらうかたちでたずねた。

### a. 全体の傾向

結果は、表3-2-1にしめす。全体的にみると、もっとも回答があつまったのは、「講義や活動にいっしょに参加」の32.7%で、以下、順に「シルバーカレッジ外でグループで会ったり食事」(20.1%)、「電話でときどき話す」(17.8%)であった。

表3-2-1 友人づきあいの内容(複数回答) (n=680)

	全体	男性	女性
講義や活動にいっしょに参加する	32.7%(583)	36.8%(349)	28.0%(234)
シルバーカレッジ外でグループで会ったり会食をする	20.1%(359)	23.3%(221)	16.5%(138)
シルバーカレッジ外で個人的に会ったり食事をする	9.9%(176)	10.5%(100)	9.1%(76)
電話でときどき話をする	17.8%(318)	14.9%(141)	21.2%(177)
自宅で訪問したりされたりする	5.8%(103)	5.3%(50)	6.3%(53)
悩みをうちあけたりうちあけられたりする	5.3%(94)	2.5%(24)	8.4%(70)
困ったときに助けてくれたり助けたりする	6.1%(109)	4.3%(41)	8.1%(68)
その他	2.4%(42)	2.4%(23)	2.3%(19)
	100.0%	100.0%	100.0%

※( )内はケース数。

男女別の集計を見ると、男性の回答が高率であった項目は、「講義や活動にいっしょに参加」(36.8%)、「シルバーカレッジ以外で、グループで会ったり食事」(23.3%)であった。女性では、もっとも高率であったのは男性と同じく「講義や活動にいっしょに参加」(28.0%)であったが、2番目に回答が多かったのは、「電話でときどき話す」(21.2%)という項目であった。3、4番目に多かったのは「シルバーカレッジ以外で、グループで会ったり食事」(16.5%)「シルバーカレッジ以外で、個人的で会ったり食事」(9.1%)であったが、いずれも男性にくらべて回答の比率は少なくなっている。

いっぽう、女性のほうが男性よりも高率であった項目は、「悩みをうちあけたり、うちあけられたりしたことがある」(8.4%)「困ったときに助けてくれたり、助けたりしたことがある」(8.1%)「自宅を訪問したり、されたりしたことがある」(6.3%)などであった。

## b. 学年別の集計結果

シルバーカレッジでの友人とのつきあいは、学年によってどのように変化するのであろうか。学年別に「SC友人とのつきあいの内容」をみたものが、表3-2-2である。

1年生でもっとも回答の比率が高くなっている項目は、「講義や活動にいっしょに参加」であり、1年生が39.5%、2年生で33.1%、3年生で25.8%となっている。

「シルバーカレッジでの講義や活動にいっしょに参加」「シルバーカレッジ以外でグループで会う」「シルバーカレッジ以外で個人的に会う」「電話でときどき話をする」「困ったときの助け合い」の5項目については、学年があがるほど若干ずつではあるが、回答の比率が上がっている。まず、「シルバーカレッジ以外でグループで会う」については、1年生19.2%、2年生20.5%、3年生20.8%、「シルバーカレッジ外で個人的に会う」では、1年生8.3%、2年生9.2%、3年生11.9%であった。つづいて、「電話でときどき話す」では、1年生17.1%、2年生17.8%、3年生18.6%、また、「困ったときの助け合い」では、1年生3.7%、2年生6.7%、3年生8.0%であった。

表3-2-2 友人づきあいの内容(複数回答)

(n=682)

	全 体	1 年 生	2 年 生	3 年 生
講義や活動にいっしょに参加する	32.7%(585)	39.5%(247)	33.1%(173)	25.8%(165)
シルバーカレッジ外でグループで会ったり会食をする	20.1%(360)	19.2%(120)	20.5%(107)	20.8%(133)
シルバーカレッジ外で個人的に会ったり食事をする	9.8%(176)	8.3%(52)	9.2%(48)	11.9%(76)
電話でときどき話をする	17.8%(319)	17.1%(107)	17.8%(93)	18.6%(119)
自宅を訪問したりされたりする	5.8%(103)	4.5%(28)	4.2%(22)	8.3%(53)
悩みをうちあけたりうちあけられたりする	5.3%(94)	5.1%(32)	5.9%(31)	4.8%(31)
困ったときに助けてくれたり助けたりする	6.1%(109)	3.7%(23)	6.7%(35)	8.0%(51)
その他	2.3%(42)	2.7%(17)	2.5%(13)	1.9%(12)
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

※( )内はケース数。

### 3. 考 察

#### (1) シルバーカレッジにおける友人の有無・数と課外活動

先述したように、シルバーカレッジ受講生においては、受講後の感想でも「よい仲間や友人が得られた」とするものが多かった。本節では、その友人形成の具体的側面について、シルバーカレッジでの友人の有無や友人数、課外活動への参加状況、および友人づきあいの内容という側面から分析した。

シルバーカレッジでの友人の有無については、およそ95%の学生が「できた」と答えており、多くの受講生にとって、シルバーカレッジがあらたな友人獲得の場となっていることがわかった。得られた友人の数については、「4人以下」というものは3割にすぎず、残りの7割は5人以上の友人を得られたとしている。

課外活動への参加状況については、クラブ活動には8割強、ボランティア活動には3割強の受講生が参加したことがあるとこたえている。どちらにも参加したことがない、という受講生はおよそ14%にすぎなかった。いいかえれば、8割以上の学生がクラブ・ボランティア活動などの課外活動に参加したことがあるということになる。

シルバーカレッジでの友人の有無や友人数、課外活動への参加状況を規定するものはいったい何であろうか。本節では、まず、性別や年齢、学年や家族状況、就労状況などの基本的属性の関連をしらべるために、それぞれクロス集計をおこなった。結果は以下のとおりである。

まず、「SC友人の有無」については、基本属性のどの項目とも関連がみられなかった。友人の有無については、個人の性質や価値観など、もっと別の要因がはたらいてるのであろう。たとえば、友人がいないと答えた少数派の受講生は、もともとシルバーカレッジで友人を得ることを期待していないのかもしれない。

つづいて、「SC友人数」については、学年および配偶者の健康状態と有意な相関がみとめられた。すなわち、シルバーカレッジでは、学年があがるほどに友人数が増える傾向がみられる。これについては、あらためて説明するまでもないかもしれないが、シルバーカレッジでの3年間は確実に受講生の友人関係を広げているといえよう。また、配偶者が病気がちである受講生の場合、そうでないものにくらべて、友人数が少なくなっていた。これは、配偶者の世話などのために、あるいは配偶者に気兼ねしたりするために、行動が制限され、人間関係を広げる機会が少なくなるせいであろう。

さらに、「課外活動への参加状況」については、性別について有意な相関がみとめられた。すなわち、男性よりも女性のほうが課外活動に参加している割合が高かった。その理由については、本調査研究の結果だけではあきらかにできているとはいえないが、第1節で述べたような、受講動機の男女によるちがいが、シルバーカレッジへの期待の男女によるちがいがいなどが考えられる。受講動機にせよ、課外活動への参加状況にせよ、よりくわしく明らかにするためには、男女でそれ

までの社会経験（職業経験など）がことなる場合が多いので、その点を考慮に入れた上で分析することが必要であろう。

つづいて、課外活動への参加が、シルバーカレッジでの友人関係の量的側面である、「SC友人の有無」や「SC友人数」とどのように関連しているのか、クロス集計をおこなってしらべた。その結果、「SC友人の有無」、「SC友人数」のどちらについても「課外活動への参加状況」とつよい相関がみられた。いいかえれば、課外活動に参加したもののほうが、不参加であったものにくらべて、友人のいる確率がより高く、友人数も多くなっている。課外活動が、受講生にとって、友人を獲得し、人間関係を広げる重要な機会となっているのである。

さらに、性別の影響を探るために3重クロス集計をおこなった。その結果、「SC友人数」と「課外活動への参加状況」については、影響はみられなかったが、「SC友人の有無」と「課外活動への参加状況」のクロス集計の結果については、性別の影響がみられた。すなわち、友人数については、男女に関係なく、課外活動に参加しているもののほうが、不参加のものにくらべて多くなっている。いっぽう、友人の有無について、男性では、課外活動に参加しているもののほうが、不参加のものより、友人ができたとする割合が多くなっているが、女性では、友人ができたかどうかは、課外活動に参加しているかどうかとは関係がないという結果であった。これは、女性の場合、課外活動に参加しなくても、シルバーカレッジの講義などをおして、友人をつくることはそれほどむずかしくないということだろう。いっぽう、男性では、課外活動に参加したほうが親密な関係をつくりやすいということが推察される。

## (2) シルバーカレッジでの友人づきあいの内容

今回の調査研究では、調査項目が広範囲にわたったため、友人関係の質的な側面までふみこんで調べることはできなかった。唯一、「SC友人づきあいの内容」を複数回答でたずねている。さらに、カイ二乗検定など統計的な有意差を調べる検定はおこなえないが、参考までに、他の変数とのクロス集計もおこない、関連性の推察をこころみた。

「SC友人づきあいの内容」を全体的にみると、もっとも高率であったのは、「講義や活動にいっしょに参加」で、3割強であった。以下、「シルバーカレッジ外でグループであったり食事をしたりする」「電話でときどき話をする」という項目がそれぞれ2割程度の回答をあつめた。

「シルバーカレッジ外で個人的に会う」「自宅を訪問しあう」「悩みを相談しあう」「困ったときに助けあう」といった項目については、回答の比率は低かった。全体的に、シルバーカレッジでの友人づきあいは、個人的に、プライベートな部分にまで踏み込んでかかわりあうというよりも、むしろ、シルバーカレッジの受講生として、グループでつきあうという場合が多いのかもしれない。この点にかんしては、シルバーカレッジでの友人関係が、ほとんどすべてゼロからスタートしており、知り合った年数も多くて3年と、一般的な友人関係よりも浅いということも要因のひとつであろう。

男女別にみると、ここでの結果だけで断言することはできないが、男性にくらべ女性のほうが

より個人的で親密でなつきあいかたをしているという可能性が指摘できる。「悩みを相談する」「困ったときに助けあう」「自宅を訪問したりされたりする」といった項目で、女性のほうが男性よりも若干、高率であったためである。ただ、どの項目も比率じたいはそれほど高くはないので、さして注目するほどの男女差はない可能性もある。

学年別では、「講義や活動にいっしょに参加」については、1年生でもっとも回答の比率が高くなっている。いっぽう、「シルバーカレッジ以外でグループで会う」「シルバーカレッジ以外で個人的に会う」「電話でときどき話をする」「困ったときの助け合い」の5項目については、学年があがるほど、若干ずつではあるが、回答の比率が上がっている。これは、学年があがるごとに、当初のシルバーカレッジ内だけのつきあいから、よりパーソナルなつきあいへと発展していることを示唆しているともとれる。

いずれにせよ、シルバーカレッジにおける友人関係、そくにその質的側面については、事例研究など、さらなる調査研究が必要だろう。たとえば、「友人」ということば一つをとってみても、一人ひとり解釈がことなる。それをあきらかにするためには、具体的な友人を何人か想定してもらった上で、その友人との接触頻度や、個人がその人との関係を主観的にどのように意味づけているか、ということまで踏み込んで調査しなければならないだろう。これは、いわゆるダイアド（二者関係）分析であるが、その他に、シルバーカレッジでの友人関係というよりは、仲間集団にかかわる側面、すなわち、クラスや課外活動などにおけるさまざまなグループの形成過程やその構成員、活動内容、頻度などを調査する必要があるだろう。また、本稿では扱わなかったが、シルバーカレッジでは、異性どうしの友人関係も活発である。この点についての分析も今後の課題である。

## 第4章 受講後の評価

シルバーカレッジについて、受講生はどのような評価を与えているのだろうか。「学習内容」「講師の教え方」「仲間との関係」「学園祭などの行事」「施設や備品」「職員の対応」「全体として」の7項目についての評価をたずねてみた。各項目について、「非常に良かった」「良かった」「ふつう」「あまりよくなかった」「よくなかった」の5つから1つを選んでもらうかたちでたずねた。以下では、未回答のケースをのぞいて集計している。

### 1. 全体の傾向

表4-1はそれぞれの項目について、回答の分布をしめしたものである。「非常に良かった」という回答の比率が10%を超えていたのは、「施設や備品」「職員の対応」「仲間との関係」の3項目で、それぞれ23.9%、14.7%、13.9%であった。そこに、「良かった」という回答の比率をあわせると、それぞれ74.5%、63.3%、58.8%と高い評価をしめしていた。

逆に、「よくなかった」「あまりよくなかった」という回答をあわせた比率が高かった項目は、高い順に「学習内容」「学園祭などの行事」「講師の教え方」「職員の対応」とつづく。

「非常に良かった」「良かった」をあわせた比率は、すべての項目において過半数を超えている。シルバーカレッジにたいする受講生の評価は、概して高いといえるだろう。

表4-1 受講後の評価

	非常に 良かった	良かった	ふつう	あまりよく なかった	よくなかつ た	計
学習内容	8.1% (58)	44.5%(317)	37.4%(267)	9.3% (66)	0.7% (5)	100.0%(713)
講師の教え方	7.8% (55)	45.3%(321)	40.3%(286)	6.1% (43)	0.6% (4)	100.0%(709)
仲間との関係	13.9%(100)	44.9%(322)	39.3%(282)	1.8% (13)	0.1% (1)	100.0%(718)
学園祭などの行事	5.7% (40)	40.8%(287)	44.5%(313)	8.4% (59)	0.6% (4)	100.0%(703)
施設や備品	23.9%(171)	50.6%(362)	21.5%(154)	3.2% (23)	0.7% (5)	100.0%(715)
職員の対応	14.7%(105)	48.6%(348)	31.0%(222)	4.9% (35)	0.8% (6)	100.0%(716)
全体として	6.3% (45)	54.5%(389)	36.0%(257)	2.8% (20)	0.4% (3)	100.0%(714)

※( )内はケース数。

### 2. クロス集計による分析

#### (1) 基本的属性による分析

まず、受講後の評価の7項目のうち、「職員の対応」をのぞいた6項目を被説明変数に、サンプルの基本的属性を説明変数として、クロス集計をおこない、受講後の評価への影響をさぐっていくことにする。ここで、説明変数として用いるのは、「性別」、「年齢」、「本人の健康状態」、「配偶者の健康状態」「配偶者の有無」、「同居子の有無」、「現在の就労状況」の7項目である。

上記の変数によりクロス集計をし、それぞれカイ二乗検定によって、統計学的に有意な関連がみられるかどうかをしらべた結果が表4-2-1である。まず、有意差がみとめられたのは「性別」で、受講後の評価のなかでも「仲間との関係」「学園祭などの行事」「全体として」の3つの

項目について、それぞれ危険率0.1%水準で相関がみとめられた。具体的には、「仲間との関係」について、男女ともに評価は高いが、女性のほうが男性にくらべ、より高く評価している傾向がみられた。また、「学園祭などの行事」についても同様に、女性のほうがやや評価が高くなる傾向がみられた。

「健康状態」「配偶者の健康状態」「同居子の有無」「現在の就労状況」は、受講後の評価とは有意な関連がみられなかった。「配偶者の有無」については、「学園祭などの行事」と関連がみられ、配偶者のいないもののほうが、いるものよりも高い評価をあたえていた。「年齢」については、危険率5%水準で、「施設や備品」についての評価と相関がみられた。年齢層が低いほど、施設や備品への評価は高くなっていった。

表4-2-1 受講後の評価と基本的属性との単純クロスの結果(数字はカイ二乗検定危険確率)

	学 習 内 容	講師の教え方	仲間との関係	学園祭などの行事	施設や備品	全体として
性別	0.3842	0.2626	0.0037 ***	0.0000 ***	0.0285 *	0.1810
年齢	0.5768	0.5515	0.4074	0.49200	0.0360 *	0.1003
健康状態	0.4847	0.5086	0.2060	0.0078 ***	0.9680	0.6172
配偶者の健康状態	0.7524	0.3764	0.8364	0.4717	0.0081 ***	0.4427
配偶者の有無	0.1760	0.7158	0.3436	0.0032 ***	0.6865	0.3373
同居子の有無	0.2805	0.8577	0.7765	0.8685	0.9214	0.7401
就労状況	0.8491	0.9560	0.5573	0.7506	0.1423	0.9795

※ \*は5% \*\*は1% \*\*\*は0.1%の統計的な有意水準をしめす

表4-2-2 受講後の評価とSC友人数・課外活動参加との単純クロスの結果

(数字はカイ二乗検定危険確率)

	学 習 内 容	講師の教え方	仲間との関係	学園祭などの行事	施設や備品	全体として
SC友人数	0.2438	0.2042	0.0000 ***	0.0026 ***	0.0207 *	0.4626
課外活動への参加状況	0.3585	0.1756	0.0000 ***	0.0006 ***	0.0967	0.0000 ***

※ \*は5% \*\*は1% \*\*\*は0.1%の統計的な有意水準をしめす

## (2) シルバーカレッジでの友人数・課外活動参加との関連

受講後の評価とシルバーカレッジでの友人数、課外活動への参加との関連をみるために、受講後の評価の7項目のうち、「職員の対応」をのぞいた6項目を被説明変数に、「SC友人数」「課外活動への参加状況」をそれぞれ説明変数として、クロス集計をおこなった。クロス集計の結果は、カイ二乗検定の危険確率でしめしている(表4-2-2)。

### a. シルバーカレッジでの友人数との関連

先にもふれたように、高年大学の受講にかんする先行研究においては、学習内容もさることながら、そこでの仲間関係が受講生にとって重要な意味をもっているとの指摘がなされている。他



の高年大学における調査研究では、受講後の評価にたいして、そこで得られた友人の数が影響しているという知見もみられる(堀、1989)。そこで、ここでは、受講後の評価の規定要因のひとつとして、シルバーカレッジにおける友人数に着目し、その関連を分析した。

クロス集計の結果によれば、「SC友人数」は、「仲間との関係」「学園祭などの行事」と危険率0.1%で有意な相関をしめた。つまり、シルバーカレッジのできた友人数が多いもののほうが、「仲間との関係」「学園祭などの行事」について、肯定的に評価しているという結果であった。「学習内容」「講師の教え方」「全体として」の評価については、シルバーカレッジでの友人数と統計上有意な関連は見いだされなかった。

#### b. シルバーカレッジでの課外活動への参加との関連

シルバーカレッジでは、クラブ活動やボランティア活動などの課外活動がさかんにおこなわれている。そうした活動は、参加しているものにとっては、シルバーカレッジでの3年間のなかで大きな位置をしめている。それらは受講後の評価とどのように結びつくであろうか。

同じくクロス集計の結果によれば、「課外活動への参加」は、受講後の評価の6項目のうち、「仲間との関係」「学園祭などの行事」「施設や備品」「全体として」の4項目に統計的に有意な関連がみられた。具体的には、「仲間との関係」「学園祭などの行事」「全体として」については、課外活動に参加しているものほど、「非常によかった」「よかった」という肯定的な評価の割合が多いという結果であった。不参加のものでは「ふつう」という評価の割合がもっとも多く、「あまりよくなかった」「よくなかった」という否定的な評価も「参加」のものにくらべてやや多くなっている。なお、「学習内容」「講師の教え方」については、有意な関連はみられなかった。

#### c. 3重クロス集計による分析

先述したように、単純クロス集計結果から、受講後の評価のうち、とくに「仲間との関係」「学園祭などの行事」については、「性別」「SC友人数」「課外活動への参加状況」がそれぞれ有意に関連していることがわかった。そこで、これらの変数間相互の影響をさぐるために、3重クロス集計を行った。その結果は、表4-2-3から表4-2-5にしめす。3重クロスでコントロールしても、結果に変化なく有意差がみられたばあいのみ、ゴチックでしめしている。

これをみると、まず、「仲間との関係」についての受講後の評価には、表4-2-4と表4-2-5において変化がみられ、一部で有意差が消えている。まず、表4-2-4についてみると、性別と仲間関係への受講後の評価との関連は、シルバーカレッジでの友人数別に受講生をわけた場合、有意差がみられなくなっている。つまり、性別よりもシルバーカレッジでの友人数のほうが受講後の評価につよく影響していると考えられる。同様に、課外活動への参加と受講後の仲間関係への評価の関連についても、友人数でコントロールした場合、有意差がほとんど消えてしまった。つまり、課外活動への参加状況よりも、友人数のほうが、受講後の仲間関係への評価によりつよく影響していると思われる。

表4-2-3 受講後の評価とSC友人数・課外活動参加とのクロス集計の結果・性別コントロール（数字はカイ二乗検定危険確率）

	性別	仲間との関係	学園祭などの行事
SC友人数	男性	0.0000 ***	0.0053 **
	女性	0.0000 ***	0.3831
課外活動参加	男性	0.0000 ***	0.0020 **
	女性	0.0064 ***	0.2963

※ \*は5%、\*\*は1%、\*\*\*は0.1%の統計的な有意水準をしめす。

表4-2-4 受講後の評価と性別・課外活動参加とのクロス集計の結果・SC友人数コントロール（数字はカイ二乗検定危険確率）

	友人数	仲間との関係	学園祭などの行事
性別	4人以下	0.7438	0.0641
	5～9人	0.1253	0.0642
	10～19人	0.2576	0.0298
	20人以上	0.7390	0.4044
課外活動参加	4人以下	0.0425 *	0.2090
	5～9人	0.6840	0.0046 **
	10～19人	0.0142 *	0.5365
	20人以上	0.7925	0.9455

※ \*は5%、\*\*は1%、\*\*\*は0.1%の統計的な有意水準をしめす。

表4-2-5 受講後の評価と性別・SC友人数とのクロス集計の結果・課外活動への参加状況コントロール（数字はカイ二乗検定危険確率）

	課外活動への参加状況	仲間との関係	学園祭などの行事
性別	参加	0.0000 ***	0.0009 ***
	不参加	0.5314	0.0110 *
SC友人数	参加	0.0000 ***	0.0046 **
	不参加	0.1284 ***	0.2545

※ \*は5%、\*\*は1%、\*\*\*は0.1%の統計的な有意水準をしめす。

さらに、表4-2-5をみると、課外活動に不参加の場合のみ、性別と仲間関係への受講後の評価の有意差が消えている。つまり、課外活動に参加している場合は、女性の方が男性にくらべて、仲間関係への評価が高いが、課外活動に不参加のものでは、性別に関係なく、仲間との関係の評価が低くなる傾向がみられる。

「学園祭などの行事」にかんしては、3つの表のすべてにおいて変化がみられる。まず、表4-2-3についてみれば、女性の場合のみ、受講後の評価とシルバーカレッジでの友人数、課外活動への参加状況との有意差が消えている。つまり、女性では、友人数や課外活動への参加状況に関係なく、行事への評価が男性にくらべて高いという傾向があるといえよう。つづいて表4-2-4をみると、性別や課外活動への参加状況よりも、友人数のほうが学園祭などの行事への評

価に影響していると考えられる。最後に、表4-2-5をみると、課外活動に不参加の場合のみ、友人数と学園祭などの行事への評価との有意差が消えている。課外活動に不参加なものでは、友人数のいかにかわらず、行事への評価は低くなるようである。

### (3)ふだんの学習・社会活動との関連

上記の(2)までの分析では、受講後の評価のうち、「講義の内容」「講師の教え方」については、どの変数とも関連が見いだされなかった。では、いったい「講義の内容」「講師の教え方」への評価の規定要因は何であろうか。それらに高い評価を与えているもの、あるいは逆に低い評価を与えているものは、それぞれどのようなタイプの受講生なのであろうか。

本調査では、受講生がシルバーカレッジ以外に、ふだんおこなっていると考えられる学習・社会活動として7項目をあげ、その頻度についてもたずねている。こうしたふだんの学習・社会活動をどの程度おこなっているかが、「講義の内容」や「講師の教え方」についての受講後の評価と何らかのかたちでかかわっているのではないだろうか。これらシルバーカレッジでの学習内容にかんする評価を規定するものとしては、他に、受講生の学歴も要因として考えられるのだが、今回は調査に協力していただいたシルバーカレッジ事務局の方針もあって、学歴についての質問項目をもうけることができなかった。そこで、ここでは、受講生のふだんの学習・社会活動状況と、受講生のシルバーカレッジについての評価のうち、学習内容にかんする評価との関連をあきらかにしたい。

以下ではまず、シルバーカレッジ以外での学習・社会活動の単純集計結果、および、性別・年齢層別の集計結果をしめす。つづいて、受講後の評価のうち、「講義の内容」「講師の教え方」の2項目と、シルバーカレッジ以外での学習社会活動の7項目の関連をしらべるためにおこなったクロス集計の結果をしめす。

#### a. 単純集計の結果

シルバーカレッジ以外の学習・社会活動として、「ひとりでする趣味・学習・スポーツ」「地域の仲間や団体でする趣味・学習・スポーツ」「職場の仲間や団体でする趣味・学習・スポーツ」「地域や職場の仲間や団体以外とする趣味・学習・スポーツ」「カルチャーセンターや文化講演会などへの参加」「地域の自治会・婦人会などでの活動」「老人会や老人クラブでの活動」の7つの項目をもうけ、それぞれについて、「ほぼ毎日」「週に1回」「月に1, 2回」「年に数回」の4つのカテゴリーから一つを選んでもらった。

単純集計の結果は、表4-2-6にしめす。まず、全体の傾向をみると、「ひとりでする趣味・学習・スポーツ」については、「ほぼ毎日」(38.0%)、「週に1回」(32.7%)が多くなっている。「地域の仲間や団体でする趣味・学習・スポーツ」については、「月に1, 2回」(27.1%)、「週に1回」(23.9%)がやや多くなっている。「職場の仲間や団体でする趣味・学習・スポーツ」については、「まったくしない」(36.6%)がもっとも多い。「地域や職場の仲間以外でする趣味・学習・スポーツ」では、「月に1回」(27.7%)、「週に1回」(21.2%)の順に多くなっている。「カ

ルチャーセンターや文化講演会などへの参加」は、「年に数回」(37.5%)、「月に1、2回」(26.0%)が多い。「地域の自治会・婦人会などでの活動」では、「年に数回(24.7%)」、「まったくしない」(24.1%)、「ほとんどしない」(21.7%)が多かったが、「月に1、2回」も20.7%あった。「老人会や老人クラブでの活動」では、「まったくしない」(55.5%)、「ほとんどしない」(16.0%)が、あわせて7割と大部分をしめた。

性別の集計結果では、男性のほうが「ひとりでする趣味・学習・スポーツ」「職場の仲間や団体でする趣味・学習・スポーツ」「老人会や老人クラブでの活動」の活動頻度が女性より高かった。いっぽう、女性では「カルチャーセンターや文化講演会」の活動頻度について男性より高いという傾向がみられた。

表4-2-6 ふだんの社会活動

項目	性別	ほぼ毎日	週に1回	月に1、2回	年に数回	ほとんどしない	まったくしない	全体
一人でする趣味学習スポーツ	全体	38.0%(237)	32.7%(204)	19.4%(121)	4.0%(25)	3.7%(23)	2.1%(13)	100.0%(623)
	男性	42.4%(169)	31.1%(124)	18.5%(74)	4.3%(17)	2.5%(10)	1.3%(5)	100.0%(399)
	女性	30.4%(68)	35.7%(80)	21.0%(47)	3.6%(8)	5.8%(13)	3.6%(8)	100.0%(224)
地域の仲間や団体でする趣味学習スポーツ	全体	4.4%(25)	23.9%(136)	27.1%(154)	10.7%(61)	14.1%(80)	19.9%(113)	100.0%(569)
	男性	5.3%(19)	22.6%(81)	25.9%(93)	12.5%(45)	15.3%(55)	18.4%(66)	100.0%(359)
	女性	2.9%(6)	26.2%(55)	29.0%(61)	7.6%(16)	11.9%(25)	22.4%(47)	100.0%(210)
職場の仲間や団体でする趣味学習スポーツ	全体	0.7%(3)	10.1%(44)	16.8%(73)	19.8%(86)	16.1%(70)	36.6%(159)	100.0%(435)
	男性	1.0%(3)	7.9%(23)	19.6%(57)	27.1%(79)	16.5%(48)	27.8%(81)	100.0%(291)
	女性	—	14.6%(21)	11.1%(16)	4.9%(7)	15.3%(22)	54.2%(78)	100.0%(144)
地域や職場以外の仲間とする趣味学習スポーツ	全体	1.2%(6)	21.2%(110)	27.7%(144)	17.5%(91)	12.9%(67)	19.5%(101)	100.0%(519)
	男性	1.2%(4)	18.1%(61)	26.7%(90)	18.4%(62)	15.1%(51)	20.5%(69)	100.0%(337)
	女性	1.1%(2)	26.9%(49)	29.7%(54)	15.9%(29)	8.8%(16)	17.6%(32)	100.0%(182)
カルチャーセンターや文化講演会	全体	1.4%(8)	14.5%(82)	26.0%(146)	37.5%(211)	11.7%(66)	8.7%(49)	100.0%(562)
	男性	1.1%(4)	10.3%(36)	24.6%(86)	39.7%(139)	13.7%(48)	10.6%(37)	100.0%(350)
	女性	1.9%(4)	21.7%(46)	28.3%(60)	34.0%(72)	8.5%(18)	5.7%(12)	100.0%(212)
地域の自治会・婦人会などでの活動	全体	1.1%(6)	7.7%(41)	20.7%(111)	24.7%(132)	21.7%(116)	24.1%(129)	100.0%(535)
	男性	1.8%(6)	7.6%(25)	17.6%(58)	23.6%(78)	23.3%(77)	26.1%(86)	100.0%(330)
	女性	—	7.8%(16)	25.9%(53)	26.3%(54)	19.0%(39)	21.0%(43)	100.0%(205)
老人会や老人クラブでの活動	全体	2.0%(10)	6.8%(34)	11.6%(58)	8.2%(41)	15.9%(80)	55.5%(278)	100.0%(501)
	男性	3.0%(10)	7.9%(26)	9.8%(32)	8.8%(29)	19.5%(64)	50.9%(167)	100.0%(328)
	女性	—	4.6%(8)	15.0%(26)	6.9%(12)	9.2%(16)	64.2%(111)	100.0%(173)

※( )内はケース数。

#### b. 受講後の評価とのクロス集計結果

受講後の評価のうちの2項目「学習の内容」「講師の教え方」を被説明変数に、シルバーカレッジ以外での学習・社会活動の7項目を説明変数にクロス集計をおこなった。その結果をカイ二乗検定の危険率でしめたのが、表4-2-7である。

まず、「学習内容」への評価については、「ひとりでする趣味・学習・スポーツ」と統計上有意味な関連がみられた。そのクロス集計結果をまとめたものが表4-2-8である。「非常によかった」というものは、ふだんの「ひとりでする趣味・学習・スポーツ」を「まったくしない」「ほとんどしない」という層に多かった。また、「非常によかった」「よかった」という評価をあわせて

みたところ、「ほとんどしない」「年に数回」という層がとくに割合が高くなっている。「学習内容」については、ふだんの「ひとりでする趣味・学習・スポーツ」をふだんよくしているというものより、ふだんはまったくしないか、あまりしないというもののほうが評価が高くなる傾向があるといえよう。

表4-2-7 受講後の評価とふだんの社会活動との単純クロスの結果（数字はカイニ乗検定危険確率）

	学習内容	講師の教え方
一人でする趣味学習スポーツ	0.0014 **	0.0058 **
地域の仲間や団体でするスポーツ	0.5690	0.8305
職場の仲間や団体でする趣味学習スポーツ	0.4616	0.4850
地域や職場以外の仲間とする趣味学習スポーツ	0.7766	0.8388
カルチャーセンターや文化講演会	0.5194	0.0013 **
地域の自治会・婦人会などでの活動	0.8895	0.5857
老人会や老人クラブでの活動	0.8828	0.2111

※ \*は5%、\*\*は1%、\*\*\*は0.1%の統計的な有意水準をしめす。

つづいて、「講師の教え方」では、「ひとりでする趣味・学習・スポーツ」「カルチャーセンターや文化講演会への参加」について統計上、有意な関連がみられた。結果は、同じく表4-2-8にしめす。

この結果からみると、「ひとりでする趣味・学習・スポーツ」への取り組みかたと関連していえば、「講師の教え方」を「非常によかった」としているものは、「まったくしない」という層で23.1%がもっとも多く、つぎに多かったのが「ほとんどしない」層の13.0%であった。ただし、「まったくしない」層では、「ふつう」としたものも46.2%と、もっとも多かった。「非常によかった」と「よかった」の割合を合わせたところ、「年に数回」の層が68.0%ともっとも多くなり、つぎに「ほとんどしない」層が65.2%でつづく。つまり、「講師の教え方」についても「講義の内容」と同様、比較的高い評価をあたえているのは、「ひとりでする趣味・学習・スポーツ」を「年に数回」か「ほとんどしない」層であった。

さらに、「カルチャーセンターや文化講演会」への取り組みかたと関連していえば、「講師の教え方」を「非常によかった」としているのは、「全くしない」という層でもっとも多く、14.3%であった。また、「非常によかった」「よかった」を合わせると、「年に数回」の層が59.8%ともっとも多くなり、さらに「全くしない」が55.1%、「ほとんどしない」が53.8%でつづく。つまり、「カルチャーセンターや文化講演会」の受講を「年に数回」ないし「ほとんどしない」「まったくしない」層で、「講師の教え方」への評価が比較的高いという傾向がみられた。

以上の結果についてまとめると、次のようになる。

①「学習内容」についての評価は、「ひとりでする趣味・学習・スポーツ」の頻度がひくいものの方が高い。つまり、ふだんから「ひとりでする趣味・学習・スポーツ」をよくしているものの方が、していないものに比べて、若干、「学習内容」についての評価がきびしくなる傾向がみられる。

②「講師の教え方」についての評価は、「ひとりでする趣味・学習・スポーツ」「カルチャーセンターや文化講演会」の頻度がひくいものの方が高い。つまり、「講師の教え方」については、ふだんから「ひとりでする趣味・学習・スポーツ」にくわえ、「カルチャーセンターや文化講演会」の受講をよくしているものの方が、していないものに比べて、若干、評価がきびしくなるという傾向がみられる。

表4-2-8 ふだんの社会活動（「一人でする趣味・学習・スポーツ」・「カルチャーセンターや文化講演会」）と受講後の評価（「学習の内容」・「講師の教え方」）との単純クロス

項目		ほぼ毎日	週に1回	月に1、2回	年に数回	ほとんど しない	まったく しない	カイニ乗検 定危険確率		
一人でする 趣味学習 スポーツ	学習の内容	非常によ かった よかった ふつう あまりよく なかった よくなか った 全 体	9.1% (21) 41.4% (96) 41.4% (96) 8.2% (19) - - 100.0%(232)	6.0% (12) 44.5% (89) 37.5% (75) 11.5% (23) 0.5% (1) 100.0%(200)	6.8% (8) 42.7% (50) 42.7% (50) 6.8% (8) 0.9% (1) 100.0%(117)	8.0% (2) 60.0% (15) 32.0% (8) - - - - 100.0% (31)	17.4% (31) 56.5% (13) 8.7% (2) 17.4% (4) - - 50.2% (22)	30.8% (4) 23.1% (3) 30.8% (4) 7.7% (1) 7.7% (1) 60.5%(22)	0.0032 **	
	講師の 教え方	非常によ かった よかった ふつう あまりよく なかった よくなか った 全 体	9.9% (23) 39.1% (91) 43.3%(101) 7.7% (18) - - 100.0%(233)	4.0% (8) 48.0% (95) 42.9% (85) 4.5% (9) 0.5% (1) 100.0%(198)	7.8% (9) 52.2% (60) 33.9% (39) 5.2% (6) 0.9% (1) 100.0%(115)	8.0% (2) 60.0% (15) 32.0% (8) - - - - 100.0% (25)	13.0% (3) 52.2% (12) 26.1% (6) 8.7% (2) - - 100.0% (23)	23.1% (3) 23.1% (3) 46.2% (6) - - 7.7% (1) 100.0%(13)	0.0058 **	
	カルチャー センター や文化 講演会	学習の内容	非常によ かった よかった ふつう あまりよく なかった よくなか った 全 体	- - 50.0% (4) 12.5% (1) 37.5% (3) - - 100.0% (8)	7.4% (6) 37.0% (30) 44.4% (36) 11.1% (9) - - 100.0% (81)	9.7% (14) 44.1% (64) 39.3% (57) 6.2% (9) 0.7% (1) 100.0%(145)	7.8% (16) 45.6% (93) 36.8% (75) 9.3% (19) 0.5% (1) 100.0%(204)	9.1% (6) 45.5% (30) 37.9% (25) 7.6% (5) - - 100.0% (66)	14.0% (7) 42.0%(21) 36.0%(18) 6.0% (3) 2.0% (1) 100.0%(50)	0.5194
		講師の 教え方	非常によ かった よかった ふつう あまりよく なかった よくなか った 全 体	- - 37.5% (3) 25.0% (2) 37.5% (9) - (3) 100.0% (8)	12.3% (10) 29.6% (24) 54.3% (44) 3.7% (3) - - 100.0% (81)	5.7% (8) 44.0% (62) 46.1% (65) 3.5% (5) 0.7% (1) 100.0%(141)	8.3% (17) 51.5%(105) 34.3% (70) 5.9% (12) - - 100.0%(204)	4.6% (3) 49.2% (32) 43.1% (28) 3.1% (2) - - 100.0% (65)	14.3% (7) 40.8%(20) 36.7%(18) 6.1% (3) 2.0% (1) ####(49)	0.0013 **

※（ ）内はケース数。

### 3. 考 察

受講後の評価は、「非常によかった」と「よかった」という評価をあわせると、すべての項目において過半数を超えており、シルバーカレッジは概して高い評価を受講生から得ているといえる。なかでも、「施設や設備」「職員の対応」「仲間との関係」の3項目についての評価が高かった。

受講後の評価のうち、「職員の対応」をのぞく6項目についてクロス集計をおこなった結果、「仲間との関係」「学園祭などの行事」「全体として」の3項目については、性別と関連がみられた。つまり、それら3つの項目では、とくに女性のほうが男性にくらべ、評価がやや高くなる傾向がみられた。これについては、第1節でみたような、受講動機の男女によるちがいが影響しているのかもしれない。女性では、受講動機として「さまざまな人と接する」ことをあげているものがもっとも多かったのに対して、男性ではより学習内容と関わりが深い「趣味や教養を深める」を受講動機としてあげるものがもっとも多かった。つまり、男女ではシルバーカレッジへの期待そのものが若干ことなっていることが予想される。それが受講後の評価の男女によるちがいとなってあらわれたと考えることができよう。また、男女によって友人や仲間との関係にもとめるものがそもそもことなっている、ということもあるかもしれない。

他の基本的な属性、「健康状態」「配偶者の健康状態」「現在の就労状況」「配偶者の有無」「同居子の有無」についても、それぞれ受講後の評価の各項目とのクロス集計をおこなったが、「年齢」と「配偶者の有無」以外は有意な関連は見いだせなかった。「年齢」については、「施設や備品」について、有意な関連がみられた。具体的には、年齢層が高いものよりも、低いもののほうが「施設や備品」についての評価が高くなる傾向がみられた。今回の調査データだけで説明することはむずかしく、断言はできないが、年齢が高い層の受講生にとって、シルバーカレッジの施設や備品の利用上、やや不都合な点がみられた可能性も考えられる。つづいて、「配偶者の有無」にかんしては、「学園祭などの行事」について有意な関連がみられた。すなわち、配偶者のいないもののほうが、いるものよりも「学園祭などの行事」について高い評価をあたえているという結果であった。これだけでは十分な判断はできないが、配偶者のいないもののほうがいるものよりも、より積極的にこうした行事に参加していたという可能性も考えられる。

さらに、受講後の評価について、シルバーカレッジでの友人の有無や友人数との関連をみると、とくに「仲間との関係」「学園祭などの行事」への評価については有意な関連が見いだされた。つまり、友人が「できた」と答えたものほど、また、友人の数が多いものほど、「仲間との関係」「学園祭などの行事」への評価が高くなっている。

また、受講後の評価と、課外活動への参加との関連をみると、「仲間との関係」「学園祭などの行事」「施設や備品」「全体として」の4項目について関連がみられた。すなわち、課外活動に参加しているものほど、「仲間との関係」「学園祭などの行事」「施設や備品」「全体として」について、肯定的な評価をするものの割合がより多くなっていた。

また、3重クロス集計の結果、「課外活動への参加状況」は、受講後の評価と「性別」のクロス集計の結果に影響を与えていることがあきらかになった。課外活動に参加していないケース群の

場合のみ、「仲間との関係」「学園祭などの行事」の項目における性別による有意差が消えた。

これによれば、課外活動に参加していないものでは、男女別と関係なく、参加しているものにくらべて、「仲間との関係」や「学園祭などの行事」への評価がやや低くなる傾向がみられるといえる。

以上の結果から、受講後の評価のうち、「仲間との関係」「学園祭などの行事」「施設や備品」「全体として」の評価にかんして、課外活動へ参加したことがあるかどうかが大きく関係していることがあきらかとなった。これにたいして、友人数は、「仲間との関係」「学園祭などの行事」には影響していたが、「全体として」の評価には関連していなかったことは興味深い。「全体として」という質問項目じたい、ひじょうにあいまいな表現なので、これをもってそのままシルバーカレッジへの受講生の総合的な評価としてみることはできない。また、前章でみたように、課外活動への参加と友人数は互いに独立した項目ではなく、むしろつよく関連している。しかしながら、受講生にとって、友人の数が多きことよりも、課外活動に参加することのほうが、シルバーカレッジにおける学習活動全体での成果に影響している可能性が指摘できよう。今回の調査結果だけでは断言できないが、課外活動に参加しているかどうか、シルバーカレッジでの友人関係へのコミットメントの深さ（つまり友人関係の質的側面）、さらにシルバーカレッジでの学習活動全体におけるコミットメントの深さにつよく影響しているとも考えられる。

受講後の評価のうち、「学習内容」「講師の教え方」などは、上記で分析した各項目（「性別」や「課外活動への参加」「シルバーカレッジでの友人数」）とは相関が見られなかった。シルバーカレッジでの学習そのものにかかわる評価については、当然のことながら、別の要因を分析しなければならない。

そこで、受講生がシルバーカレッジ以外でとりくんでいるふだんの学習・社会活動との関連をしらべてみた。その結果、「学習内容」にかんしては、ふだんから「ひとりでする趣味・学習・スポーツ」をよくしているもの、「講師の教え方」にかんしてはそれに加えて「カルチャーセンターや文化講演会への参加」をよくしているもののほうが、評価がややきびしくなる、という傾向がみられた。これは、日常的に学習やスポーツなどの活動にとりくんでいたり、カルチャーセンターに頻繁に通ったりしているものでは、そうでないものにくらべて、シルバーカレッジでの学習への期待のレベルが高くなっているためと考えられよう。

今回の調査研究では、受講生のシルバーカレッジにおける学習内容そのものへのニーズや評価にかんしては、十分にあきらかにはしていない。それらは、上記のような受講生のふだんの学習・社会活動にくわえて、たとえば、本調査では都合上、調査項目に含むことができなかった学歴、および他の老年大学（たとえば兵庫県では、いなみの学園が有名である）などの受講経験を含めた、学習経歴が関連していると予想される。また、今回の調査では、シルバーカレッジの4つのコースについての質問項目をもうけていなかった。「学習内容」や「講師の教え方」への評価は、個々の学習経歴だけでなく、各コースごとに分析する必要があると思われる。



## 第5章 受講修了後の交流への希望

シルバーカレッジの受講は3年間で修了する。そこで知り合った友人や仲間と、修了後も何らかのかたちで交流をつづけていきたい、という声を、筆者は受講生と接するなかで耳にすることが少なくなかった。そこで、本調査では、3年間の受講修了後に希望する交流のありかたへの意識についてたずねている。以下では、その結果について報告する。なお、集計では未回答をのぞいている。

### 1. 全体の傾向

#### (1) 受講修了後の交流への希望

受講生たちは3年間の受講を修了後、シルバーカレッジでできた友人との関係をどのようなかたちで続けていきたいと考えているのだろうか。「月に数回、個人やグループで会ったり、話をする機会があったほうがいい」「年に数回、同窓会などの機会に会うだけでよい」「とくに会いたいと思わない」「わからない」の4つの項目から、1つだけを選んでもらうかたちでたずねた。

結果は、表5-1-1に示す。もっとも多かったのは、「月に数回、個人やグループで会ったり、話をする機会があったほうがいい」で、62.9%であった。また、「は年に数回、同窓会などの機会に会うだけでよい」が30.1%で、「とくに会いたいと思わない」「わからない」は、それぞれ3.1%、4.0%にすぎなかった。受講生の9割以上が修了後もなんらかのかたちで、友人関係をつなげていきたいと考えているようである。

表5-1-1 受講修了後の交流への希望

月に数回会いたい	62.9%	(445)
年に数回会いたい	30.1%	(213)
会いたいと思わない	3.1%	(22)
わからない	4.0%	(28)
	100.0%	(708)

※（ ）内はケース数。

#### (2) 受講修了後の交流に希望する内容

(1)で述べたように、受講生の多くが受講修了後も交流を継続することを望んでいるようであるが、具体的には、どのような内容の交流を望ましいと考えているのであろうか。なお、受講生のあいだでは「卒業」という表現が一般的であったので、質問紙においてはそれを用いている。「卒業後、ときどき会ったり食事をしたりして親睦をふかめたい」「卒業後、いっしょに趣味や学習、クラブ活動などをおこなっていきたい」「卒業後、いっしょに事業をはじめ、収入の得られる仕事をしたい」「卒業後、いっしょにボランティアなど、地域や社会に貢献する活動をしたい」「卒業後困ったときに助け合ったり、情報交換ができるような自助グループをつくりたい」「その他」「わからない」の7項目について、あてはまるものすべてを選んでもらうかたちでたずねた。

結果を男女別にしめたものが、表5-1-2である。全体的には、「趣味や学習・クラブ活動」(36.3%)という回答がもっとも高率で、以下、「ときどき会食」(26.2%)「ボランティア活動で地域社会貢献」(20.3%)とつづく。男女別でことなつた傾向がみられたのは、「自助グループ」についてで、これは女性のほうにやや高率であった。

表5-1-2 受講修了後に希望する交流の内容(複数回答) (n=450)

項目	全体	男性	女性
食事や親睦会	26.2% (280)	26.2% (155)	26.2% (125)
趣味・学習・クラブ活動	36.3% (388)	38.9% (230)	33.1% (158)
共同で事業をおこす	1.6% (17)	1.7% (10)	1.5% (7)
ボランティア活動	20.7% (221)	20.9% (124)	20.3% (97)
自助グループ	14.9% (159)	12.2% (72)	18.2% (87)
その他	0.5% (5)	0.2% (1)	0.8% (4)
わからない	- -	- -	- -
	100.0% (1070)	100.0% (592)	100.0% (478)

※( )内はケース数。

## 2. クロス集計による分析

受講修了後の交流への希望を規定するものは、いったいなんであろうか。「受講修了後の交流への希望」について、他の変数との関連をみるために、クロス集計をおこなつた。

### (1) 基本的属性との関連

まず、「受講後の交流への希望」を被説明変数に、サンプルの基本的属性を説明変数としてクロス集計をおこない、受講後の評価への影響をしらべる。ここで説明変数として用いるのは、「性別」「年齢」「学年」「本人の健康状態」「配偶者の有無」「同居子の有無」「現在の就労状況」の7項目である。

上記の結果をカイ二乗検定の危険確率でしめたものが、表5-2-1である。統計的な有意差がみとめられたのは、「性別」「学年」「現在の就労状況」の3つであった。具体的には、「性別」にかんしては、男性に比べ女性のほうが「月に数回」の交流をのぞむ確率が高いという傾向がみられた。「学年」では、1, 2年生に比べ、3年生では「月に数回」が少なく、「年に数回」がやや多くなる傾向がみられた。また、1年生では「わからない」が他学年より多かつた。「現在の就労状況」についてみると、「無職」のケースの場合、「仕事をしている」「求職中」よりも、「月に数回」をのぞんでいる率が高かつた。また、「求職中」のものでは、「わからない」が圧倒的に多かつた。

「年齢」や「本人の健康状態」、「配偶者の有無」「同居子の有無」などは受講修了後に希望する交流の頻度とは、統計的に有意な相関がみられなかつた。

表5-2-1 受講修了後の交流への希望と基本的属性との単純クロス

		受講修了後の交流への希望					カイ二乗 検定危険 確率
		月に数回	年に数回	会いたい と思わない	わからない	全体	
性別	男性	59.1%(259)	32.9%(144)	4.3%(19)	3.7%(16)	100.0%(438)	0.0099**
	女性	68.9%(186)	25.6%(69)	1.1%(3)	4.4%(12)	100.0%(270)	
年齢	64歳以下	70.1%(103)	23.8%(35)	2.0%(3)	4.1%(6)	100.0%(147)	0.1771
	65～74歳	62.2%(280)	30.7%(138)	3.3%(15)	3.8%(17)	100.0%(450)	
	75歳以上	50.7%(34)	41.8%(28)	4.5%(3)	3.0%(2)	100.0%(67)	
学年	1年生	61.9%(1800)	28.5%(83)	2.7%(6)	6.9%(20)	100.0%(291)	0.0018**
	2年生	68.9%(144)	24.4%(51)	3.6%(8)	2.9%(6)	100.0%(209)	
	3年生	58.3%(123)	37.9%(80)	2.8%(6)	0.9%(2)	100.0%(211)	
健康状態	非常に健康	69.7%(85)	22.1%(27)	2.5%(3)	5.7%(7)	100.0%(122)	0.4632
	どちらかといえば健康	62.4%(302)	30.8%(149)	3.3%(16)	3.5%(17)	100.0%(484)	
	どちらかといえば病気がち	59.2%(29)	36.7%(18)	2.0%(1)	2.0%(1)	100.0%(49)	
	寝込むことが多い	50.0%(1)	50.0%(1)	-	-	100.0%(2)	
配偶者の有無	配偶者あり	61.7%(342)	31.0%(172)	3.6%(20)	3.6%(20)	100.0%(554)	0.1301
	配偶者なし	70.0%(91)	23.1%(30)	1.5%(2)	5.4%(7)	100.0%(130)	
配偶者の健康状態	非常に健康	61.2%(63)	31.1%(32)	1.9%(2)	5.8%(6)	100.0%(103)	0.7071
	どちらかといえば健康	61.6%(226)	30.8%(113)	4.1%(15)	3.5%(13)	100.0%(367)	
	どちらかといえば病気がち	58.6%(41)	35.7%(25)	4.3%(13)	1.4%(1)	100.0%(70)	
	寝込むことが多い	87.5%(7)	12.5%(1)	-	-	100.0%(8)	
同居士の有無	同居士あり	65.0%(152)	27.8%(66)	3.4%(8)	3.8%(9)	100.0%(234)	0.9166
	同居士なし	62.9%(286)	30.3%(138)	3.1%(14)	3.7%(17)	100.0%(455)	
就労状況	仕事をしている	54.8%(34)	40.3%(25)	-	4.8%(3)	100.0%(62)	0.0408*
	無職	64.1%(345)	29.2%(157)	3.3%(18)	3.3%(18)	100.0%(538)	
	求職中	50.0%(5)	30.0%(3)	-	20.0%(2)	100.0%(10)	

\* ( ) 内はケース数。

(2) シルバーカレッジでの友人の有無と数・課外活動との関連

「受講修了後の交流希望頻度」について、「SC友人の有無」「SC友人数」「課外活動への参加状況」の3項目それぞれとクロス集計をおこなった結果を、カイ二乗検定の危険確率でしめたものが表5-2-2である。

表5-2-2 受講修了後の交流への希望とSC友人の有無・SC友人数・課外活動との単純クロス

		受講修了後の交流への希望					カイ二乗 検定危険 確率
		月に数回	年に数回	会いたい と思わない	わからない	全体	
SC友人の有無	できた	65.0%(433)	29.6%(197)	2.4%(16)	3.0%(20)	100.0%(666)	0.00000***
	できなかった	30.3%(10)	36.4%(12)	15.2%(5)	18.2%(6)	100.0%(33)	
SC友人数	10人未満	50.2%(148)	40.3%(119)	4.1%(12)	5.4%(16)	100.0%(295)	0.00000***
	10人以上	77.4%(257)	20.5%(68)	0.9%(3)	1.2%(4)	100.0%(332)	
課外活動	参加	68.4%(405)	26.9%(159)	1.5%(9)	3.2%(19)	100.0%(592)	0.00000***
	不参加	30.9%(30)	48.5%(47)	12.4%(12)	8.2%(8)	100.0%(97)	

※ ( ) 内はケース数。

これによれば、「SC友人の有無」「SC友人数」「課外活動への参加状況」の3項目いずれも、受講修了後の交流への希望と危険率0.1%のつよい相関をしめた。「SC友人の有無」については友人が「できた」するもの、「SC友人数」については「10人以上」のもの、「課外活

動への参加状況」では「参加」のものの方が、受講修了後の「月に数回」の交流を望む率がより高く、「会いたいと思わない」「わからない」と答える比率はより低くなっていた。

### (3) 受講後の評価との関連

シルバーカレッジへの評価は、受講後の仲間との交流にたいする希望とどのように関わっているのだろうか。受講後の評価のうち、「講師の教え方」と「職員の対応」をのぞいた6項目それぞれについて、「受講修了後の交流への希望」とのクロス集計をおこない、その結果をカイ二乗検定での危険率でしめたのが、表5-2-3である。

表5-2-3 受講修了後の交流への希望と受講後の評価とのクロス集計の結果  
(数字はカイ二乗検定危険率)

	学習内容	仲間との関係	学園祭などの行事	施設や備品	全体として
受講修了後の交流への希望	0.1488	0.0000 ***	0.0000 ***	0.2597 *	0.0000 ***

※ \*は5%、\*\*は1%、\*\*\*は0.1%の統計的な有意水準をしめす。

この結果によると、受講後の評価の5項目のうち、「仲間との関係」「学園祭などの行事」「全体として」の4項目について統計的な有意差がみられた。つまり、「仲間との関係」「学園祭などの行事」「施設や備品」「全体として」について、「非常によかった」「よかった」と答えているものが、受講修了後も「月数回」という頻繁な交流の継続を希望している割合が高くなっていた。

## 3. 考 察

シルバーカレッジの受講修了後の仲間との交流について、受講生にたずねたところ、9割以上が何らかのかたちで交流を継続していきたいと考えているようであった。

もっとも多かったのが、「月に数回個人やグループで会ったり話をする機会があったほうがいい」とするもので6割をしめた。いっぽう、「年に数回、同窓会などの機会に会うだけでよい」は3割であった。「月に数回」という比較的ひんばんな交流を受講修了後も続けていきたいという受講生が6割いたことは、シルバーカレッジで得られた仲間との交流が多数の受講生にとって、生活の中で一定の位置をしめつつあることを示唆している。

受講修了後の交流に希望する内容を複数回答でたずねたところ、「趣味や学習・クラブ活動などをおこなっていきたい」という課外活動の延長ともいえるようなタイプの交流への希望がもっとも高率で36.3%であった。つぎに多かったのは、「ときどき会ったり食事をしたりして親睦を深めたい」という同窓会のようなタイプの交流への希望で、26.2%であった。これらの結果から、シルバーカレッジ受講修了後は、課外活動的な交流・同窓会的な交流をもっともつよくのぞんでいることがわかった。

一般に、高齢期は、定年退職や子どもの離家などによって、それまでの社会的役割が失われ、

人間関係の再編成がおこなわれる時期であるとされる。そのなかで、高齢者の人間関係の構成は、居住する地域の友人を中心としたものによって変わっていく傾向があるといわれている。ただ、その場合の「地域」とは、現代の高齢者、とくに都市高齢者にとっては、森岡（1994）もいうように、従来の近所づきあいや近隣関係におけるようなせまい空間ではなく、居住地を中心としつつも、よりひろがりを持つ空間である。たとえば、神戸市ないしその隣接地域までをふくめた意味である。そこで展開される人間関係は従来の地縁関係とはことなり、「居住にともなって自動的・非選択的に結ばれる色彩のつよい関係」（森岡、同）ではなく、「ライフスタイルの似かよう相手を相互に選択しうる友人関係」（同）となる。現代の都市高齢者が必要としているのは、このようなタイプの友人関係の形成、いかえれば、比較的ひろい地域的空間における選択的な友人関係であると考えられる。じっさい、第4章でもみたように、シルバーカレッジの受講生の多くは、地域（より狭い意味での地域）の自治会や婦人会、老人会などの活動に、それほど積極的に参加してはいないという結果であった。そういう意味で、神戸市シルバーカレッジは、従来の老人会などに代わって、現代の都市高齢者により適合的なかたちで、地域に同世代の仲間集団を形成する場として、重要な意味をになっているのだと思われる。

いずれにせよ、受講生にとってシルバーカレッジであらたに得られた友人関係は、受講生にとってのシルバーカレッジ受講のもっとも大きな成果のひとつである。それは、より充実した高齢期を生きるためのひとつの「資源」となるであろう。

さらに、シルバーカレッジの設立趣旨をみると、シルバーカレッジでつちかわれた人間関係は、高齢者のあたらしいネットワークとして、個人にとってだけでなく、高齢社会をむかえた地域社会にとっての資源として期待されている。日本の高齢者は、他の先進諸国とくらべると、職業への参加率は高いが、社会活動への参加率は低いといわれており、その意味でもシルバーカレッジへの社会の期待は大きいものとなっているのである。

今回の調査結果では、受講修了後に「いっしょにボランティア活動など、地域や社会に貢献する活動をしたい」と回答したのも、20.3%（221件）あった。「困ったときに助けあったり、情報交換ができるような自助グループをつくりたい」という回答も14.9%（159件）あり、とくに女性で多かった。第2章の受講動機では、「ボランティアや地域活動に役立てたいから」という回答が約10%にすぎなかったことを考えると、この結果は、受講による社会参加意識の向上として特筆しておくべきであろう。

シルバーカレッジは高年大学のなかでも比較的あたらしく、その成果のひとつとしてのネットワークが地域社会で今後どのように展開していくのかはまだまだ未知数である。ひきつづき追跡調査研究をおこなっていく必要があるだろう。

ところで、「受講修了後の交流への希望」にたいしてどんな要因が影響しているのかをさぐるためにクロス集計をおこなったところ、以下のような結果がみられた。

基本的属性にかんしていうと、統計的な有意差がみとめられたのは、「性別」「学年」「現在の就労状況」の3つであった。

「性別」にかんしては、男性にくらべ女性のほうが「月に数回」の交流をのぞむ確率が高いという傾向がみられた。これについては、第2章でも述べたように、シルバーカレッジへの期待が男女により若干ことなる、という点も要因のひとつとして考えられる。また、女性のほうが課外活動に参加している率が高いことも要因であろう。上記で述べたように、「受講修了後の交流に希望する内容」では、課外活動的なタイプの交流を望むケースが多かったからである。

「学年」では、1, 2年生にくらべ、3年生では「月に数回」が少なく、「年に数回」がやや多くなる傾向がみられた。これについては、学年ごとのカラーがことなることもあり、単純な判断はしにくい。たとえば、受講の真っ只中にある1, 2年生にたいし、3年生は「卒業」を間近にひかえ、シルバーカレッジでの活動にひと区切りつけてしまっていたため、とも考えられる。また、1年生では「わからない」が他学年より多かったが、これは当然のことであろう。

「現在の就労状況」についてみると、「仕事をしている」「求職中」よりも、「無職」のケースで、「月に数回」をのぞんでいる率が高かった。また、「求職中」のものでは、「わからない」が圧倒的に多かった。

つまり、受講修了後の交流への希望については、男性よりも女性、3年生よりも1・2年生、また、現在無職で再就職の予定のないものがよりひんばんな交流をのぞんでいるという結果であった。また、「年齢」や「本人の健康状態」、「配偶者の有無」「同居子の有無」などは、受講修了後に希望する交流と統計的に有意な相関がみとめられなかった。

つづいて、「SC友人の有無」「SC友人数」「課外活動への参加状況」が、受講修了後の交流への希望とどのように関連しているかをしらべたところ、3つとも危険率0.1%のつよい相関をしめした。つまり、シルバーカレッジで友人ができたもの、友人数が10人以上のもの、課外活動に参加しているもののほうが、受講修了後も「月に数回」というひんばんな交流をのぞんでいるという結果であった。

なお、今回の調査研究においては、受講生の友人形成に重点をおいていたために、シルバーカレッジ受講の成果が、受講生一人ひとりの個人としての生き方にどのような影響を与えたのかという点については、あきらかにできていない。たとえば、受講修了後、シルバーカレッジの仲間とは関係なく、ひとりで、ないしシルバーカレッジ以外の仲間と趣味や学習、スポーツなどの活動を展開していくものもあるだろう。また、同じくボランティア活動に各自で取り組んだり、既存の社会活動グループに参加するものもあるかもしれない。その点については、今後の重要な研究課題である。

個人としての老いをどう生きるか、人生の最晩年をどのように過ごすかということは、人生80年という大衆長寿の時代をむかえ、高齢期が20年ないし30年という長きにわたるようになったいま、われわれ日本人にとって大きな課題である。現在、高齢期の入り口、ないし真っ只中にあるシルバーカレッジ受講生たちは、まさにこの問題に直面し、身近なモデルが少ないなか、老いの生き方を各自で模索しているのである。あらたな長寿社会における老いの生き方を切りひらく、いわばパイオニア的存在として、神戸市シルバーカレッジ受講生への調査データは重要な資料に

なっていくと考える。

**【参考文献】**

安達正嗣 1999『高齢期家族の社会学』世界思想社。

直井道子 1994「余暇行動と幸福感」、森岡清志・中林一樹編『変容する高齢者像——大都市高齢者のライフスタイル』日本評論社所収。

西下彰俊 1988「高齢期の学習活動——その現状と課題」、老年社会科学、vol.10-2。

藤田綾子ほか 1985「老年大学受講者の受講理由について——老年期の発達課題との関係」老人問題研究、vol.5。

堀薫夫 1989「老年大学における学習と評価に関する調査研究——福井県鯖江市老年大学を事例として——」、社会老年学 No.30。

森岡清志 1994「定年後のパーソナルネットワーク」、森岡・中林編 前掲書所収。

神戸市シルバーカレッジ事務局編 1997『神戸市シルバーカレッジ 生涯学習4年間のあゆみ』。

(猫田 千里)

## 第2部 高齢者の家族・親族関係

高齢期は、子の独立や定年退職などのライフイベントにともなう家族変化によって、家族の再構築がおこなわれる時期でもある（安達、1999）。現在でも家族は、高齢者にとって依然として重要な意味をもつと言える。そこで第2部では、家族・親族関係に焦点をあて、夫婦や親子などの家族・親族関係の実態、家族・親族との交流状況、介護のあり方と行政施策といったテーマを設定することによって、神戸市シルバーカレッジ受講生の回答の結果を明らかにしていきたい。それぞれの調査項目に関して、単純集計で全体的な傾向を提示して、とくに性別と年齢別を中心に家族形態別なども独立変数として適宜、考慮しながら、クロス集計による分析の結果も示していくことにする。

なお集計の際には、年齢別は「64歳以下」（21.7%）、「65～69歳」（40.6%）、「70～74歳」（26.9%）、「75歳以上」（10.8%）というように4つに再分類し、家族形態別は「その他」を欠損値として除き、「ひとり暮らし」（11.0%）、「夫婦のみ」（51.1%）、「未婚子や親と同居」（24.1%）、「子の家族らと同居」（13.8%）の4分類を使用している。

### 第6章 家族・親族関係の実態

#### 1. 性別・年齢別の家族形態

まず、性別と年齢別の関連について述べておきたい。表6-1-1のように、全体的に「65～69歳」（40.6%）が多いが、男性では「70～74歳」（33.1%）が、女性では「64歳以下」（33.1%）が、それぞれ比較的高率である。つまり、女性より男性のほうが高齢であることがわかる。

すでに述べたように家族形態については、全体的には「夫婦のみ」が過半数（51.1%）をしめている。調査年次の1997年においては、国民生活基礎調査によれば、全国の夫婦のみの高齢者世帯は26.1%であるから、この割合は大きいと言える（総務庁編、1999）。また性別では、表6-1-2にみられるように、女性に比べて男性では「夫婦のみ」（62.0%）が、男性に比べて女性では「ひとり暮らし」（24.0%）、「子の家族らと同居」（19.4%）が、それぞれ多くなっている。表6-1-3の年齢別のおもな特徴としては、「75歳以上」では他の年齢層と比べて「ひとり暮らし」（17.1%）と「子の家族らと同居」（24.3%）の割合の高さが目立つことである。

表6-1-1 性別×年齢別

					％（実数）
	64歳以下	65～69歳	70～74歳	75歳以上	合計
男性	15.2(66)	40.2(175)	33.1(144)	11.5(50)	100.0(435)
女性	33.1(82)	41.1(102)	16.1(40)	9.7(24)	100.0(248)
全体	21.7(148)	40.6(277)	26.9(184)	10.8(74)	100.0(683)

0.1%水準で有意差あり



表6-1-2 性別×家族形態

％(実数)

	ひとり暮らし	夫婦のみ	未婚子や親と同居	子の家族らと同居	合計
男性	3.4(15)	62.0(272)	24.1(106)	10.5(46)	100.0(439)
女性	24.0(62)	32.6(84)	24.0(62)	19.4(50)	100.0(258)
全体	11.0(77)	51.1(356)	24.1(168)	13.8(96)	100.0(697)

0.1%水準で有意差あり

表6-1-3 年齢別×家族形態

％(実数)

	ひとり暮らし	夫婦のみ	未婚子や親と同居	子の家族らと同居	合計
64歳以下	7.7(11)	46.2(66)	37.1(53)	9.1(13)	100.0(143)
65～69歳	9.0(24)	55.2(148)	26.5(71)	9.3(25)	100.0(268)
70～74歳	7.9(14)	56.5(100)	18.1(32)	17.5(31)	100.0(177)
75歳以上	17.1(62)	47.1(33)	11.4(8)	24.3(17)	100.0(120)
全体	9.3(61)	52.7(347)	24.9(164)	13.1(86)	100.0(658)

0.1%水準で有意差あり

## 2. 夫婦関係

### (1) 配偶者の有無

すでに第1部で紹介されているように、調査時現在において、単純集計による全体的な傾向としては、有配偶者83.8% (553) と多数をしめているのに対して無配偶者16.2% (107) である。さらに性別のクロス集計をみると、女性では男性にくらべて無配偶者が多く、男女で大きな違いが示されている。また年齢別(表6-2-1)では、やはり一般的に言われているとおり、高齢になるにつれて配偶者を喪失する確率が増加することもあり、年齢が上昇するほど有配偶者の割合が減少する傾向にある。

表6-2-1 年齢別×配偶者の有無

％(実数)

	有配偶	無配偶	合計
64歳以下	87.4(125)	12.6(18)	100.0(143)
65～69歳	85.0(227)	15.0(40)	100.0(267)
70～74歳	83.3(150)	16.7(30)	100.0(180)
75歳以上	72.9(51)	27.1(19)	100.0(70)
全体	83.8(553)	16.2(107)	100.0(660)

5%水準で有意差あり

### (2) 配偶者のいない理由

無配偶者である理由としては、これもすでに第1部で書かれているように、未婚が15.9% (17) に対して離・死別が84.1% (90) と大多数であり、性別でみると女性に未婚が多くなっている。年齢別では、明確な有意差はみられないが、高齢になるほど、離・死別の割合が増加する傾向はあらわれている。

### 3. 親子関係ときょうだい

#### (1) 同居子の有無

現在、同居している子どもがいるかどうかでは、全体的には同居子のない割合が66.3% (471) に対して、逆にある割合が33.7% (239) と少ない。高齢者の同居率は、調査年次の1997年における国民基礎調査では全国で52.2%となっているので、調査対象者の場合には低率と言えよう（高齢社会白書、1999）。性別では、表6-3-1のように、男性に比べて女性では、「同居子あり」（38.7%）が多くなっている。年齢別での差異はみられない。

表6-3-1 性別×同居子の有無 % (実数)

		同居子あり	同居子なし	合計
男	性	30.5(135)	69.5(307)	100.0(442)
女	性	38.7(103)	61.3(163)	100.0(266)
全	体	33.6(238)	66.4(470)	100.0(708)

5%水準で有意差あり

#### (2) 別居子の有無

いっぽう別居している子については、別居子のある割合が82.9%と圧倒的に多数である。表6-3-2のように性別では、「別居子あり」の割合は女性に比べて男性に多い。また家族形態別の表6-3-3では、「別居子なし」は「ひとり暮らし」（31.1%）のばあいが多く、「子の家族らと同居」（29.7%）、「未婚子や親と同居」（25.0%）の順となっており、「夫婦のみ」（7.2%）には少ない。この要因のひとつには、「ひとり暮らし」に女性の未婚者が多く含まれているためと思われる。別居子の有無でも、年齢別による差異はみあたらない。

表6-3-2 性別×別居子の有無 % (実数)

		別居子あり	別居子なし	合計
男	性	85.9(379)	14.1(62)	100.0(441)
女	性	77.7(206)	22.3(59)	100.0(265)
全	体	82.9(585)	17.1(121)	100.0(706)

1%水準で有意差あり

表6-3-3 家族形態別×別居子の有無 % (実数)

	別居子あり	別居子なし	合計	
ひとり暮らし	68.9(51)	31.1(23)	100.0(74)	
夫婦のみ	92.8(323)	7.2(25)	100.0(348)	
未婚子や親と同居	75.0(150)	25.0(41)	100.0(191)	
子の家族らと同居	70.3(64)	29.7(27)	100.0(91)	
全	体	82.9(561)	17.1(116)	100.0(677)

0.1%水準で有意差あり

### (3) もっとも近くに住む別居子

回答者のもっとも近くに住む別居子の続柄としては、「長女」が41.8% (231)、「長男」が36.4% (201) と多く、「長男以外の息子」12.3% (68) そして「長女以外の娘」9.4% (52) と少ない。表6-3-4の家族形態別では、「子との家族らと同居」に注目すると、長男が別居子としてもっとも近くに居住する割合はひじょうに少ない反面で、長女以外の娘は比較的多くなっている。この結果から、長男の家族と同居している高齢者が多いことがわかるであろう。性別と年齢別では、差異はみられない。

表6-3-4 家族形態別×もっとも親しい別居子

% (実数)

	長男	長男以外の息子	長女	長女以外の娘	合計
ひとり暮らし	34.0(16)	4.3(2)	55.3(26)	6.4(3)	100.0(47)
夫婦のみ	40.0(120)	11.0(33)	40.7(122)	8.3(25)	100.0(300)
未婚子や親と同居	41.9(49)	12.0(14)	40.2(47)	6.0(7)	100.0(117)
子との家族らと同居	10.6(7)	22.7(15)	48.5(32)	18.2(12)	100.0(66)
全体	36.2(192)	12.1(64)	42.8(227)	8.9(47)	100.0(530)

0.1%水準で有意差あり

### (4) もっとも近い別居子との距離

こうした別居子との距離では、「車や電車で1時間以内」45.0% (225)、「車や電車で1時間以上」37.0% (210)、「近所(すぐに歩いていける距離)」18.0% (102) と続いている。ここからは、別居子との隣居や近居はあまり多くないことがうかがえる。

性別、年齢別、家族形態別のクロス集計では、明確な有意差が明らかにならなかったので作表はしていないが、「ひとり暮らし」では「近所」(30.6%) に住む別居子の割合が比較的多くなっている。また別居子の続柄別に集計してみると、これも有意差はみられないが、「長女以外の娘」では「近所」(30.6%) に住んでいる割合が目立つ。

### (5) きょうだい

高齢期においてきょうだいが相互の重要なサポート機能をはたすことは、しばしば指摘される場所である(安達、1999)。今後も、少子化と高齢化の進展のなかで、ますます高齢期のきょうだい関係は注目されていくと思われる。

存命中のきょうだいの有無に対する回答では、「いない」という回答が86.1% (563) と大多数をしめており、「いる」の割合は13.9% (91) にすぎず、意外に少ないという結果である。性別では表6-3-5のように、存命のきょうだいのいる割合が女性に比べて男性では多くみられる。年齢別では表6-3-6のように、高齢になるほど存命中のきょうだいが減少の傾向にある。

表6-3-5 性別×きょうだいの有無 % (実数)

	きょうだいあり	きょうだいなし	合計
男性	17.1(71)	82.9(343)	100.0(414)
女性	8.3(20)	91.7(220)	100.0(240)
全体	13.9(91)	86.1(563)	100.0(654)

1%水準で有意差あり

表6-3-6 年齢別×きょうだいの有無 % (実数)

	きょうだいあり	きょうだいなし	合計
64歳以下	7.0(9)	93.0(120)	100.0(129)
65～69歳	11.5(29)	88.5(224)	100.0(253)
70～74歳	15.9(27)	84.1(143)	100.0(170)
75歳以上	35.4(23)	64.6(42)	100.0(65)
全体	14.3(88)	85.7(529)	100.0(617)

5%水準で有意差あり

男きょうだいの数は、1人47.2% (230)、2人30.4% (148)、3人16.8% (82)、4人4.3% (21)、5人1.2% (6)と続いており、平均1.82人である。性別では、男性のほうが女性に比べて、男きょうだいの数が多くなっている。年齢別や家族形態別の有意差は、みられない。いっぽう女きょうだいの数は、1人43.2% (235)、2人27.0% (147)、3人16.9% (92)、4人7.5% (41)、5人3.5% (19)、6人1.3% (7)、7人0.4% (2)、8人0.2% (1)、平均2.07人というように男きょうだいに比べて若干、多くなっている。性別、年齢別、家族形態別のいずれでも、有意差はみられない。

もっとも親しいきょうだいの続柄としては、全体的には「実妹」29.1%(177)、「実姉」21.2% (129)、「実弟」20.6% (125)、「実兄」14.1% (86)、「義理のきょうだい」9.9% (60)、そして「親しいきょうだいはない」5.1% (31)の順である。性別では、表6-3-7をみると、男性高齢者は「実兄」や「実弟」、女性高齢者は「実姉」や「実妹」、とそれぞれに比較的親しい傾向がうかがえる。また、女性より男性のほうが「義理のきょうだい」の割合が高い反面で、「親しいきょうだいなし」の割合も高いという結果となっている。

表6-3-7 性別×もっとも親しいきょうだい % (実数)

	実兄	実姉	実弟	実妹	義理	親しい者なし	合計
男性	17.3(63)	18.1(66)	22.0(80)	22.8(83)	13.2(48)	6.6(24)	100.0(346)
女性	9.4(23)	25.8(63)	18.4(45)	38.5(94)	4.9(12)	2.9(7)	100.0(244)
全体	14.9(86)	21.2(129)	20.6(125)	29.1(177)	9.9(60)	5.1(31)	100.0(608)

0.1%水準で有意差あり

## 第7章 家族・親族との交流状況

### 1. 夫婦・同居子

#### (1) 夫婦の過ごし方

高齢夫婦の研究は、近年になって高齢者にとっての重要性が注目されだし、盛んにおこなわれるようになってきている(折茂肇編, 1999)。有配偶者に対して、高齢期における夫婦の過ごし方についてたずねた。全体的な結果としては、「できるだけ夫婦いっしょの時間を過ごすようにしている(夫婦一緒)」が10.2%(58)と意外に少なく、「お互いの行動を尊重して、自由に過ごすようにしている(夫婦自由)」が35.9%(203)であり、「お互いの自由な行動を尊重するが、夫婦いっしょに過ごす時間ももつようにしている(夫婦一緒・自由)」が51.9%(294)ともっとも多くなっている。つまり高齢期の夫婦の過ごし方として、夫婦間の分離と共同のバランスの調整が重要視されていると言える。つぎに、性別、年齢別、家族形態別によるクロス集計の結果を示したい。なお、「わからない」が0.4%(2)、「その他」が1.6%(9)であるが、集計の際には除外している。

表7-1-1のように、性別では、女性(6.5%)に比べて男性(11.6%)で「夫婦一緒」が、逆に男性(50.2%)に比べて女性(61.9%)のほうで「夫婦一緒・自由」が、それぞれ多くなっている。年齢別ならびに家族形態別では、差異はみられない。

	性別×夫婦の過ごし方			% (実数)
	夫婦一緒	夫婦自由	夫婦一緒・自由	合計
男性	11.6(48)	38.2(158)	50.2(208)	100.0(414)
女性	6.5(9)	31.7(44)	61.9(86)	100.0(139)
全体	10.3(57)	36.5(202)	53.2(294)	100.0(553)

5%水準で有意差あり

#### (2) 同居子やその家族との会話

同居している子やその家族とどのような会話をしているのかをたずねた結果では、全体的には「重要なことがあったばあい」39.0%(90)ならびに「毎日の出来事を何でも」37.2%(86)が目立っており、つぎに「休日などに話しをする程度」18.6%(43)があげられている。「朝夕のあいさつ程度」3.0%(7)と「顔をあわせることもほとんどない」2.2%(5)は少なく、クロス集計の際には2つとも除外している。

表7-1-2の性別では、男性では「重要なこと(があったばあい)」が、女性では「毎日の出来事(を何でも)」が、それぞれに対称的に割合が多くなっている。つまり、女性は日常的に子家族と会話しているのに対して、男性は非日常的で何か重要な出来事があったときだけ会話していると言えるのである。年齢別には、差異は示されていない。

表7-1-2 性別×同居子やその家族との会話 % (実数)

	毎日の出来事	休日などで話し	重要なこと	合計
男性	24.0(29)	21.5(26)	54.5(66)	100.0(121)
女性	58.8(57)	16.5(16)	24.7(24)	100.0(97)
全体	39.4(86)	19.3(42)	41.3(90)	100.0(218)

0.1%水準で有意差あり

## 2. 別居の子・孫・きょうだい・親

以下では、家族・親族関係として息子と娘、孫、男女のきょうだい、自分と配偶者の親を取りあげて、調査結果を示したい。また、同性と異性の友人・知人との交流もみていきたい。

### (1) 別居の息子・娘と会う頻度

別居している息子をもつ回答者において、その息子と会う頻度を全体的にみると、盆や正月などの休みに会う「年に数回」47.8% (192) がもっとも多く、ついで「月に1、2回」33.8% (136) が続いている。その他は少数で、「週に1回」10.2% (41)、「ほとんど会わない」6.0% (24)、「ほぼ毎日」1.7% (7)、「まったく会わない」0.5% (2) である。このように別居子をもつ回答者の半数以上が、あまり頻繁な交流をしていないという結果であると言える。

性別、年齢別、家族形態別において、明確な有意差は示されていない。ただし、家族形態別で「ほとんど毎日」と「週1回」を合計した割合は、「未婚子や親と同居」(6.5%)や「子の家族らと同居」(7.7%)に比べて、「ひとり暮らし」(20.6%)と「夫婦のみ」(11.7%)は高い値となっている。やはり同居子がいないだけに、別居子との交流が比較的盛んになっていると思われるのである。

また別居の娘と会う頻度としては、息子のばあいと同じく、「年に数回」39.2% (154)と「月に1、2回」36.4% (143)が高率であり、「週に1回」16.0% (63)が続き、「ほぼ毎日」5.6% (22)と「ほとんど会わない」2.8% (11)は少ない。

性別、年齢別、家族形態別においては、これも息子のばあいと同じく、明確な有意差はみられない。家族形態別で「ほとんど毎日」と「週1回」を合計した割合をみると、「ひとり暮らし」(37.1%)と「夫婦のみ」(21.3%)に比べて、「子の家族らと同居」(22.4%)も息子ほど大差がない。同居子の有無によって、別居の娘との交流はあまり影響を受けないと言える。

### (2) 別居の孫と会う頻度

別居している孫をもつ回答者に対して、その交流頻度をたずねた結果では、「年に数回」43.5% (165)が多く、つぎに「月に1、2回」33.0% (125)が続き、「週に1回」6.1% (23)と「ほとんど会わない」5.8% (22)は低率である。子との交流に準拠する結果となっている。

ここでも、性別、年齢別、家族形態別において、明確な有意差はない。家族形態別で、「ほぼ毎日」と「週に1回」の合計の割合は、「未婚子や親と同居」(8.8%)や「子の家族らと同居」(1

5.4%)に比べて、「ひとり暮らし」(28.1%)と「夫婦のみ」(19.5%)では増加している。

### (3)きょうだいと会う頻度

男きょうだいと会う頻度では、「年に数回」53.1% (212)が過半数を越えており、つぎに「ほとんど会わない」33.0% (131)が続き、以下は「月に1, 2回」8.6% (34)、「まったく会わない」3.0% (12)、「週に1回」1.3% (5)、「ほぼ毎日」0.8% (3)の順である。きょうだいとの関係は、別居している子や孫のばあいより、疎遠となっているという結果である。

明確な有意差はないが、性別では男性に比べて女性で、年齢別では「64歳以下」に比べて「75歳以上」で、家族形態別では同居子のあるばあい比べて同居子のないばあいのほうで、交流頻度が高い傾向が多少みられる。

女きょうだいと会う頻度では、「年に数回」51.3% (232)が半数をしめており、「ほとんど会わない」29.2% (132)、「月に1, 2回」11.9% (54)、「週に1回」4.0% (18)、「まったく会わない」2.2% (10)、「ほぼ毎日」1.3% (6)となっている。さきの男きょうだいの結果と同様に、頻繁な交流とは言えない。

いっぽうクロス集計の結果では、性別と家族形態別で有意差が明確に示されている。表7-2-1をみると、男性に比べて女性では「ほぼ毎日・週1回」と「月に1, 2回」が、逆に女性に比べて男性では「ほとんど会わない・まったく会わない」が、それぞれに多くなっている。女性どうしのきょうだいの交流が比較的盛んなことをうかがわせる。表7-2-2の家族形態別においては、「ひとり暮らし」では、「ほとんど会わない・まったく会わない」の割合は比較的少なく、女きょうだいとの交流が保たれている。この結果の背景には、表6-1-2にみられるように、ひとりで暮らす高齢者のなかで女性のしめる割合の大きさがあげられるであろう。

表7-2-1 性別×女きょうだいと会う頻度 %(実数)

	ほぼ毎日 週に1回	月に1, 2回	年に数回	ほとんど会わない まったく会わない	合計
男性	1.1(3)	5.5(15)	51.6(141)	41.8(114)	100.0(273)
女性	11.8(21)	21.8(39)	50.8(91)	15.1(28)	100.0(179)
全体	5.3(24)	11.9(54)	51.3(232)	29.2(132)	100.0(452)

0.1%水準で有意差あり

表7-2-2 家族形態別×女きょうだいと会う頻度 %(実数)

	ほぼ毎日 週に1回	月に1, 2回	年に数回	ほとんど会わない まったく会わない	合計
ひとり暮らし	12.8(6)	17.0(8)	53.2(25)	17.0(8)	100.0(47)
夫婦のみ	2.2(5)	6.3(14)	54.3(121)	37.2(83)	100.0(223)
未婚子や親と同居	4.4(5)	18.3(21)	53.0(61)	24.4(28)	100.0(115)
子の家族らと同居	11.3(6)	15.1(8)	41.5(22)	32.1(17)	100.0(53)
全体	5.0(22)	11.6(51)	52.3(229)	31.1(136)	100.0(438)

0.1%水準で有意差あり

#### (4)別居している親

少数の回答者に対してであるが、存命の親との交流についてもたずねている。別居している自分自身の親との交流頻度では、「年に数回」50.7%(36)が半数をしめており、「月に1, 2回」21.1%(15)、「ほぼ毎日」11.3%(8)、「ほとんど会わない」9.9%(7)、「週に1回」7.0%(5)と続いている。年齢別と家族形態別には有意差はないが、表7-2-3のように性別では差異があり、女性より男性のほうで、自分の親との交流頻度が高くなっている。

他方で配偶者の親との交流頻度については、「年に数回」48.4%(60)が半数近くとなっており、「ほとんど会わない」37.9%(47)が続いている。「月に1, 2回」8.9%(11)、「週に1回」2.4%(3)、「ほぼ毎日」1.6%(2)、「まったく会わない」0.9%(1)は、いずれも少ない割合である。こうした結果からみるならば、実親に比べて配偶者の親との交流はあまり盛んとは言えない結果である。なお、性別、年齢別、家族形態別の有意差は示されていない。自分ならびに配偶者の親では、別居子のばあいと比較して交流頻度が高くなっており、この背景には介護などがあると推察される。

表7-2-3 性別×自分自身の親との交流頻度 %(実数)

	ほぼ毎日 週に1回	月に1, 2回	年に数回	ほとんど会わない まったく会わない	合計
男性	22.6(7)	25.8(8)	41.9(13)	9.7(3)	100.0(31)
女性	15.0(6)	17.5(7)	57.5(23)	10.0(4)	100.0(40)
全体	11.3(8)	21.1(15)	50.7(36)	9.9(7)	100.0(71)

0.1%水準で有意差あり

#### (5)家族・親族からみた友人・知人に会う頻度

友人・知人との交流頻度について、これまで述べてきた息子、娘、孫、男きょうだい、女きょうだい、自分の親、配偶者の親といった家族・親族との交流頻度の調査結果をみていきたい。

同性の友人・知人と会う頻度の全体的な結果では、「月に1, 2回」35.3%(200)がもっとも多く、「年に数回」27.9%(158)、「週に1回」25.7%(146)、「ほとんど会わない」6.0%(34)、「ほぼ毎日」4.9%(28)、「まったく会わない」0.2%(1)となっている。また、異性のばあいでは、「年に数回」28.4%(92)、「月に1, 2回」25.6%(83)、「ほとんど会わない」20.4%(66)、「週に1回」20.1%(65)、「まったく会わない」3.1%(10)、「ほぼ毎日」2.5%(8)となっており、同性に比べて頻度が低くなっている。

家族・親族との交流頻度別で有意差があらわれたものは、孫と会う頻度を同性の友人・知人と会う頻度とクロス集計をした結果だけである。表7-2-4をみると、別居の孫と会う頻度が高いばあいほど、同性の友人・知人と会う頻度が高くなる傾向にある。高齢者にとっての孫の意味は、友人との関連において興味深いものがあり、重要な研究課題となろう。



表7-2-4 別居の孫と会う頻度×同性の友人・知人と会う頻度

%(実数)

(孫)	(同性の友人・知人)			ほとんど会わない まったく会わない	合 計
	ほぼ毎日 週に1回	月に1、2回	年に数回		
ほぼ毎日・週に1回	39.0(23)	42.4(25)	13.6(8)	1.7(1)	100.0(59)
月に1、2回	31.9(38)	23.5(28)	35.3(42)	9.2(11)	100.0(119)
年に数回	27.5(41)	33.6(50)	30.9(46)	6.0(9)	100.0(149)
ほとんど・まったく	4.8(1)	38.1(8)	23.8(5)	19.0(4)	100.0(21)
全 体	29.6(103)	31.9(111)	29.0(101)	7.2(25)	100.0(348)

0.1%水準で有意差あり

### 3. 家族・親族との交流に対する満足度

#### (1) 性別・年齢別・家族形態別の満足度

家族・親族関係への満足度では、「まあ満足」60.0% (426) が大多数をしめており、「満足」20.1 (143)、「どちらでもない」15.6% (111) と続いており、「やや不満」3.7% (26) と「不満」0.6% (4) は少ない。性別では、表7-3-1のように男性に比べて女性のほうで満足度が高くなっており、表7-3-2の年齢別では、とくに「75歳以上」で満足度が比較的高い傾向にある。家族形態別では、差異は示されていない。

表7-3-1 性別×家族・親族関係への満足度

%(実数)

	満足	まあ満足	どちらでもない	やや不満・不満	合 計
男 性	17.5(76)	60.2(262)	18.6(81)	3.7(16)	100.0(435)
女 性	24.5(67)	59.7(163)	10.6(29)	5.1(14)	100.0(273)
全 体	20.2(143)	60.0(425)	15.5(110)	4.3(30)	100.0(708)

5%水準で有意差あり

表7-3-2 年齢別×家族・親族関係への満足度

%(実数)

	満 足	まあ満足	どちらでもない	やや不満・不満	合 計
64歳以下	18.4(27)	61.9(91)	13.6(20)	6.2(9)	100.0(147)
65～69歳	18.1(49)	59.0(160)	18.8(51)	4.1(11)	100.0(271)
70～74歳	18.8(33)	65.9(116)	13.6(24)	1.7(3)	100.0(176)
75歳以上	38.0(27)	52.1(37)	7.0(5)	2.8(2)	100.0(71)
全 体	20.5(136)	60.8(404)	15.0(100)	3.8(22)	100.0(665)

1%水準で有意差あり

#### (2) 交流頻度と満足度との関連

家族・親族・友人との交流頻度別による満足度を調べたところ、息子、孫、男きょうだい、女きょうだい、配偶者の親、同性の友人・知人では、頻繁に会うほど満足度が高くなる傾向にある。結果は、すべてを示すと煩雑になるため、とくに顕著な傾向のみられた息子と孫について表7-3-3と表7-3-4に表示する。娘、自分の親、異性の友人・知人では、明確な有意差はない。

表7-3-3 別居の息子と会う頻度×家族・親族関係への満足度 % (実数)

	満 足	まあ満足	どちらでもない	やや不満・不満	合 計
ほぼ毎日・週に1回	39.6(19)	50.0(24)	6.3(3)	4.2(2)	100.0(48)
月に1、2回	21.4(28)	61.8(81)	14.5(19)	2.3(3)	100.0(131)
年に数回	18.6(35)	59.6(112)	17.0(32)	4.8(9)	100.0(188)
ほとんど・まったく	11.5(3)	61.5(16)	11.5(3)	15.4(4)	100.0(26)
全 体	21.6(85)	59.3(233)	14.5(57)	4.1(16)	100.0(393)

5%水準で有意差あり

表7-3-4 別居の孫と会う頻度×家族・親族関係への満足度 % (実数)

	満 足	まあ満足	どちらでもない	やや不満・不満	合 計
ほぼ毎日・週に1回	30.8(20)	56.9(37)	7.7(5)	4.6(3)	100.0(65)
月に1、2回	18.0(22)	64.8(79)	13.9(17)	3.3(4)	100.0(122)
年に数回	19.5(32)	63.4(104)	15.2(25)	1.8(3)	100.0(164)
ほとんど・まったく	9.1(2)	40.9(9)	36.4(8)	13.6(3)	100.0(22)
全 体	20.4(76)	61.4(229)	14.5(55)	3.4(13)	100.0(373)

1%水準で有意差あり

### (3)他の満足度との関連

友人関係、近隣関係、自分の生き方、現在の生活程度が家族・親族関係への満足度に与える影響を調べた結果では、これらすべてに有意差が示されている。つまり、それぞれの満足度が高くなるほど、家族・親族関係への満足度が高くなる傾向になっているのである。そのうちで、友人関係についてを表7-3-5に、自分の生き方についてを表7-3-6にあらわしている。「満足」と「やや不満・不満」に注目するならば、さきの傾向がよくわかる。

表7-3-5 友人関係についての満足度×家族・親族関係への満足度 % (実数)

	満 足	まあ満足	どちらでもない	やや不満・不満	合 計
満 足	55.7(68)	39.3(48)	1.6(2)	3.2(4)	100.0(122)
まあ満足	15.0(64)	70.3(301)	11.2(48)	3.5(15)	100.0(428)
どちらでもない	5.3(7)	50.4(67)	41.4(55)	3.0(4)	100.0(133)
やや不満・不満	6.3(1)	18.8(3)	31.2(5)	43.7(7)	100.0(16)
全 体	20.0(140)	59.9(419)	15.7(110)	4.3(30)	100.0(699)

0.1%水準で有意差あり

表7-3-6 自分の生き方への満足度×家族・親族関係への満足度 % (実数)

	満 足	まあ満足	どちらでもない	やや不満・不満	合 計
満 足	45.4(64)	49.6(70)	3.5(5)	1.4(2)	100.0(141)
まあ満足	14.8(67)	66.3(301)	15.0(68)	3.9(18)	100.0(454)
どちらでもない	10.1(8)	48.1(38)	36.7(29)	5.1(4)	100.0(79)
やや不満・不満	—	50.0(15)	30.0(9)	20.0(6)	100.0(30)
全 体	19.7(139)	60.2(424)	15.8(111)	4.3(30)	100.0(704)

0.1%水準で有意差あり

## 第8章 イエ意識と介護意識

### 1. イエ意識

高齢者のイエ意識の強弱を探るために、「長男には特別な役割がある」、「男の子がいなければあいは養子をとるべき」、「先祖代々の家や墓は子どもにつがせるべき」、「子どもはどんなことをしても親を扶養すべき」の4側面について、「そう思う」、「だいたいそう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の4つの選択肢でたずねた結果を以下でみていきたい。

#### (1) 長男の役割について

跡取りや介護などといった長男の特別な役割をどのように認識しているかどうかは、家父長的な考え方を中心にするイエ意識を知るうえで重要であると考えられる。全体的な傾向としては、「あまりそう思わない」32.7% (211) と「だいたいそう思わない」32.5% (210) とは、ほぼ同率であり、「そう思わない」19.2% (124) と「そう思う」15.6% (101) とは小差で続いている。

表8-1-1のように年齢別でみると、高齢になるにつれて長男の特別な役割に対する意識がうすくなっている。とくに「64歳以下」では「あまりそう思わない」が目立って多くなっている。イエ意識は、弱体化しており、高齢者世代内においても差異を年齢別にもっていると言えるのである。性別、家族形態別には、有意差はみられない。

表8-1-1 年齢別×長男には特別な役割がある % (実数)

	そう思う	だいたい そう思う	あまり そう思わない	そう思わない	合 計
64歳以下	12.4(17)	21.2(29)	46.7(64)	19.7(27)	100.0(137)
65~69歳	11.7(30)	38.7(99)	32.8(84)	16.8(43)	100.0(256)
70~74歳	21.0(34)	32.1(52)	24.7(40)	22.2(36)	100.0(162)
75歳以上	26.8(15)	30.4(17)	25.0(14)	17.9(10)	100.0(56)
全 体	15.7(96)	32.2(197)	33.1(202)	19.0(116)	100.0(611)

0.1%水準で有意差あり

#### (2) 養子について

跡継ぎを男性とするという意識は、現在でも根強いものがあるので、男の子がいないうちに養子を取るかどうかについてもたずねている。単純集計では、「そう思わない」58.5% (349) が多く、つぎに「あまりそう思わない」30.7% (183) が続いており、「だいたいそう思う」7.4% (44) と「そう思う」3.4% (20) は、少数である。全体的に、養子を取ってまでイエの跡継ぎにするという意識は、あまりみられないと言えよう。

年齢別と家族形態別では、有意差はみられない。性別の表8-1-2をみると、「そう思わない」では男性に比べて女性に大きな割合が比較的示されている。この結果によれば、男性のほうに跡継ぎ意識が強いのではないかと推察できる。

表 8-1-2 性別×男の子がいないばあいは養子をとるべき % (実数)

	そう思う	だいたい そう思う	あまり そう思わない	そう思わない	合 計
男 性	4.4(17)	8.1(31)	33.0(127)	54.5(210)	100.0(385)
女 性	1.4(3)	6.2(13)	26.7(56)	65.7(138)	100.0(210)
全 体	3.4(20)	7.4(44)	30.8(183)	58.5(348)	100.0(595)

5%水準で有意差あり

### (3)先祖代々の家や墓について

また家屋や墓の相続に対する認識も、イエ意識をはかる重要な判断基準になると思われる。「先祖代々の家や墓は子どもにつがせるべき」に対する回答では、「だいたいそう思う」39.3% (256)、「あまりそう思わない」25.2% (164)、「そう思う」23.0% (150)の順となっており、「そう思わない」12.4% (81)は比較的少数である。それぞれの割合からみて、家屋や墓の相続を重要視する考え方は依然として強いという結果である。

性別、家族形態別には有意差はあらわれていないが、年齢別の表8-1-3をみると「64歳以下」では「そう思う」16.7% (23)がもっとも少ない割合であり、いっぽう「75歳以上」では逆に「そう思う」39.0% (23)がもっとも大きな割合となっている。高齢になるほど、先祖代々の家や墓を子どもに相続させるべきであるという意識が強くなる傾向にあると考えられる。

表 8-1-3 年齢別×先祖代々の家や墓は子どもにつがせるべき % (実数)

	そう思う	だいたい そう思う	あまり そう思わない	そう思わない	合 計
64歳以下	16.7(23)	34.8(48)	27.5(38)	21.0(29)	100.0(138)
65～69歳	19.2(49)	43.5(111)	26.7(68)	10.6(27)	100.0(255)
70～74歳	26.5(43)	42.6(69)	22.8(37)	8.0(13)	100.0(162)
75歳以上	39.0(23)	23.7(14)	23.7(14)	13.6(8)	100.0(59)
全 体	22.5(138)	39.4(242)	23.6(157)	12.5(77)	100.0(614)

0.1%水準で有意差あり

### (4)子による親の扶養について

最後に、高齢の親の扶養が子どもの義務であるかどうかについてたずねている。「あまりそう思わない」44.4% (291)が多く、「だいたいそう思う」29.9% (196)、「そう思わない」18.5% (121)と続いている。「そう思う」7.2% (47)は、少ない。ここからは、子や家族に頼らずに生活していきたいという高齢者の自立的な意識が少なからずうかがえる。なお、性別、年齢別、家族形態別による有意差は示されていない。

## 2. 介護に対する意識

国による2000年4月からの介護保険制度の実施をひかえて、介護に対する人びとの意識を探る

ことは、重要な調査項目のひとつになると言える。本調査では、「親を介護した経験」、「介護が家族に必要となったときの対処」、「自分に介護が必要になったときの対処」、「介護に要する費用負担」についてたずねている。

### (1)親を介護した経験

これまでもおもな介護者として親の介護を経験したことがあるかどうかをたずねたところ、介護経験者は、回答者の21.1% (155) と少ない。その内訳としては、「自分の母親」45.8% (71)、「自分の父親」27.7% (43)、「配偶者の母親」16.1% (25)、「配偶者の父親」10.3% (16) というのが全体的な結果であり、実親と義理の親を含めてみると男親より女親を介護した割合が大きい。年齢別と家族形態別では有意差はなく、性別では示されている。表8-2-1によれば、男女どちらでも「自分の母親」の割合が多くなっているが、男性では「自分の父親」が、女性では「配偶者の父親」や「配偶者の母親」が、それぞれに目立っているのである。これは、嫁という役割から夫の親を介護した妻が多いことをあらわしたものと考えられる。

表8-2-1 性別×親を介護した経験の有無 (おもな介護者として) % (実数)

	自分の父親	自分の母親	配偶者の父親	配偶者の母親	合計
男性	43.1(25)	51.7(30)	1.7(1)	3.4(2)	100.0(58)
女性	18.6(18)	42.3(41)	15.5(15)	23.7(23)	100.0(97)
全体	27.7(43)	45.8(71)	10.3(16)	16.1(25)	100.0(155)

0.1%水準で有意差あり

### (2)介護への対処

家族のだれかに介護が必要となったときにどうするかをたずねた結果では、「在宅で家族中心に福祉サービス (利用)」が50.7% (332) と過半数をしめており、つぎに「在宅で福祉サービス (利用)」21.8% (143)、「公的施設に入所 (させる)」14.2% (93)、「民間施設に入所 (させる)」7.2% (47) と続いている。「在宅で家族だけ (で介護)」は、6.1% (40) ともっとも少ない割合である。

性別、年齢別、家族形態別では有意差はないが、イエ意識でたずねた子による親の扶養に対する意識とのクロス集計では、表8-2-2のように明確な差異が示されている。すなわち、子による親の扶養を「そう思う」と回答した人では、やはり「在宅で家族だけ (で介護)」と答えた割合は比較的多くなっている。これは、イエ意識が介護への対処に影響を与えることをあらわしていると考えられるであろう。

また、回答者自身に介護が必要となったときにどうするかについてもたずねた。「在宅で家族中心に福祉サービス (利用)」37.1% (250) と「在宅で福祉サービス (利用)」21.0% (141) が多い反面で、「公的施設に入所 (する)」24.8% (167) と「民間施設に入所 (する)」12.3% (83) も相当みられるという結果である。家族の介護のばあいと比べると、公的施設や民間施設への

入所の割合が大きくなっている。ここでも、「在宅で家族だけ（で介護）」4.8%（32）は、少数派である。

表8-2-2 子どもは高齢の親の扶養をすべき×家族への介護の対処 %（実数）

	（家族への介護の対処）					合 計
	在宅で 家族だけ	在宅で家族中心 に福祉サービス	在宅で福祉 サービス	公的施設 に入所	民間施設 に入所	
（親に対する扶養）						
そう思う	20.9(9)	41.9(18)	14.0(6)	14.0(6)	9.3(4)	100.0(43)
だいたいそう思う	6.1(11)	58.0(105)	19.3(35)	11.0(20)	5.5(10)	100.0(181)
あまりそう思わない	4.6(12)	52.9(139)	24.0(63)	12.5(33)	6.1(16)	100.0(263)
そう思わない	3.7(4)	40.7(44)	28.7(31)	17.6(19)	9.3(10)	100.0(108)
全 体	6.1(36)	51.4(306)	22.7(31)	13.1(78)	6.7(40)	100.0(595)

1%水準で有意差あり

性別、年齢別、家族形態別だけでなく、さきに述べた家族への介護の対処別においても、有意差が示されている。表8-2-3（性別）では、男性に比べて女性のほうで福祉サービスの利用や施設への入所を希望する傾向にある。これは、女性に家庭での介護役割が担われている現状と関連しているものと思われる。表8-2-4（年齢別）では、とくに「75歳以上」で家族介護を望む割合が比較的多く、施設への入所の割合が少ない。表8-2-5（家族形態別）では、ひとり暮らしで福祉サービスの利用や施設入所は目立っている。表8-2-6（親に対する扶養）では、家族への介護の対処と自分の介護の対処で一致している割合がよくあらわれている。とりわけ公的施設への入所については、9割以上が一致しているという結果である。

表8-2-3 性別×自分の介護の対処 %（実数）

	在宅で 家族だけ	在宅で家族中心 に福祉サービス	在宅で福祉 サービス	公的施設 に入所	民間施設 に入所	合 計
男 性	6.1(26)	42.2(179)	18.9(80)	23.1(98)	9.7(41)	100.0(424)
女 性	2.4(6)	28.5(71)	24.5(61)	27.7(69)	16.9(42)	100.0(249)
全 体	4.8(32)	37.1(250)	21.0(141)	24.8(167)	12.3(83)	100.0(673)

0.1%水準で有意差あり

表8-2-4 年齢別×自分の介護の対処 %（実数）

	在宅で 家族だけ	在宅で家族中心 に福祉サービス	在宅で福祉 サービス	公的施設 に入所	民間施設 に入所	合 計
64歳以下	0.8(1)	32.8(43)	27.5(38)	25.2(33)	13.7(18)	100.0(131)
65～69歳	4.6(12)	32.3(85)	25.9(68)	26.6(70)	10.6(28)	100.0(263)
70～74歳	6.4(11)	39.0(67)	22.8(37)	24.4(42)	14.0(24)	100.0(172)
75歳以上	10.1(7)	36.2(25)	23.7(14)	15.9(11)	7.2(5)	100.0(69)
全 体	4.9(31)	37.8(240)	23.6(157)	24.6(156)	11.8(75)	100.0(635)

5%水準で有意差あり

表 8-2-5 家族形態別×自分の介護の対処

％（実数）

	在宅で 家族だけ	在宅で家族中心 に福祉サービス	在宅で福祉 サービス	公的施設 に入所	民間施設 に入所	合 計
ひとり暮らし	—	19.7(13)	30.3(20)	34.8(23)	15.2(10)	100.0(66)
夫婦のみ	5.9(20)	41.2(139)	18.6(63)	23.1(78)	11.2(38)	100.0(338)
未婚子や親と同居	2.6(4)	32.0(49)	26.1(40)	27.5(42)	11.8(18)	100.0(153)
子の家族らと同居	8.7(8)	44.0(40)	15.4(14)	20.9(19)	11.0(1)	100.0(91)
全 体	4.9(32)	37.3(241)	21.1(137)	25.0(162)	11.7(76)	100.0(148)

1％水準で有意差あり

表 8-2-6 家族への介護の対処×自分の介護の対処

％（実数）

	（自分の介護）					合 計
	在宅で 家族だけ	在宅で家族中心 に福祉サービス	在宅で福祉 サービス	公的施設 に入所	民間施設 に入所	
（家族への介護） 在宅で家族だけ	66.6(24)	16.7(6)	2.8(1)	5.6(2)	8.3(3)	100.0(36)
在宅で家族中心 に福祉サービス	1.3(4)	67.0(212)	13.0(41)	12.7(40)	6.0(19)	100.0(316)
公的施設に入所	—	11.5(16)	64.0(89)	14.4(20)	10.1(14)	100.0(139)
民間施設に入所	—	1.1(1)	1.1(1)	94.4(84)	3.4(3)	100.0(89)
全 体	—	6.7(3)	—	8.9(4)	84.4(38)	100.0(45)
全 体	4.3(28)	38.2(238)	21.1(132)	24.0(150)	12.4(77)	100.0(625)

0.1％水準で有意差あり

このように家族ならびに自分の介護への対処では、全体的には、在宅で福祉サービスの利用による家庭介護という考え方に近い結果が示されていると言える。しかしながら、自分の介護のばあいにもみられたように、施設への入所希望の割合も、少なくないことも示されている。高齢者に対する介護への対処には、多様なニーズを考慮していく必要のあることが感じられる。

### (3) 介護費用負担についての考え方

介護に要する費用をどのように負担したほうが良いと考えるかについても、回答を求めている。「本人（が負担）」48.9％(344)と「家族（・親族が負担）」44.2％(311)が大多数をしめており、「主として本人（が負担し、足りない部分を税・保険料などで負担）」6.3％(44)と「主として家族（・親族が負担し、足りない部分を税・保険料などで負担）」0.6％(4)は少数にすぎない。「主として税・保険料などにより社会全体で負担」は、皆無である。回答者における経済的な自立意識の強さが、介護費用の負担に対する考え方にあらわれている。

性別、年齢別、家族形態別、さらには子どもによる親への扶養に対する意識別でも、有意差は示されていない。

## 第9章 高齢者施策に対する意識

最後に、行政による高齢者施策についてたずねた結果を述べることにしたい。調査項目としては、高齢者や家族が相談をしたり指導を受けることのできる相談窓口の充実、家事援助や訪問看護の充実、介護付きの住宅の建設、入所施設の充実、ボランティア活動を支援するための情報や場の整備、年金などの社会保障の充実、道路の段差解消などといった高齢者の暮らしやすい町づくり、働くことを希望する高齢者のための就労対策、高齢者が学習したりスポーツやレクリエーションを楽しむ機会の充実である。それぞれについて、「ぜひ必要」、「まあ必要」、「あまり必要でない」、「不必要」の4段階でたずねている。なお、回答者自身の健康状態も影響をおよぼすのではないかと考えて、その結果も参照している。

### 1. 福祉関係の施策への意識

#### (1) 相談窓口の充実

まず高齢者や家族が相談をしたり指導を受ける窓口の充実については、全体的に「ぜひ必要」66.1% (469) が大多数をしめており、ついで「まあ必要」32.7% (232) が続いている。「あまり必要でない」1.1% (8) と「不必要」0.1% (1) は、少数である。回答した高齢者にとって相談や指導の窓口の充実に対するニーズには、かなり強いものがある。

「あまり必要でない」と「不必要」をあわせても回答数が少ないので、クロス集計の結果は参考程度にすぎないが、表9-1-1の性別で見ると、男性に比べて女性のほうが相談の窓口の必要性を感じていると言える。これは、介護が女性の役割となっている現状から、女性に切実感が強いためであろう。健康状態別と家族形態別では、明確な有意差はみられないが、現在の身体が良好であるほど、そして「ひとり暮らし」で、相談の窓口に対する必要意識が高くなっている。年齢別では、差異はほとんど示されていない。

表9-1-1 性別×相談窓口の充実 % (実数)

	ぜひ必要	まあ必要	あまり必要でない・不必要	合計
男性	61.2(267)	37.2(162)	1.6(7)	100.0(436)
女性	73.9(201)	25.4(69)	0.7(2)	100.0(272)
全体	66.1(468)	32.6(231)	1.3(9)	100.0(708)

1%水準で有意差あり

#### (2) 家事援助や訪問看護の充実

今後、在宅福祉の整備が重要となってくることから、家事援助や訪問看護の充実についてもたずねている。全体的には、「ぜひ必要」67.8% (480)、「まあ必要」29.9% (212)、「あまり必要でない」1.7% (12)、「不必要」0.6% (4) という結果のように、やはり必要意識はひじょうに高い



と言える。

表9-1-2の性別においては、さきに述べたとおり現在の家庭介護の担い手がもっぱら女性であることもあり、在宅福祉の充実が男性より女性のほうで求められている。年齢別、家族形態別、健康状態別では、有意差はみられない結果である。

表9-1-2 性別×家事援助や訪問看護の充実 % (実数)

	ぜひ必要	まあ必要	あまり必要でない・不必要	合計
男性	61.9(270)	34.9(152)	3.2(14)	100.0(436)
女性	77.1(208)	22.2(60)	0.7(2)	100.0(270)
全体	67.7(478)	30.0(212)	2.3(16)	100.0(706)

1%水準で有意差あり

### (3)介護付き住宅の建設

高齢者にとって、介護サービスの付いた住宅には安心感があるのではないかと考え、その必要性についてたずねている。全体的な結果としては、「ぜひ必要」50.9% (356) が半数をしめており、「まあ必要」42.5% (297)、「あまり必要でない」6.3% (44)、「不必要」0.3% (2) となっている。依然として家族による介護が望まれていることもあってか、さきの在宅福祉の充実に比べるならば、必要意識が若干、低下している。表9-1-3のように、とくに男性では、そうした傾向が顕著である。これは、おそらく男性では妻や子家族による介護を期待しているためと思われる。家族形態別では表9-1-4のように、介護への不安感が強いと思われる「ひとり暮らし」では他に比べて、やはり「ぜひ必要」が高率である。年齢別と健康状態別では、有意差はみられない。

表9-1-3 性別×介護付き住宅の建設 % (実数)

	ぜひ必要	まあ必要	あまり必要でない・不必要	合計
男性	42.9(185)	48.1(208)	9.0(39)	100.0(432)
女性	64.6(171)	32.8(87)	2.6(7)	100.0(265)
全体	51.1(356)	42.3(295)	6.6(46)	100.0(697)

0.1%水準で有意差あり

表9-1-4 家族形態別×介護付き住宅の建設 % (実数)

	ぜひ必要	まあ必要	あまり必要でない・不必要	合計
ひとり暮らし	65.8(48)	34.2(25)	—	100.0(73)
夫婦のみ	49.0(169)	42.6(147)	8.4(29)	100.0(345)
未婚子や親と同居	54.9(89)	37.0(60)	8.0(13)	100.0(162)
子の家族ら同居	40.4(36)	56.2(50)	3.4(3)	100.0(89)
全体	51.1(342)	42.2(282)	6.7(45)	100.0(669)

1%水準で有意差あり

#### (4)入所施設の充実

現在、入所型の施設介護から家族・親族を中心にする在宅介護へといった行政施策の流れがみられるが、高齢者自身が入所施設の必要性についてどのように考えているのかについてもたずねている。全体的には、「ぜひ必要」72.1%（509）が圧倒的に多く、つぎに「まあ必要」26.5%（187）があげられている。いっぽう「あまり必要」1.4%（10）は少なくなっており、「不必要」は皆無である。

表9-1-5 性別×入所施設の充実 %（実数）

	ぜひ必要	まあ必要	あまり必要でない	合計
男性	66.4(289)	31.7(138)	1.8(8)	100.0(435)
女性	81.4(219)	17.8(48)	0.7(2)	100.0(269)
全体	72.2(508)	26.4(186)	1.4(10)	100.0(704)

0.1%水準で有意差あり

性別による表9-1-5では、男性に比べて女性のほうが施設の充実を望んでいることをあらわしている。年齢別、家族形態別、健康状態別には、有意差がみられない。しかし家族形態別においては「ひとり暮らし」で他に比べて、「ぜひ必要」87.7%が大きな割合となっている。この背景には、家族・親族に介護が期待できないことなどもあると言える。

こうした入所施設に対する結果は、さきに述べた家事援助や訪問看護などといった在宅福祉、ならびに介護付き住宅へのニーズを上回るものである。回答した高齢者には、家族・親族に頼らないで施設入所を希望するような自立的な意識が高いのではないかと思われる。とくに女性では、自分自身の介護についての不安があるために、必要性が高くなっているのであろう。

#### (5)ボランティア活動の支援

高齢者への介護ということだけではなく、現代においてボランティア活動の役割は重要性を増してきている。そこで、ボランティア活動を支援するための情報や場の整備についてもたずねている。全体的には、「まあ必要」55.1%（383）がもっとも多く、「ぜひ必要」38.8%（270）、「あまり必要でない」5.9%（41）、「不必要」0.1%（1）と続いている。あまり日常生活のなかでボランティアの役割が認識されていないためか、これまでの他の調査項目より若干ニーズが低いという結果である。

表9-1-6のように性別では、男性に比べて女性のほうで必要性が高い。年齢別、家族形態別、健康状態別には、有意差は示されていない。

表9-1-6 性別×ボランティア活動の支援 %（実数）

	ぜひ必要	まあ必要	あまり必要でない・不必要	合計
男性	34.3(148)	58.1(251)	7.6(33)	100.0(432)
女性	46.7(122)	50.2(131)	3.1(8)	100.0(261)
全体	39.0(270)	55.1(382)	5.9(41)	100.0(693)

0.1%水準で有意差あり

### (6)年金などの社会保障の充実

財政的な危機感から、さまざまな社会保障が見直されようとしている状況のなかで、年金などの社会保障の必要性もたずねている。全体的には、「ぜひ必要」72.3% (513) が大多数であり、「まあ必要」27.2% (193)、「あまり必要でない」0.9% (4) となっている。回答者の間では、経済的な自立の拠り所である年金などについては、やはり高いニーズが強くみられるのである。

性別の表9-1-7をみると、男性に比べて女性のほうに、年金などの社会保障の必要性が示されている。一般に、夫の死後の生活において経済的な基盤が年金などで賄われている現状があらわれているものと考えられる。年齢別と家族形態別では、有意差はみられない。

表9-1-7 性別×年金などの社会保障の充実 % (実数)

	ぜひ必要	まあ必要	あまり必要でない	合計
男性	68.3(299)	30.8(135)	0.9(4)	100.0(438)
女性	78.5(212)	21.5(58)	—	100.0(270)
全体	72.2(511)	27.3(193)	0.6(4)	100.0(708)

1%水準で有意差あり

### (7)高齢者の暮らしやすい町づくり

町づくりに関しても、道路の段差解消などというようなバリアフリーの推進といった高齢者の暮らしやすいものが求められてきている。調査の結果によると、「ぜひ必要」59.7% (422) が多く、「まあ必要」38.0% (269)、「あまり必要でない」2.3% (16) となっている。「不必要」は、まったく回答なしである。

性別、年齢別、家族形態別、すべてで有意差が示されている。表9-1-8では大きな差異で男性より女性において、表9-1-9では「75歳以上」において、表9-1-10では「ひとり暮らし」において、それぞれ「ぜひ必要」の割合が比較的多く、必要性が強いという結果である。

表9-1-8 性別×高齢者の暮らしやすい町づくり % (実数)

	ぜひ必要	まあ必要	あまり必要でない	合計
男性	50.8(220)	45.5(197)	3.7(16)	100.0(433)
女性	74.3(202)	25.7(70)	—	100.0(272)
全体	59.9(422)	37.9(267)	2.3(16)	100.0(705)

0.1%水準で有意差あり

表9-1-9 家族形態別×高齢者の暮らしやすい町づくり % (実数)

	ぜひ必要	まあ必要	あまり必要でない	合計
64歳以下	58.8(87)	39.2(58)	2.0(3)	100.0(148)
65～69歳	63.2(172)	36.4(99)	0.4(1)	100.0(272)
70～74歳	53.7(95)	41.8(74)	4.5(8)	100.0(177)
75歳以上	66.7(44)	30.3(20)	3.0(2)	100.0(66)
全体	60.0(398)	37.9(251)	2.1(14)	100.0(663)

5%水準で有意差あり

表9-1-10 家族形態別×高齢者の暮らしやすい町づくり

％(実数)

	ぜひ必要	まあ必要	あまり必要でない	合計
ひとり暮らし	80.3(61)	19.7(15)	—	100.0(76)
夫婦のみ	56.2(194)	40.9(141)	2.9(10)	100.0(345)
未婚子や親と同居	57.6(95)	41.2(68)	1.2(2)	100.0(165)
子の家族ら同居	60.0(54)	36.7(33)	1.3(2)	100.0(90)
全体	59.8(404)	38.0(257)	3.3(15)	100.0(676)

1％水準で有意差あり

## 2. その他の行政施策の充実

### (1)健康診断の充実

中高年者にとって健康診断が重要なものとなっていることは、言うまでもない。健康診断の充実についてたずねた結果では、全体的には、「ぜひ必要」58.2％(410)と「まあ必要」37.7％(266)が多くなっており、「あまり必要でない」3.8％(27)と「不必要」0.3％(2)は少数である。すでにホームドクターなどにかかっていることもあって、他の調査項目に比べてとくに強い必要性は感じられないと言える。性別、年齢別、家族形態別、健康状態別には、いずれでも有意差は見受けられない。

### (2)高齢者への就労対策

働くことを希望する高齢者に対する就労対策も、現在の行政施策に求められている。全体的には、「ぜひ必要」48.9％(344)ならびに「まあ必要」44.2％(311)がほぼ同じ程度の割合で高く、「あまり必要でない」6.3％(44)と「不必要」0.6％(4)の割合は低い。しかしながら他の施策に対する回答に比べるならば、必要意識はうすいようである。

性別、年齢別、家族形態別では有意差はみられないが、表9-2-1の健康状態別では、「ぜひ必要」の割合に注目すると、就労の可能性からみても当然ながら、健康な人に比べて病気がちな人のほうが小さい値である。

表9-2-1 家族形態別×高齢者への就労対策

(実数)

	ぜひ必要	まあ必要	あまり必要でない	合計
ひじょうに健康	52.5(64)	43.4(53)	4.1(5)	100.0(122)
どちらかと言えば健康	50.7(246)	42.7(207)	6.6(32)	100.0(485)
どちらかと言えば病気がち・寝込む	27.5(14)	64.7(33)	7.8(4)	100.0(51)
全体	49.2(324)	44.5(293)	6.2(41)	100.0(658)

5％水準で有意差あり

### (3)学習・スポーツ・レクリエーションの充実

神戸市シルバーカレッジの受講生への質問紙調査ということもあり、学習したり、スポーツや

レクリエーションを楽しむ機会の充実についてもたずねている。全体的な結果としては、「ぜひ必要」55.3% (394) と「まあ必要」43.3% (308) が多く、「まあ必要」1.3% (9) と「不必要」0.1% (1) は少ない。福祉関連の行政施策ほどではないが、学習などに対する必要意識は高いと言えるであろう。

表9-2-2の性別では男性より女性のほうで、また表9-2-3の健康状態別では良好であるほど、それぞれに学習・スポーツ・レクリエーションの機会を求めている。年齢別と家族形態別では、有意差は示されていない。

表9-2-2 性別×学習・スポーツ・レクリエーションの充実 % (実数)

	ぜひ必要	まあ必要	あまり必要でない・不必要	合計
男性	51.5(226)	46.7(205)	1.8(8)	100.0(439)
女性	61.6(167)	37.6(102)	0.7(2)	100.0(271)
全体	55.4(393)	43.2(307)	1.4(10)	100.0(710)

5%水準で有意差あり

表9-2-3 家族形態別×学習・スポーツ・レクリエーションの充実 % (実数)

	ぜひ必要	まあ必要	あまり必要でない・不必要	合計
ひじょうに健康	66.9(83)	31.5(39)	1.6(2)	100.0(124)
どちらかと言えば健康	52.6(256)	46.4(226)	1.0(5)	100.0(487)
どちらかと言えば病気がち・寝込む	42.3(22)	53.8(28)	3.8(2)	100.0(52)
全体	54.4(361)	44.2(293)	1.4(9)	100

1%水準で有意差あり

## 第10章 第2部のまとめと研究課題

以下では、第2部の知見をまとめ、そこからみいだされた研究課題も示しておきたい。

### 1 家族・親族関係の実態

全体的に65～69歳という高齢前期の初期の割合が多い。年齢を性別にみるならば、男性では70～74歳が、女性では64歳以下が、それぞれ比較的目立っている。家族形態別には、ひとり暮らしが女性と高齢後期の75歳以上に多くなっている。

夫婦関係については、無配偶者は女性そして高齢の人ほど多い。配偶者のいない理由としては、離・死別が大多数である。同居子は女性に、別居子は男性あるいは夫婦のみの世帯に、それぞれ多くなっている。もっとも親しい別居子では、長女がひとり暮らしならびに子との家族と同居しているばあいに目立つ。もっとも近い別居子との距離では、全体的に車や電車で1時間以内が大きな割合をしめる。きょうだいでは、全体的にきょうだいなしが9割近くとなっており、きょうだいのある割合は、女性より男性に、また高齢になるほど、多い傾向にある。もっとも親しいきょうだいについては、男性では男きょうだいの割合が、女性では女きょうだいの割合が高い。

### 2 家族・親族との交流状況

夫婦の過ごし方では、全体的にお互いに自由に過ごしながらかつ共同の時間をもつようにしている割合が多い。この傾向は、女性のほうで顕著である。同居している子家族との会話では、女性では日常的に会話している割合が、男性では重要なことがあったときに話している割合が、それぞれに過半数みられる。別居の子や孫と会う頻度では、全体的に年に数回という回答が半数近くである。女きょうだいとは、女性のほうで、またひとり暮らしや子家族との同居のばあいに、比較的よく会っている。別居している親と会う頻度では全体的に年に数回が多く、男性のほうが実親との頻度が高い。孫と会う頻度の高い人ほど、友人・知人と会う頻度が高いという結果である。

そうした交流全般への満足度は、女性と75歳以上で高い。家族・親族と頻繁に会う人ほど、友人関係に満足している人ほど、自分の生き方に満足している人ほど、満足度は高率である。

### 3 イエ意識と介護意識

長男に特別な役割があるかどうかでは、高齢になるほど、そのように思う傾向がみられる。男の子がいないばあいに養子をとるかどうかでは、女性より男性で賛同する割合が多い。先祖代々の家や墓を子どもにつがせるべきかどうかでは、高齢になるほど、そうした意識が強くなる。親の扶養を子の義務と考えるかどうかでは、6割以上がそのように思わないと回答している。

親の介護の経験では、女性のほうで義理の親の介護経験が目立つ。自分自身の介護については、在宅で家族中心の介護を望む割合は、子による親の扶養への賛同者ほど、高齢になるほど、家族への介護で在宅介護を望む人ほど、そして男性のほうで多く、ひとり暮らしでは少ない。

#### 4 高齢者施策に対する意識

相談窓口の充実、家事援助や訪問看護の充実、介護付き住宅の建設、ボランティア活動への支援、年金などの社会保障の充実、高齢者の暮らしやすい町づくり、学習・スポーツ・レクリエーションの充実では、いずれでも男性より女性で希望する割合が多くなっている。介護付き住宅の建設、高齢者に暮らしやすい町づくりにおいては、ひとり暮らしの人のニーズが高くなっている。高齢者への就労対策では、健康なばあいほど希望する割合が多い。

#### 5 今後の研究課題

本調査の家族・親族関係に関する結果を述べてきたが、最後に今後の研究課題にも触れておきたい。1つには、本論文では基礎的な分析にとどまった点である。共著者間の調整が困難であったこともあるが、データの集計に関して言えば、基本属性だけでなく、さらに詳細な分析を加えていく必要がある。もう1つには、質問紙調査では、高齢者の家族・親族関係の現状のひとつの断面を採ったことにしかない点である。調査結果の家族・親族関係が高齢者の人生のなかでいかに形成されてきたものなのか、今後はどのように再構築されていく可能性があるのかなどについては、集計結果の数字からでは判断することはできにくい。そのためには、コミュニケーション論的な視点から、ならびにライフコース論的な視点から面接調査を実施することによって、より具体的な結果を得て考察することが不可欠となると思われる。今後、機会があれば試みたい。

#### 【参考文献】

- 安達正嗣 1999 『高齢期家族の社会学』世界思想社。  
総務庁編 1999 『高齢社会白書（平成11年版）』大蔵省印刷局。  
折茂肇編 1999 『新老年学』東京大学出版会。

(安達 正嗣)

## 謝 辞

本アンケート調査を企画・実施するにあたっては、シルバーカレッジの渡辺由和前課長、教務主任の山田初美さん、ならびに前教務主任の山林知左子さんをはじめ、シルバーカレッジ事務局の方々にたいへんお世話になりました。あらためてあつく御礼申し上げます。また、回答していただいたシルバーカレッジ1期生、2期生、3期生のみなさま、ほんとうにありがとうございました。著者の都合のために調査結果をまとめるのがたいへん遅くなってしまいましたが、本調査研究がシルバーカレッジの今後のますますのご発展のために少しでもお役に立てれば、と切に願っています。

(猫田 千里・安達 正嗣)



# 神戸市シルバーカレッジ学生の生活と意識にかんするアンケート

## ご協力のお願い

このアンケート調査は、シルバーカレッジの学生全員の方を対象に、シルバーカレッジでの学習や活動、高齢期の生活一般についておうかがいし、それを今後の運営にいかしていくと同時に、長寿社会にふさわしい福祉施策のあり方を考えていくために企画しました。つきましては、ごめんどろではございますが、ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

アンケートは無記名になっておりますし、すべて統計的に集計し、処理いたしますので、お答えいただいた内容について、みなさまのご迷惑になるようなことは、決してございません。なお、このアンケート調査について、ご不明な点やご質問がございましたら、下記のところまでお問い合わせください。

福祉コミュニティコース・チューター 猫田 千里

シルバーカレッジ事務局 渡辺 由和

山田 初美

電話 078-743-8100

(FAX.078-743-8103)

### 《 記入のしかた》

- ①ご記入は、すべて学生の方、ご本人にお願いいたします。
- ②回答にあたっては、どなたとも相談せず、ご自身のお考えをご記入ねがいます。
- ③回答は、番号を○でかこんだり、( ) に数字や具体的なことを記入してください。
- ④なるべくとばさないように、お答えください。

なお、ご記入いただいたアンケート用紙は、3月14日(金)までに、SC事務局へご提出いただけますよう、お願い申し上げます。

◆はじめに、シルバーカレッジでの学習や活動について、おうかがいします。

問1. シルバーカレッジに入学されたおもなききっかけは、何ですか。以下にあげた中から、3つまで選んで、番号に○をつけてください。

1. 学習内容に興味があるから
2. 健康の維持のため
3. 趣味や教養を深めたいから
4. 仲間や友人にさそわれて
5. さまざまな人と接する機会をもつため
6. 講師が魅力的だから
7. 学習内容を地域活動やボランティア活動に役立てたいから
8. 家族や周囲の人にすすめられて
9. 時間があいていたから
10. なんとなく
11. その他 具体的に ( )

問2. シルバーカレッジでの学習や活動をとおして、現在、どのような感想をお持ちですか。

下の中から、3つまで選んで、番号に○をつけてください。

1. よい友人や仲間ができた
2. 知識や技能が身に付いた
3. 社会を見る眼が広がった
4. 家庭での話題が増えた
5. 健康的な生活をおくれた
6. 新たな人生の目標がみいだせた
7. 生活にリズムが出てきた
8. 考え方や行動が若がえった
9. ボランティアや地域活動のきっかけが得られた
10. 学習の習慣が身についた
11. ひまな時間をつぶせた
12. あまり何も感じなかった
13. 期待したほどではなかった
14. その他 具体的に ( )

問3. シルバーカレッジで、友人ができましたか。また、それは何人くらいですか。

1. 友人ができた → 男性の友人 ( ) 人くらい  
女性友人 ( ) 人くらい
2. 友人はできなかった → 問4へお進みください

付問3-1. 【問3で「友だちができた」と答えた方のみ】シルバーカレッジでの友人とは、どのようなおつきあいをなさっていますか。あてはまる番号に、いくつでも○をつけてください。

1. シルバーカレッジでの講義や活動にいっしょに参加する
2. シルバーカレッジ以外で、グループで会ったり、食事をしたりする
3. シルバーカレッジ以外で、個人的に会ったり、食事をしたりする
4. 電話でときどき話をする
5. 自宅を訪問したり、されたりしたことがある
6. 悩みをうちあけたり、うちあけられたりしたことがある
7. 困ったときに助けてくれたり、助けたりしたことがある
8. その他 ( )

(全員がお答えください)

問4. シルバーカレッジで、クラブ活動やボランティア活動に参加したことがありますか。参加した方は、具体的なクラブ名・グループ名を書いてください。

1. クラブ活動に参加 → (クラブ名: )
2. ボランティア活動に参加 → (グループ名: )
3. どちらにも参加したことはない

問5. シルバーカレッジの以下の点について、あなたはどれくらい満足なさっていますか。

1～5であなたのお気持ちに近い番号に、○をつけてください。

	非常に			あまり	
	よかった	よかった	ふつう	よくなかった	よくなかった
a. 学習内容	1	2	3	4	5
b. 講師の教え方	1	2	3	4	5
c. 仲間との関係	1	2	3	4	5
d. 学園祭などの行事	1	2	3	4	5
e. 施設や備品	1	2	3	4	5
f. 職員の対応	1	2	3	4	5
g. 全体として	1	2	3	4	5

問6. シルバーカレッジの仲間との卒業後の交流について、あなたのご希望に近いものはどれですか。1つだけ選んで○をつけてください。

1. 卒業後も月に数回、個人やグループで会ったり、話をする機会があった  
ほうが良い → 問6-1へお進みください
2. 卒業後は年に数回、同窓会などの機会に会うだけでよい →
3. 卒業後、とくに会いたいと思わない
4. わからない

1以外は  
問7へお進  
みください

付問6-1.【問6で「1」と答えた方のみ】シルバーカレッジの卒業後、仲間といっしょにする  
とすれば、どのような活動が望ましいとお考えですか。

(○はいくつでも)

1. 卒業後、ときどき会ったり食事をしたりして、親睦を深めたい
2. 卒業後、いっしょに趣味や学習・クラブ活動などをおこなっていきたい
3. 卒業後、いっしょに事業をはじめて、収入の得られる仕事をしたい
4. 卒業後、いっしょにボランティアなど、地域や社会に貢献する活動をしたい
5. 卒業後、困ったときに助け合ったり、情報交換ができるような自助グループを  
つくりたい
6. その他 (具体的に )
7. わからない

問7. シルバーカレッジ卒業後の活動の内容について、具体的に考えておられる方は、ぜひくわ  
しくお書きください。

◆つぎに、ふだんの生活について、お聞きします。

(全員がお答えください)

問 8. あなたは現在、つぎのような活動をどのくらいしていますか。あてはまる番号 1～6 から選んで、それぞれ一つだけ○をしてください。

	ほぼ 毎日	週に 1回	月に 1、2回	年に 数回	ほとんど しない	全く しない
a. ひとりでする趣味・学習・スポーツ	1	2	3	4	5	6
b. 地域の仲間や団体でする趣味・学習・ スポーツ	1	2	3	4	5	6
c. 職場の仲間や団体でする趣味・学習・ スポーツ	1	2	3	4	5	6
d. 地域や職場以外の仲間とする趣味・ 学習・スポーツ	1	2	3	4	5	6
e. カルチャーセンターや文化講演会な どへの参加	1	2	3	4	5	6
f. 地域の自治会・町内会や婦人会など での活動	1	2	3	4	5	6
g. 老人会や老人クラブでの活動	1	2	3	4	5	6

問 9. あなたは、次のような社会活動をしたことがありますか。(○はいくつでも)

1. 心身障害者のための福祉活動
2. ホームヘルパーや施設訪問など高齢者のための福祉活動
3. 児童のための福祉活動
4. 募金あつめやバザー、友愛訪問など、福祉全般にかんする活動
5. 地域の防犯活動や防災活動
6. 地域の清掃や緑化など、地域環境のための活動
7. リサイクルや廃品回収など、消費生活にかんする活動
8. 仮設住宅訪問など、震災復興にかんする活動
9. 国際交流にかんする活動
10. その他(具体的に )
11. あてはまるような活動は、したことがない

付問 9-1. 上であげたうち、これまでにしたことはないが、今後してみたいと思う活動があれば、( )にその番号をすべてあげてください。

( )

問10. 問9であげられたような活動に参加したきっかけは、何ですか。(○はいくつでも)

1. 自治会や町内会などの呼びかけで
  2. シルバーカレッジの活動をとおして
  3. シルバーカレッジ以外のボランティアの団体やグループなどに入って
  4. 役所の広報誌などをみて
  5. ボランティア教室や講習会に参加して
  6. 家族や友人、知り合いの人がやっていたので
  7. 社会福祉施設で募集していたので
  8. 政治団体や宗教団体の活動として
  9. 民生・児童委員などを委嘱されているので
10. その他 ( )

問11. 社会奉仕活動やボランティア活動にたいする報酬について、どう思いますか。

(○は一つだけ)

1. 謝礼や報酬は受けるべきではない
2. 交通費などの実費ぐらいはもらってもよい
3. 謝礼の意味で少しぐらいの報酬はもらってもよい
4. わからない

問12. 以下のa～fでは、それぞれ二つの異なる考え方がならべてあります。それぞれあなたのお気持ちに近いほうの番号(1か2)を選んで○をしてください。

- a.
  1. 趣味をもつなら一人よりも、仲間と楽しめるものが多い
  2. 趣味をもつなら、一人でじっくりと楽しめるものが多い
- b.
  1. 自分の気持ちを抑えても、周囲とあわせるほうだ
  2. 他人がなんと言おうと、自分の生き方をつらぬきたいほうだ
- c.
  1. 困ったことが起きたときは、まず誰かに相談するほうだ
  2. 困ったことが起きたときは、人にたよらず、自分で解決したい
- d.
  1. たえず家の外へ出て、動き回っているほうが性に合う
  2. 家で好きなことをして、のんびり過ごしたいと思うことが多い
- e.
  1. 自分の能力が発揮でき、力を試せるようなことに挑戦してみたい
  2. 新しいことに取り組むよりも、これまで通りの生活を続けたい
- f.
  1. 他人の世話をするのが好きで、頼りにされることが多い
  2. リーダーになるよりは、人にしがたっているほうが気楽でいい

◆高齢期の生活一般について、うかがいます。

問13. あなたが最近の生活の中で、とくに重点をおいているのは、どのようなことですか。

(○は3つまで)

1. 財産管理にかんすること
2. 家族の良好な関係をつくること
3. 友人との交流を深めること
4. サークルなど近隣での活動の場をもつこと
5. 趣味や教養を深めること
6. 健康や体力づくりをこころがけること
7. 福祉サービスについての情報をあつめること
8. 増築や改修など、住居にかんすること
9. お墓や仏壇を用意したり、ととのえておくこと
10. その他 ( )

問14. あなたは何歳以降を「老後」とお考えですか。(○は一つだけ)

- |             |             |
|-------------|-------------|
| 1. 55歳ぐらいから | 6. 80歳ぐらいから |
| 2. 60歳ぐらいから | 7. 85歳以上    |
| 3. 65歳ぐらいから | 8. 一概にいけない  |
| 4. 70歳ぐらいから | 9. わからない    |
| 5. 75歳ぐらいから |             |

問15. あなたは、60歳以降、仕事をしたいですか。(○は一つだけ)

1. できるだけ長く仕事をしたい
2. 70歳くらいまで仕事をしたい
3. 65歳まで仕事をしたい
4. 60歳以降は仕事をしたくない
5. その他 ( )
6. わからない

問16. あなたにとって、55歳からいままでの間の体験で、生活に大きな変化をもたらしたと思われるできごとは、次のうちどれですか。(○はいくつでも)

- |                  |                       |
|------------------|-----------------------|
| 1. 自分の定年退職や失業    | 13. きょうだいの死亡          |
| 2. 配偶者の定年退職や失業   | 14. その他の親族の死亡         |
| 3. 子どもの結婚や独立     | 15. 友人の死亡             |
| 4. 孫の誕生          | 16. 転居や建て替え           |
| 5. 自分の病気や身体的衰弱   | 17. 自分の離婚             |
| 6. 配偶者の病気や身体的衰弱  | 18. 自分の再就職            |
| 7. 配偶者の死亡        | 19. 配偶者の死亡            |
| 8. 自分の親の病気や身体的衰弱 | 20. その他 ( )           |
| 9. 自分の親の死亡       | 21. <u>あてはまるものはない</u> |
10. 配偶者の親の病気や身体的衰弱
11. 配偶者の親の死亡
12. 子どもや孫の死亡



問17へお進みください

付問16-1. 上であげたうち、阪神・淡路大震災に関連したできごとがありますか。もしあれば、下の( )にその番号をすべてあげてください。

1. ある → 番号 ( )
2. ない

付問16-2. 問16であげたうち、あなたにとってもっともつらいできごとは何でしたか。  
3つまで選んで、( )にその番号を記入してください。

( ) ( ) ( )

付問16-3. 問16-2であげられたようなつらいできごとがあったとき、あなたの支えになってくれた人は誰ですか。(○はいくつでも)

- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 1. 配偶者           | 8. 友人             |
| 2. 息子(あるいはその配偶者) | 9. 地域や近所の人        |
| 3. 娘(あるいはその配偶者)  | 10. 職場関係の人        |
| 4. 孫             | 11. 専門機関の人(具体的に ) |
| 5. あなたの親         | 12. ボランティアの人      |
| 6. 配偶者の親         | 13. その他 ( )       |
| 7. その他の親族 ( )    | 14. 支えはなかった       |



付問16-4. 逆に、あなたが期待したほど支えになってくれなかった人は、誰ですか。

(○はいくつでも)

- |                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| 1. 配偶者            | 8. 友人              |
| 2. 息子 (あるいはその配偶者) | 9. 地域や近所の人         |
| 3. 娘 (あるいはその配偶者)  | 10. 職場関係の人         |
| 4. 孫              | 11. 専門機関の人 (具体的に ) |
| 5. あなたの親          | 12. ボランティアの人       |
| 6. 配偶者の親          | 13. その他 ( )        |
| 7. その他の親族 ( )     |                    |

◆ご家庭での生活のごようすについて、うかがいます。

問17. あなたには現在、配偶者の方がいらっしゃいますか。

1. いる →
2. いない → 1. 未婚 2. 離別・死別 →
- (どちらかに○をしてください)

付問17-1. 【問17で「いる」と答えた方に】以下の項目について、あなたがたご夫婦の  
場合はどれに近いですか。(一つだけ○)

1. できるだけ夫婦いっしょの時間を過ごすようにしている
2. お互いの行動を尊重して、自由に過ごすようにしている
3. お互いの自由な行動を尊重するが、夫婦いっしょに過ごす時間ももつようにしている
4. わからない
5. その他 ( )

問18. 現在、同居しているお子さん (二世帯住宅に住むお子さんを含みます) は、いらっしゃいますか。

1. いる
2. いない →

問18-1.【「いる」と答えたかたのみ】同居のお子さんやその家族とは、どのくらい会話を交わされますか。下の中から一つだけ選び、○をつけてください。

1. その日のできごとなどを、毎日のようにこと細かく話す
2. 休日などでゆっくりできるときには話をする
3. 普段はあまり話をしないが、重要なことは話をする
4. 朝夕のあいさつ程度で、ほとんど話をしない
5. 顔を合わせることもほとんどない

問19. あなたには別居のお子さんがいらっしゃいますか。

1. いる
2. いない → 問20へお進みください

問19-1.【問19で「いる」と答えた方のみ】別居のお子さんでもっとも近くに住んでいらっしゃる方は、どなたですか。(○は一つだけ)

1. 長男
2. 長男以外の息子
3. 長女
4. 長女以外の娘

問19-2.【問19で「いる」と答えた方のみ】その方のお住まいはどこですか。

(○は一つだけ)

1. 近所（すぐに歩いていけるところ）
2. 車や電車で1時間以内のところ
3. 車や電車で1時間以上のところ

問20. 次の方がたと、現在、どのくらいの頻度で会われますか。a～iのそれぞれについて、一つずつ○をしてください。(複数いる場合は、それぞれもっともよく会う方についてお答えください。)

	ほぼ 毎日	週に 1回	月に 1、2回	年に 数回	ほとんど 会わない	全く 会わない	該当者 なし
a. 別居の息子	1	2	3	4	5	6	7
b. 別居の娘	1	2	3	4	5	6	7
c. 別居の孫	1	2	3	4	5	6	7
d. 同性の友人・知人	1	2	3	4	5	6	7
e. 異性の友人・知人	1	2	3	4	5	6	7
f. 男きょうだい	1	2	3	4	5	6	7
g. 女きょうだい	1	2	3	4	5	6	7
h. 別居している自分の親	1	2	3	4	5	6	7
i. 別居している配偶者の親	1	2	3	4	5	6	7

問21. 次のような意見について、あなたはどのように思いますか。aからdそれぞれお気持ちに近いほうの番号に、一つだけ○をつけてください。

	そう 思う	だいたい そう思う	あまり そう思わない	そう 思わない
a. 長男には、ほかの子どもとは異なる特別な役割がある	1	2	3	4
b. 男の子がいない場合は、養子をとって家をつがせるべきである	1	2	3	4
c. 先祖伝来の家屋敷や墓などは、大切に守って子どもに伝えるべきである	1	2	3	4
d. 親が高齢になった際、子どもはどんなこととしても親を扶養すべきである	1	2	3	4

問22. シルバーカレッジ関係以外で、親しい友人の方はいらっしゃいますか。

1. いる

2. いない → 問23へお進みください

問 2 2 - 1. 【問 2 2 で「いる」と答えた方】何人ぐらいいらっしゃいますか。

( ) 人

問 2 2 - 2. 【問 2 2 で「いる」と答えた方のみ】その方とは、どのようにお知り合いになられましたか。 あてはまるものすべてに○をしてください。

1. 職場や仕事の関係で
2. ご近所
3. 学校時代の友人、幼なじみ
4. 趣味や学習の場で (シルバーカレッジ以外)
5. 参加している団体 (具体的に: )
6. 配偶者を通じて
7. 配偶者以外の家族や親類を通じて
8. その他 (具体的に: )

問 2 3. あなたは現在、近所の人と、どの程度のおつきあいをしていますか。

(○はひとつだけ)

1. あいさつをする程度
2. 時間があれば、立ち話をする程度
3. あずかりものなど、ちょっとした頼みごとをしあう程度
4. 困ったときなど、相談に乗ったり、世話をしあう程度
5. ほとんどつきあいはない

問 2 4. あなたは次のことがらについて、どのくらい満足されていますか。 a ~ e それぞれについて、 1 ~ 5 のうち当てはまる番号に一つずつ○をつけてください。

	まあ		どちら		やや		不満	
	満足	満足	でもない	でもない	不満	不満	不満	
a. 友人との行き来	1	2	3	4	5			
b. 家族や親族との行き来	1	2	3	4	5			
c. 地域の人びととの交流	1	2	3	4	5			
d. 自分の生き方	1	2	3	4	5			
e. 現在の生活程度	1	2	3	4	5			

◆福祉についてのお考えやご要望について、うかがいます

問25. 介護に要する費用負担について、あなたのお考えはどの意見に近いですか。

(○は一つだけ)

1. 本人が負担
2. 家族・親族が負担
3. 主として本人が負担し、足りない部分を税・保険料などで負担
4. 主として家族・親族が負担し、足りない部分を税・保険料などで負担
5. 主として税・保険料などにより社会全体で負担
6. わからない

問26. あなたは高齢者対策として、現在どのようなことが必要だと思いますか。

1～4で、あなたのお考えに近い番号に一つずつ○をしてください。

	ぜひ必要	まあ必要	あまり必要でない	不必要
a. 働くことを希望する高齢者のための就労対策	1	2	3	4
b. 寝たきりや痴呆症のある高齢者などが家庭で暮らせるようにする家事援助や訪問看護の充実	1	2	3	4
c. 高齢者が学習したり、スポーツやレクリエーションを楽しむ機会の充実	1	2	3	4
d. ボランティア活動を支援するための情報や場の整備	1	2	3	4
e. 高齢者が安心して暮らせる介護付き住宅の建設	1	2	3	4
f. 高齢者のための健康診断	1	2	3	4
g. 寝たきりや痴呆性的高齢者など介護を必要とする高齢者のための入所施設の充実	1	2	3	4
h. 道路の段差解消など、高齢者が暮らしやすい町づくり	1	2	3	4
i. 年金などの社会保障の充実	1	2	3	4
j. 高齢者や家族がいろいろ相談したり指導を受けられる窓口の充実	1	2	3	4

問27. 問26であげた以外に、高齢者対策としてぜひとも必要だと思われるものがありましたら、お書きください。

問28. あなたは親御さんを介護した経験がありますか。あなた自身が中心になって介護した(している)方の番号には◎、介護を手伝った(ている)方には○をつけてください。

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1. あなたの父親 | 3. 配偶者の父親 |
| 2. あなたの母親 | 4. 配偶者の母親 |

問29. 将来、あなたのご家族のだけかが、身の回りのことが一人ではできなくなったり、介護が必要になったとしたら、どのように対処したいとお考えですか。

現在介護されているかたは、現状をお答えください。(○は一つだけ)

1. 在宅で、家族だけで対応
2. 在宅で、家族を中心にしつつ、市や民間の在宅福祉サービスも補助的に利用して対応
3. 在宅で、市や民間の在宅福祉サービスを中心に対応
4. 特別養護老人ホームなどの公的施設に入所
5. 有料老人ホームやケア付き住宅等、民間の施設に入所
6. その他 ( )
7. わからない

問30. では、将来、あなたご自身が、身の回りのことを一人ではできなくなったり、介護を必要としたら、どのように対応してほしいとお考えですか。(○は一つだけ)

1. 在宅で、家族だけで対応してもらう
2. 在宅で、家族を中心にしつつ、市や民間の在宅福祉サービスも補助的に利用しながら、対応してもらう
3. 在宅で、市や民間の在宅福祉サービスを中心に対応してもらう
4. 特別養護老人ホームなどの公的施設に入りたい
5. 有料老人ホームやケア付き住宅等、民間の施設に入りたい
6. その他 ( )
7. わからない

問31. 最後に、あなたご自身やご家族についておうかがいします。

a. あなたは男性ですか、女性ですか。

1. 男性      2. 女性

b. あなたと配偶者の方（いらっしゃる場合）の年齢を教えてください。

- ① あなた      (      ) 歳  
② 配偶者      (      ) 歳      (※該当者のない場合はあけておく)

c. あなたと配偶者の方の現在の健康状態はいかがですか。下の中から一つずつ選び、[ ] に番号を記入してください。

a. あなた      [      ]      ←

b. 配偶者      [      ]

(※該当者のない場合はあけておく)

- |                 |
|-----------------|
| 1. ひじょうに健康      |
| 2. どちらかといえば健康   |
| 3. どちらかといえば病気がち |
| 4. 寝込むことが多い     |

d. あなたが同居している家族はどなたですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

(二世帯住宅も同居を含む)

- |             |                  |
|-------------|------------------|
| 1. 配偶者      | 7. 結婚していない息子     |
| 2. 結婚している息子 | 8. 結婚していない娘      |
| 3. 結婚している娘  | 9. 自分の親          |
| 4. 息子の妻     | 10. 配偶者の親        |
| 5. 娘の夫      | 11. その他 (      ) |
| 6. 孫        | 12. ひとり暮らし       |

e. あなたには、ごきょうだい（ご存命の方）がおられますか。また、何人ですか。

1. いない  
2. いる → 男性 (      ) 人      女性 (      ) 人

f. ごきょうだいのおられる方で、もっとも親しくされているのは、つぎのどなたですか。

(○は一つだけ)

1. 実兄      2. 実姉      3. 実弟      4. 実妹      5. 義理のきょうだい  
6. 親しいきょうだいはいない

g. 現在までで、あなたがもっとも長い期間、従事した仕事はどれですか。(○は一つだけ)

- 1. 管理職（会社、官庁の役員、部長、課長、支店長、工場長など）
- 2. 専門的・技術的業務（研究者、技術者、医師、弁護士など）
- 3. 事務職（一般事務、経理事務など）
- 4. 販売業務（販売監督、販売店員、営業など）
- 5. 運輸、通信業務（電車、自動車の運転手など）
- 6. 技術工・生産工程作業者
- 7. 保安業務（警察官、消防士、ガードマンなど）
- 8. サービス業務（調理師、給仕、ガイドなど）
- 9. 幼稚園・小学校・中学校・高校の教師
- 10. 自営業（家族従事者を含む）
- 11. 農林漁業
- 12. 専業主婦
- 13. その他（   ）

h. あなたと配偶者の方は現在、収入をともなった仕事をなさっていますか。従事している仕事を下から一つ選んで、（     ）に番号を書いてください。

a. あなた	1. している（     ）	2. していない	3. 求職中
b. 配偶者	1. している（     ）	2. していない	3. 求職中

(※該当者のない場合

↑

はあけておく)

<仕事内容>

- |                   |
|-------------------|
| 1. 会社・団体等の役員      |
| 2. 常勤の雇用者         |
| 3. 臨時・パート         |
| 4. 自営業主あるいは家族従事者  |
| 5. 自由業（開業医・芸術家など） |
| 6. 農林漁業           |
| 7. 内職             |
| 8. その他            |

i. さしつかえなければ、お宅の世帯全体の税込みの年収を教えてください。

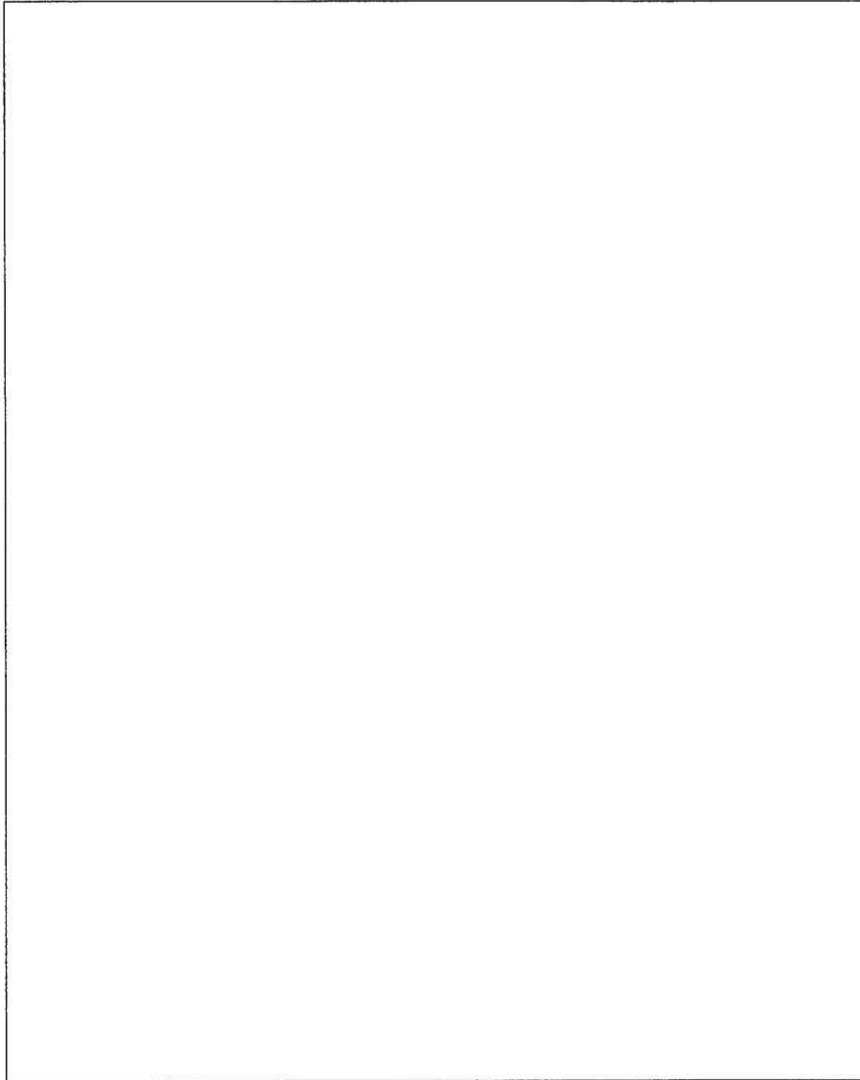
- 1. 200万円未満                         5. 1,000万円未満
- 2. 400万円未満                       6. 1,500万円未満
- 3. 600万円未満                       7. 1,500万円以上
- 4. 800万円未満





◆以上で質問は終わります。ご協力ありがとうございました。

シルバーカレッジについて、日ごろ感じておられることや、この調査についてご意見等ございましたら、ご自由にお書きください。

A large, empty rectangular box with a thin black border, intended for respondents to write their comments or opinions regarding the Silver College and the survey.